
アイドルのフェロモン

SUZUTAKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいドルのフェロモン

【Nコード】

N2678F

【作者名】

SUZUTAKA

【あらすじ】

有能なサッカー部員だった拓都が交通事故で入院。その病院で美人看護師の藤川裕子と素敵な夜を・・・更に驚いたことに、失踪中のグラビアアイドル星野愛も現れて話しは思わぬ方向へ！！本気とも冗談ともつかないエピソードの続出に拓都は耐えられるのか？！

フェロモンの香り1〜8（前書き）

汗と涙と笑にあふれた、疾走感に満ち溢れた青春物語です！！
気軽にぞうぞ

フェロモンの香り1〜8

【P h e r o m o n e , 1 キスの巻】

僕はノートパソコンの電源を入れる。

消灯されて真っ暗闇の部屋に

パソコンの画面の明かりが眩しく光だす。

味気ない部屋にカラフルな光源があたり
別な世界に來たようだ。

ベッドの下に隠しておいたDVDをとりだすとトレイにセット
夕方、悪友の正徳マサノリから受け取ったDVDだ。
正徳の話によるとカナリの上物らしい

静まり返った小さな部屋に
DVDの回転音とパソコンへの読み込み音がカタカタと響く
何故か、その音が滑稽に聞こえて笑えてしまう。

作品がメディアプレイヤーで再生されると
ヘッドホンからは、あり得ないストーリーで進行される物語が
淫らな会話とともに展開されていく。

刺激の少ない

退屈なこの小さな部屋にいる僕には
十分すぎるほど刺激的。

我慢しきれなくなった僕は、ジャージを少し下ろし
後ろにあるテッシュを取ろうと振り返る。

「おわあ！」

僕は、慌ててノートパソコンの画面を畳む
後ろに人が立っていたからだ。

「あら、ごめんなさい 夢中だったみたいなんで声かけそびれちゃ
った。」

後ろにいたのは、夜勤勤務の看護婦
裕子さん。
整形外科病棟で一番の美人だ

「ノックぐらいして入ってきてよあー！」

恥ずかしさを隠すように大声で怒鳴りベットのの中にすべりこむ

「もちろんノックはしたわよお 拓都くん」
「……………」

自分がしていたことを棚に上げ
裕子さんを怒鳴ってしまった。

見られてはいけないものを見られた思いと
恥ずかしさで舞い上がっている。
顔が真っ赤に火照っているのが、手で触らなくても感じるほどだ。

「ごめんなさい 拓都くん 傷ついちゃった わ よね」

「……………」

「返事が出来ないぐらい傷つけちゃったみたい」

そんな言葉を悲しそうな声で裕子さんが言つと
ベットの中に裕子さんの両手が滑り込んでくる。

そして、その両手が僕の頬に……………」

ヒヤッとする手の感触と消毒液の香り
僕の熱くなつた頬と裕子さんの冷たい手が、ゆっくりと同じ温度に
成っていく
僕の気持ちも、ゆっくりと落ち着きを取り戻していく。

不思議な感覚

その時、どうしてなのか解らないけどお

裕子さんの気持ちと僕の気持ちが同じに成っていく気がした。

ゆっくり、布団を裕子さんがめくる

「ホンモノ 経験してみる？ 拓都くん」

「ほっほんものって……」

僕の真上にある裕子さんの顔は
とても綺麗で色っぽくて、真剣だったけど

僕は

気の利いた言葉も経験も持ち合わせていない。

「ぼっ僕っ 経験ないし、上手に出来るかわからないし
突然で心の準備が出来てないって言うかつ 日を改めてと言っか・
」

そこまで言うと、僕の唇が裕子さんの唇に塞がれてしまう。

（もしかしてっ、キスされてる？）

ほんの数秒なのに

何時間にも感じるキス

この病院に来てから、ずっと憧れてた看護婦 裕子さん
今、その憧れの人とキスをしているのだ。

裕子さんの髪が僕の頬にあたり
やさしい花の香り

柔らかくマシユマロのような唇から
裕子さんの体温が伝わってくる。

まじかにある裕子さんの顔

その長いまつげがゆっくり開くと
唇と唇がゆっくりと離れていく

裕子さんは、前髪を少し直して

「おやすみなさい」とだけ言って病室をでていく
何故か瞳には、少し涙が潤んでいる様に見えた。

静まり返った部屋に取り残された僕は

キスの余韻で心臓の鼓動を早めたままだ。

病室の窓を少し開けると、初夏の香りと共に
夜風がするりと忍び込んでくる。

僕はこの時、裕子さんがしたキスの意味を
考えることすら出来なかった。

【P h e r o m o n e 2 幼馴染の巻】

翌日

朝一番の検温が終わると、決まってあいつがやって来る。

【ガガーバタンッ!!】

騒々しく病室の扉が開く

「おっはよーサン♪」

「病院に囚われの身の青少年は、清く正しく勉強に励んだのかしら」

「あさっばらから うっせーなあ 鈴原あ」

入ってきたのは、幼馴染の すずはら 鈴原 あい 藍

運動しか出来ない僕と違って、成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗と根本的にすべてのデキが違っている。

「うるさい とは随分失礼ねっ せっかく朝の挨拶に来てあげたのにさあ」

「扉ぐらい静かに開けろよお 女の子なんだからよお」

「ハーイツ カワサキ タクト先生 気をつけまーす!」

「僕は先生じゃないし……」

鈴原藍はベツトサイドにあるノートをペラペラとめくり始めると

「あゝっ 昨日の宿題 全然やってないじゃん」そう言って拓都に詰め寄ってきた

「けつ検査とか色々あつてさあ、やる暇なかったつーかあ」
ポリポリと拓都が頭をかいて答える。

「いくら沢山検査あつたつて、ノート1ページぐらい目通せるでしょーよお」

「いやっそのお」

「いやそのおじゃないわよお　一緒に卒業出来なかったらどーするの　お　も　お」

真顔で言う鈴原は、結構迫力がある。

僕は迫力負けしてベットの上で後ずさり

「あつれ〜」そう言うつと鈴原は枕の下から素早く何かを抜き取った。

「ジャジャーーーン　何か変なのみーつけたあ〜」

「なっなにすんだよお〜」

鈴原が高だかしく掲げ持っているのは、昨晚の悪友正徳のDVD

「かえせよお!!」

「あれれ〜そんなにムキになっちゃってえ」

「私の推測によると、このDVDにはエッチなものが入っているとみたわ!」

「なななっに変な想像してんだよお」

「こんなのバツ力見てるから、勉強に身がはいらないのよおねー」

「だから違うつつーのお」

「駄目デスっ、これは没収致します」

そこに配膳係りのおばさんがやって来る。

「はいっ朝ごはんですよ」

「おはよう おばさん」

「登校前のデートかいっ お熱いね」

「えへっ」鈴原が照れ笑いした後、僕の方を向き直って

「午後に担任の山形先生っお見舞いに来るって言ってたわよお
そ
いじゃーね」

と一言残してバタバタと病室を出て行く。

（何が えへっ だよ デートじゃねーんだから否定しろってん
のお）

相変わらず騒々しい鈴原が帰り

相変わらず不味い病院食を食べながら

担任の山形先生が来ることを思いユウツになる。

鈴原にDVDを取られてしまったのも気がかりだが

先生が来るほうが、テンションが下がってしまうからだ。

何故かって？

僕が事故って入院した経緯を学校で知っているのは山形先生だけなのだ。

【P h e r o m o n e 3 ガツキーニの巻】

3ヶ月前のことだ

近所にあるマクドナルドに【新垣結衣】似の可愛い子がいると聞きつけ

早速、正徳とマックに向かう。

もちろん、仮病をつかって部活をパスしての計画だ。

僕らの所属しているサッカー部は

県大会でも決勝まで残るサッカー名門校

だから部活顧問の先生も半端じゃなく怖い。

それでも見に行く価値があると踏んでの行動

男と言う生き物は、本当にどうかしてる

ガッキーニ（僕らが彼女に勝手につけたあだ名）のいる
カウンターに並び、早速注文

「メガマックバーガーとコーヒー2セットをお願いします」

「すみません、メガマックバーガーの販売は終了しております。」

「えっそうなんですか？、じゃ ビックマックに変更します
それとおスマイル メガマックスをお願いしますー！！」

「承知致しました、ビックマックとコーヒー ツーセット」

「それから、スマイル メガマックス ツーはいます クスッ」

うおおおおおおっ チョーーーーーカワユス ガッキーニ♪

正徳と僕はボーゼンとガッキー二に見とれていると
早速、ハンバーガーとコーヒーがカウンターに運ばれてくる。

「ハイ お待ちどうさまでしたっ ビックマックとコーヒー
セットですね」

「それと、スマイル メガマックス でーーーーす (^ o ^)
」

どえええー ガッキーニ スマイル メガマックス サイコオオ
ー！！

「たっ たっ たっ 沢山スマイル頂きましたので、少々お返しさせてい
たきます」

【微笑み返し メガマアアーーーークスツ (^ o ^) 】

正徳と僕はそう言って、2人揃って満面の笑みを返した。

ガッキーニを含めたカウンターの女の子たちは大爆笑

すると

「今日、サッカー部 休みだったかなあ」

そんな声が、僕たちの後ろから聞こえてきた。

僕らの前では、ガツキー二が涙を出して笑っている。

ギガントカワユス状態のガツキー二から
目を離したくはなかったが

恐る恐る振り向くことに。

すると

そこには、担任の山形先生がいるではないか

「サッカー顧問の鬼瓦先生に知れたら大変だゾオお前ら」

『げげっ ヤマガタせんせえいい』

「げげっ って何ハモツテルんだあ」

「なっなんかお腹痛くなってきたあ」と僕が言うと

「おつ俺も おお腹が……」と正徳

「カウンター前での漫才してたと思えば、今度は仮病か？」

「そう言うことで、先に帰りまーす」

「鬼瓦には黙っててやるから、明日はちゃんと部活に出るよぉー!!」

「ハーーーーーイ」

ガツキーニと仲良くなりたかったが
僕と正徳は

イソイソとマクドナルドの店内から外に出る。

そのマクドナルドの店先で

僕は黒塗りのベンツに自転車ごと跳ねられると言った
最悪のシチュエーションのオマケつき

後ろで衝突の瞬間を見せられた正徳の証言によると
20mは吹っ飛んだらしい

着地点が畑だったのが幸いして、大腿骨の骨折だけ
頭部等その他には怪我らしい怪我は見当たらなかった。

顧問の山形先生もマツクの店内から

その瞬間を目撃していたらしく

あまりにも綺麗に飛んだんで、ピアノ線で吊っていたんだろっ

と言っていた事を後で、正徳の口から聞くことになった。

まっ そんな感じの運がイイのか悪いのか、ビミョーな出来事があり
僕的には現実ばなれしていて夢のようだったが
3ヶ月たった今

病院に まだ入院しているのは確かなようだ。

【P h e r o m o n e , 4 リハビリの巻】

味気ない病院の食事をすませると
松葉杖を取り、リハビリ棟に向かう。

リハビリと言っても、
薬品の入った小さなジャグジー風呂に浸かり膝を曲げるだけの運動
だ。

リハビリ棟にあるバイブラス室でリハビリの受付を出すと
中から、ピンク色のジャージを着た女の子が出てくる。

「おはよう 川崎くん」

「おっ 吉田さん」

同じリハビリを受けている中学2年の吉田めぐる（よしだ めぐる）
ちゃんだ。

「私の次は、誰も待つてないからスグ川崎くんのばんだよ」

「そつ でどう？ 膝曲がるようになった？」

「うん だいぶイイ もしかしたら2、3日で退院できるかも
だつてえ（＾o＾）」

「よかったねー吉田さん」

（無邪気な笑顔がカワイイッよ 吉田さん、このまま純粹無垢に育
つて欲しい）

そんなことを考えてしまう僕は、やはり欲求不満がタマっているの
だろうか？

毎日サッカー尽くめで発散していたのに

小さな病室に閉じ込められた日々では、間違いなく不可抗力だ。

（までよつ だったら、昨晚の裕子さんの挑発にのらなかったのは

何でだろうか・・・???)

「はい 次の方」

リハビリ室の看護婦に促され、スゴスゴと入る。

ここのリハビリ用風呂は1台しかない。

誰かが入ってしまったら、その薬品風呂に入らざるおえない。

つまり、薬湯は使いまわしなのだ

だから

脂ぎったオヤジやオバサンの後に入ることになったら
ギガント級に最悪。

だけど、吉田さんの後なら喜んで入れてしまう僕は
正に不謹慎。

やはり僕は

欲求不満がタマリ過ぎて変態化しているのかもしれない

下着を脱いで、その薬品の浴槽に静かに浸かると
白衣にハゲ頭の先生がタイミングよくやってくる

黒縁の眼鏡のレンズも厚く

見方によっては加藤茶の酔ばらいキャラにも見えてしまう。

「おはようさんです 川崎君」

そう言つて、浴槽の脇にあるスイッチを入れると
浴槽の薬湯がブクブクと音を立てて泡立ち始める。

「はいっ 手術した方の足を曲げて伸ばして」

毎日繰り返す行ったりハビリ運動をしながら
ふと考える。

この先生って

吉田さんもこんな風にリハビリさせてんだよなあ

て ことは 吉田さんの裸を見たり、足を触ったりしてるのかあ？

もちろん、しなきゃリハビリできないか……。

んー いかん いかん

どうしても不謹慎な方に想像が行ってしまっ

「川崎君」

「あつ はっ はい?!」

「随分膝も曲がる様になつてきましたので」

「なつてきましたので、なっなんでしょうか?」

「後 10日位ですかなっ」

「10日くらいって、退院出来るんですか?!?」

「このまま順調に行けばですが」

「やつやつたあー!!」

退院の話を生から頂いて、テンションを上げつつ
リハビリ棟から整形外科の病棟に戻る。

【P h e r o m o n e / 5 アコースティックギター1 の巻】

僕がいる病室は個室

黒塗りベンツのオッサンが払ってくれているらしいが
どうせ保険が何かで支払っている筈だから同情はしない。

お陰でプライベートは守られるが
毎日が退屈。

楽しかったのは最初の1週間だけだった。

読みたかったマンガや映画も全部制覇してしまったし
DSの携帯ゲームも僕の性格では1日もたなかった。

ちまちました物はスグに飽きるのだ。

見かねた父が、ギターを持ってきてくれた

古びたアコースティックギター

中学1年の時

父のマネごとをして弾きはじめてのだが
高校入学と同時にやめてしまった。

んゝやめた と言うのは正しくないかなっ
サッカーの練習で手が回らなくなったというのが正解

退屈な入院生活には練習時間は山ほどある

最近は自分でもさまになってきたと思うほどイイ感じ
お陰で退屈だった毎日がマシになった。

しかし、しかしだ

夜までは弾くことは出来ないわけであり
いくら個室といっても防音設備はないのである。

もっぱら夕食後は

鈴原の持ってくる授業の写したノートや宿題で
時間を潰す

これでも高校3年生なのであり
勉強は真面目にしくなくちゃいけないのである。

あくまでも それは理想 だったりするのだが・・・
消灯してからは正徳の持つてくるDVD

これが気になって、勉強が

【理想だったり】になってしまふ。

とまあこんな充実？！ した毎日を送っていたのだが
一昨日

ギターの弦が切れてしまい

午前中の時間も持て余しているのが現状だ。

だったら宿題出きるだろって思っちゃうけど
だからこそ何にもしたく無くなる事
みなさんなら、解るでしょ・・・解らないか・・・ハハハッ（汗）

リハビリから戻ると

あつという間にお昼の時間

ここんところ

ワイドショーを見ながらマズイ昼飯を食べるのが日課になってしま
っている。

変態化の他にもオバサン化も進行している様だ。

今日のワイドショーの話題は、

- 温暖化が影響か？イルカの大量死体があ東京湾に！！
- グラビアアイドルとマネージャーの失踪は本当か？！の2本

司会者のテンポよい解説と証言フィルムを使い
結構見てて飽きない作り

暇つぶしには最適の番組なのである。

温暖化の影響で東京湾以外にもイルカや鯨の死体があがっている話は
海面温度の上昇やイルカの習性などを大学教授のデータを使って解
かりやすく

まとめられている。

んゝ明日からは変態化とオバサン化から脱皮して
エコロジー化せねばなるまい

次のグラビアアイドルとマネージャーの失踪の話は

深夜放送でブレイクしている【星野愛】さんが

レギュラー番組をすっぱかして、連絡が取れていないと言う話

マネージャーも連絡が取れないということ

駆け落ち説や妊娠説・海外で整形手術説など

あることないことコメンテーターの妄想で盛り上がっている。

しかし、ホント スタイル抜群で綺麗な人
僕がマネージャーでも駆け落ちしたくなるな 絶対!!
でも駆け落ちする意味あるのかあ

んっ?? 駆け落ちの意味って なんなんだっけえ……?

食事が終わるころになると

母さんが着替えなど持参して現れた。

何時になく暗い表情の母さん、その暗い表情の意味が
冒頭の発言で明らかになる。

「昨日の夜、山形先生から電話がきてね」

「えっ母さんに?」

「そっ それでね」 大学のスポーツ推薦取り消しになったって」

「えっ あ そお・・・」(それでかつ 山形先生が今日来るってん
のは・・・)

「落ち込んでも仕方ないから、気持ち切り替えてね　タクちゃん」

「だいたい予想はしてたよ　だから毎日やってんじゃん　勉強お」

「授業の写し、毎日持ってきているのかい鈴原さんちの藍ちゃん」

「ああつ　毎日ケンカ売りにきている様なもんだけとなつ」

「そんな罰当たりなこと言うもんじゃないよ、退院したらちゃんとお礼するんだよ」

「お礼なんて、あいつの毒舌に毎日付き合ってやってんだから逆にお礼をしてもらいたいくらいだよお」

「イテツ　何すんだよお　母さん」

お母さんに頭を殴られ、拓都が頭を抑えて言い返す。

「鈴原さんちは、お父さんの代わりにお母さんが朝から夜遅くまで働いているの」

だから、家の掃除・洗濯・食事は全部藍ちゃんがやっているのよお」

「だから、何だってんだよ」

「バカだねこの子は、その他に自分の受験勉強とお前の相手をして
くれているんだよ」

「そつ そうなんだ・・・わかったよお・・・母さん」

そして程なくして、俺をはねた黒塗りベンツのオッサンがやって来
る。

毎回、高価な手土産とお詫びに両親はお手上げだが
僕は全然許す気きなんてサラサラ無い。

アイツのせいで

大学の推薦入学も取り消され、普通の受験生の仲間入りなのだ。

だいたいこの男、どうみても普通じゃない

体格は大柄のプロレス体型

妙な日焼けに丸坊主頭は一般人には見えない人種
いったい何ものなんだってんだよお!!

「拓都君、ギター壊れたんだって？」そのオッサンが話しかけてくる。

「あつまぁ 壊れたって言っても、弦が切れただけです・・・」

「ちょうどオジサンの使ってないギターがあってなあゝ」

そう言つて渡されたギターは高価なギブソンのアコースティックギターだった。

「別にいらんです・・・親父のギター 直して使いますので・・・」

「

すると、ベンツのオッサンはそれっきり黙りこくってしまった。

だいたい、ちょうど使ってなかったギターに値札ついてるかってんのお（怒）

母さんがパートの時間だと言って先に帰ると

病室には、ベンツのオッサンと僕だけになり

喋る気ゼロの僕とオッサンの間には異様な雰囲気が漂います。

バツが悪くなつたオッサンは
ギターを置き去りにしたまま帰ってしまった。

おいおいっ　ちゃんと持って帰ってくれよぉ

【P h e r o m o n e 7　山形先生と青木看護師　の巻】

夕方

鈴原が言つてた通り、担任の山形先生がやってきた。

「やっぱり　暇そつだなっ拓都お」

そんな第一声を言つて紙袋からベットのの上にぶちまけられた物は
大学受験必勝法やら合格一直線やらマル秘暗記術などなど、参考書
やドリルの山だった。

「！」

「まーそおー嫌な顔をするなっ」

「・・・・・・。」

「お母さんから聞いたと思うけど、まっ そう言うことだ」

「受験の出願は10月だがセンター試験は来年1月、半年以上ある。まだ何とかなるぞお」

「はゝゝゝそのつもりですが・・・・こんなに持ってこられるとデシヨンさがりますよ」

「マクドナルドでのパワーは、どうしたんだっ【スマイル メガマー―ックス！】なんだろー相方の正徳が居ないと実力発揮できんのか?!」

「それとこれとは話が別って言うか・・・」

「そう言えば、正徳もスポーツ推薦取り消しになってしまったな」

「えっ なんでえ?」

「お前が入院したら、あいつも部活に来なくなってしまったんだよ」

「どっどっして?」

「こっちが聞きたいよ、テッキリ拓都なら知っているとってたん

だがなっ」

「アホかぁ・・・まさのり・・・」

「今年のサッカー部は有望FW二人欠けて準々決勝もあやしいらしいぞぉ」

「まさかつ　僕と正徳ぬけくらいであり得ないでしょ」

「部活顧問の鬼瓦は期待してたんだよ、お前ら2人を」

「へっ?!」

「まっ恋愛も遊びも悪いとは言わないが、一時の迷いで一生棒に振らないようになっ」

「わかってます・・・」

「まっ　そう言うことだ。」

決まりゼリフの【まっ　そう言うことだ】で締めくくり山形先生は帰っていった。

一息つく間もなく、夕方の検温の時間

小太りの看護師 青木さんがやって来て

体温計を僕に手渡しながら得意のお喋りが始まる

「リハビリ順調なんだってね、このまま行けば退院もう直ぐよね
拓都くん」

「誰から聞いたんですか?!」

「あらっ青木の耳は地獄耳って言って、何でも聴こえてくるのよ
ホホホッ」

「普通 そー言うのは自分から言わないと思うんですがぁ・・・」

「普通じゃないから何でも聴こえてくるのお たあくうとおくん」

「オエッ キモチワルイ喋り方」

「36度1分っ平熱ね、若いんだからもっと体温高くてもイイのよ
お エルネギッシュにね」

「・・・・・・・・・・（汗）」

「あつそうそう、婦人科病棟の人が拓都君のギター聴きたいそうよ」

「えっ ダメですよ今ギター無いから弾けないし、聞かせるレベルじゃないですから」

青木さんが、ベットの脇にあるオッサンが置いていったギターを横目で確認して

「オホホッ 明日のお昼なら大丈夫と伝えておきまするう」

「こつこのギターは、僕のじゃないんですよー!!」

聞こえない と言った素振りで病室から青木さんが出て行く
そして、扉から顔だけ覗かし

「結構、美人よ その人っ 私には負けるけどおねっ ホホホホッ」

美人で青木さんには負けるって、どんな人だよお

美人って言ったら、ヤッパリ裕子さん

藤川裕子さんだよ!!

あーーー昨日の晩の事を考えただけでドキドキする。

今日の夜勤も裕子さんだったよな

【P h e r o m o n e 8 星野 愛 の巻】

夕食前に登場する2人

鈴原も正徳も今日は珍しく顔を出さなかった。

誰も来ない、ギターも弾かない時間がゆっくりと流れる。

「あー超ヒマなんですけどお」

今さらながら2人の偉大さに気づく

あまりにもヒマで

ベントのオッサンの置いていったギターを手に取っ手しまった。

僕は なんて節操がない男なんだ・・・

「ふん 結構イイじゃん」

ネックの持った感じや腿に乗った収まりの良さに、思わず関心してしまう

左手でコードを押さえて、右手で弦を弾いてみる

【ボロロン^ん】

「いい音色……」

ギターが奏でる綺麗な音の響きに戸惑ってしまう

今まで使っていた親父のギターとは、かけ離れた音色 (ギブソン
ってスゲー!!)

音色の余韻に浸っていると

「トントントン入ってもイイかしら」と病室の外から声がする

「あつ ハイ どうぞお」

病室に入ってきたのは

白いリーボックのジャージと帽子を身に着けた女性

ジャージをスタイリッシュに着こなしているのか
何故か見とれてしまう。(カッコイイ)

「何でしょうか？」

僕の知らない人の訪問に戸惑いつつ問いかけてみる

「明日のお昼つて、青木さんに聞いたんだけど 今日の今じゃ
フ ライングだったかしら」

「ああつ 婦人科の……」

「良かった 話がとおってるみたいね」

「青木さんにも話しましたけどお 今 ギターが無いんで弾けませ
んよ」

僕がそう言つと、その女性は僕のいるベットに腰を下ろし帽子を取る
「これは 何かしら ふふっ」左手でギターを軽く撫でられる

帽子を取ったその女性は
昼のワイドショーで話題のグラビアアイドル【星野 愛】そっくり
だった。

「うわっ！　でたあ」

「なによあ　それっ　オバケでも出てきた驚きようね」

「ほっ　ほ　ほしの・・さん・・ですよね？」僕はアタフタしながら
声を絞り出す

「それは芸名、佐藤愛　これが本名よあ」

「！！！」

「この病院では本名で呼んでね、病院の看護師さんには星野愛のそ
っくりさんとおしているんだから」
そう笑顔で答える星野愛

この人はホント笑顔が似合う

間近にいる芸能人

それも超綺麗で話題の人にリアクションできずに固まってしまう。

「あっあっあー」僕の口から言葉にならない声

「そんな畏まらないで、私も同じ人間よあ ふふっ」

「だっ大丈夫なんですか？ お昼のワイドショーで探しているみたいな事いつてましたよ」

「大丈夫じゃないかもねー でも、川崎君が黙っててくれれば大丈夫かもよあ（＾０＾）」

「えーーーーーっ そうなんですかあ」

「ふふっ 冗談よあ」

「それより それ弾いてくれないかなあ」

「このギターは僕のじゃないんですよ」

「ふーん さっきの音色は そのギブソンくんからだと思っ たわ」

「いや あ の そっそれは・・・」

「まっイイわっ でも チョット忠告させてもらっけど」

「・・・」

「川崎君がどお思っていていようと、楽器は奏でる為にあるのよ」

「……」

「もしそのギターが川崎君や他の人の考えで、一生弾くことがなくなったら」

「……」

「何のために作られたのかって思わない？ 可愛そうだと思わない？！」

「もし そうなったら、悲しいと思わない？」

「……」

「だって そのギブソンくんには、何の罪はないのよ」

星野さんがそう言い終わると

僕の脳裏に、さきほどのギターの音色が蘇って来る

（あの音色って・・・嬉しいって言ってたのかも・・・）

僕は無条件でそう感じていた。

「夕方に弾いてるヤツでいいですか」僕がポツリと言った

星野さんは笑顔でコクリと頷く

病室の窓には、夕焼けの赤が妙に鮮やかに写りこんで幻想的な空間
そんな病室の中で、ギターの奏でる音が僕と星野さんを包み込んで
いく

（このギター・・・なんてセツナイ音色を奏でるんだろう・・・）

弦を弾く微妙な強弱を忠実に

そして語るように響かせて・・・ギターが鳴いていた。

「いい曲ね・・・川崎君が作ったの？」

「はいっ でも まだ未完成と言うか・・・完成した曲では無いんです」

「ふん・・・ありがとう、また聴きにきてもイイ？」

「あっ はい もちろん」

星野さんが病室を出て行く

現実離れた出来事に、気持ちの高揚が止まらない

窓を開けて外の空気を吸うと

外の風景は鮮やかな夕日の赤から黒い夜空にかわり、星が瞬きはじめていた。

落ち着きを取り戻し、ベットに戻ると星野さんの座っている場所に
温もりが、まだ残っている

彼女が この部屋に居たことを主張しているかのように……。

フェロモンの香り1〜8（後書き）

http://www.webstation.jp/syou
setu/rank.cgi?mode="rlink&i
d="4195

フェロモンの香り9

【ドナルドの巻】

気がつくと夕食の時間

今日の夕食は、相変わらず

豆と葉っぱ系の食材、通常の僕なら一言

「若者の夕食なんだから肉をオカズに付けろってんのお」
てなあボヤキの一つは吐いていたはずだ。

今の僕には、そんなボヤキの言葉など吐く余裕はなかった・・・

昨日の晩の出来事や先ほどの出来事など

連続して起こる現実離れたことに整理がつかないほど頭がイカレ
ていたのだと思う。

そんなボーッとしていた顔がニヤけていたかどうかは定かでないが
食事が終わるころに、正徳が病室に入ってきて

一言目がこれ

「何、ニヤけてんだよ」

ハッ和我にかえると大きな荷物を抱えた正徳が立っていた。

「正徳っ 何時の間に・・・」

「何時の間につて、ちゃんとノックして入ってきただろ、エロイ事でも妄想してたなっ拓都」

くぐっ 凶星だ、さすが正徳

「それよりワルイツDVD 鈴原に持ってかれたあ」

「学校で聞いたよ、鈴原に・・・」

「ごめん!!」

「いいよ別に、沢山あるから」

「・・・・・・・・たくさん(汗)」

「夕飯前の時間に来なかったから、今日は来ないと思ったよ」

「色々支度があつてなっ」

「支度・・・・？」

「ところで、拓都 もう歩けるのか？」

「松葉杖なしでか？ 大丈夫だと思うけど ちょっち不安かなあ」

「そうか・・・」

「まっ松葉杖1本あればかなり安心して歩けるけどな」

「ヨシっ なら行くか！！」

「行く・・・？」

そう言うとき正徳は持ってきた荷物の布袋を取り始める。

中から出てきたのは、マクドナルドにあるドナルドの人形だった。

「なっ なっ なんだあ」

「ドナルドだ！」

「みりゃわかるよっ こんな特徴ある人形」

「マニアなら飛んで喜ぶ、直立型の دونالد様だ!!」

「へっ……………」

「現在の Donald は、ベンチに座っているタイプの Donald がほとんどなんだ」

「だから なんだってんのお」

「いまや直立型は入手困難、だから超レア物なのよぉ」

「ん〜？ レア物はワカルけど。その等身大人形を病室の置物にするってんですかい正徳殿」

「まあ見てなつて!!」

僕がベットから降りると、正徳はその Donald をベットに寝かせて、掛け布団をかける。

「どうだっ 拓都が寝ている様に見えるだろぉ エッヘン!」

「おおっ確かに…………って何でだよ（怒）」

「病室脱出計画だ！」

「病室脱出計画・・・？」

「病室で一人モンモンしている青少年を清く正しい精神に戻すためサア」

「おお それはアリガタキ幸せ」

「だったら、サッサと着替えて この幸せヘルメットを装着しなっ
！！」

「ラジャー」

着替えながら

正徳のスポーツ推薦取り消しの真相を確認

正徳の親父さんの体調が思わしくなく

家業の酒屋を早々継ぐことが決まったのだそうだ。

早々に後継ぎが決まった親父さんから

欲しかったバイクをプレゼントされたってわけ♪

そのバイクで僕を迎えにきたのだ。

僕も正徳も中型の免許を持っていたがバイクまでは買えなかったから超嬉しいはずだ。

えっ サッカーの部活しながら中型免許取ることなんてムリでしょ？！

意外と無理じゃないんですよ これがっ
部活しながら免許取る話は、ちよっち長くなるので
また別の機会に

今日の夜勤看護師は、裕子さん

無断外出が、ばれることは無いと思ったが
ドナルドの顔に0時まで戻りますと念のためメッセージを貼り付け
消灯前に病室を出る。

「何だよ正徳っ バイクって400じゃねーのかよ」

「ウチの親父のヘソクリじゃ 100 CC 止まりじゃねえ」

「んゝまっ2コ乗り出来るだけましか・・・」

マフラーの音とは反比例してスピードが出ないバイクにまたがり
正徳が向かった先はライブハウスだった。

フェロモンの香り10

【彼女の巻】

ライブハウスに到着すると

アマチュアバンドのライブを数グループ演奏予定のイベント

その演奏者に先輩バンド【ブービートラップ・ファンキーマガジン】
があった。

「なるほど」メットを外しながら僕が頷く

「大学に行っても先輩たち、まだ やってると思わなかったろ」

「ああっ驚きだっつか、あの3人の演奏をまた見れるとは思わなかった」

ラブハウス脇のスペースにバイクを止めて、入り口に向かうと
入り口前に、背の低い女の子が声をかけてくる。

「おそおーい まさちゃん」

「えっ ガッキーニ?!」僕は驚いて、正徳の顔を見る

「えへへへっ」

「えへへって、正徳 ガッキーニと付き合ってたのお（驚）」

「ちょっと言いそびれてましたあゝ」

「マジかよっ!」

「まさちゃん拓都さんに話してなかったのお」

二重の瞳をクリクリと動かしながら、甘えるように正徳に聞く

「ごめん拓都、例のマツクのガッキーニこと 由美ちゃん」

「はじめましてって言うか2回目かなっ由美ちゃんデス（＾o＾）
／」

「あつ 川崎 拓都です よろしく」 しかし笑顔カワユス、ガッ
キーニ

じゃなかった 由美ちゃんか・・・

僕に黙って付き合いやがって正徳のヤツ

悔しいぞお って言うか、2人の熱々ぶりを

これから見せつけられるかと思うと嫌になってしまっ

「正徳」っ これじゃ僕がお前らのデート邪魔してるみたいじゃねえ」

「何言ってるんだよ拓都 お前の彼女も呼んどいたんだぜっ」

「僕の彼女お・・・？」

意味不明の発言をした正徳に促され、ライブハウスに入店

照明を落とした店内

微かにスモークの香りが漂う

開演時間も迫っているのか結構な客の数

ほとんどが先輩バンド【ブービートラップ・ファンキーマガジン】
目当てのようだ。

僕たちの母校出身ということだけでも、何か鼻が高いぞお

正徳が店内をキョロキョロと見わたす

「あつれ〜オカシイなあー 来てないみたいだ・・・」

「来ていないって、誰がよお」

「お前の彼女っ 鈴原だよ」

「なっ 鈴原って 僕の彼女だったのっ!？」

「あれーっ 違ったのぉ てっきり デキてんのかと思ってたよぉ」

「正気か正徳っ だって鈴原だよ あの毒舌鈴原だぜっ」

「正気かって正気だよ 3年の男子では人気高いぜ 鈴原ぁ」

「鈴原がかっ……………」

「あぁっ お前がいなければ結構な人数コクってんじゃねーたぶん」

「マジで……………」

「俺も由美ちゃんと付き合わなかったら、100% 鈴原 派 だ
けどな」

「嘘だろぉー」

「灯台下暗しなんだよなっ 拓都は、最近の鈴原は胸も結構膨らんできて色気も出てきたツーか ちよっとした学園アイドルだよ あいつ」

「……ホントかよ?!」

「なに2人でヒソヒソ話してんのぉー」

僕と正徳の腕を掴んで、演奏舞台前まで人だかりを押しわけガツキー二が進んでいく

程なく最初のバンド【怒れポンチ】の演奏がはじまった。

フェロモンの香り11

【うそつき の巻】

鈴原 藍の住むマンション

ガチャ

「ただいま〜って、誰もいるわけなかったか」

ポストから取ってきた郵便物をチェックしながらリビングに向かう。

「何これ（驚）」

鈴原が封を切ったのは、ムジテレビ主催のコンテスト

【キラリン美少女を探せ！！】の書類審査合格の知らせだった。

「人の個人情報を勝手に使って、誰がこんなもの出したのじゃ」

テーブルの上に郵便物を無造作に放り投げ

急いで部屋に向かおうとすると、バスルームからシャワーの音

あれママ帰ってたんだ。

ライブハウスに行く予定の藍は、開演の時間が迫っているので母親に声をかけずに、制服から私服に急いで着替えた後軽くヘアースタイルを直そうと洗面台に向かう。

すると

バスルーム沿いの通路には、母親が脱ぎ散らかした服やバックが散乱している。

母親が仕事に詰まると何時もこの調子

藍はヘアースタイルを整えて、散乱しているものを掻き集め拾った衣服をランドリーボックスに入れながら、溜息をつく。

すると、バスルームから母親がひょっこり顔を出す。

「藍 お帰り」そう言って浴室から出ると毛足の長いタオルを髪の毛に巻きつけ、チャコールカラーのガウンを羽織る。

高校生の子供がいるとは思えない、綺麗な体のライン

母親は地球環境など自然科学を取り扱う大学の教授
最近では環境コメンテーターとしてTV出演もこなしている
綺麗な体のラインはテレビ映りを気にしているのだろうか・

「ママあ 今日事務所に缶詰じゃなかったのあ？」

「家に資料を取りに戻っただけよ 藍の顔も見なかったしね」

そう言つと母親は、鏡に向かいドライヤーで髪をブローし始める。

テキパキと物事を進める姿と床に散乱している靴を見比べて
母親の男つばさに、また溜息をつく

藍自身の行動に思い当たる節が沢山あるからだ。

乱雑に放り出された母親の靴を床から取り上げると
靴の間口が大きく開き、便箋が ハラリと落ちる。

（何かしら・・・）

母親にむけられた手紙のようだった。

手紙を畳んで鞆に戻そうとテーブルにひろげると
その手紙の文末にふと目がいつてしまう

【藍と3人でやり直さないか?】と言う文章で締めくくられている。

差出人は 毅志^{たけし}

母親から死んだと聴かされている父親の名前だ。

(えっ！)

鞆の中の封書を確認すると差し出し住所はなかったが
消印は5日前

「どう言つこと?..!」

困惑状態の藍とは対照的に
バスルームから鼻歌交じりで母親がやってくる。

「ママあ!..! この手紙 どう言つことお!..!」

引きちぎれんばかりに手紙を両手で掲げ
母親に詰め寄る藍。

母親は一瞬驚いた表情になるが、直ぐに冷静に

「そんなに興奮しないで藍、誰かが悪戯して送ってきた手紙よ」

「嘘よお！！誰がそんなヒマなことするって言うのよお！！」

「TV出演とか多くなって来ると、よくある事みたいなの ホント
困っちゃっわ」

「よく、そんな嘘を咄嗟に思いつくわよねー」

「嘘じゃ ないわよお」

「絶対嘘よお ママの嘘つきい！！」

藍は手紙を握り締め、マンションを飛び出した。

「うそつき！！」

「うそつき！！」

「うそつき！！」

「うそつき!!」

「うそつき!!」

「うそつき!!」

「ママの大うそつき————!!」

興奮状態で早足で歩く鈴原

それでも足はライブハウス向かっていく

その鈴原の後を怪しげな2人組の男が後を着けていることも知らずに

フェロモンの香り12

【誰か助けて の巻】

バンド名が【怒れポンチ】とは誰がつけたのだろうか？

演奏がイカレポンチだからだろうか？

あまりにもグルーブ感の無い演奏とボーカルの絶叫の多さに
僕のテンションが下がったままなのは言うまでもない。

隣の正徳とガッキー二こと由美ちゃんは、肩を揺らして
辛うじて、この演奏についていている。

愛の力がそうさせるのか・・・？

3曲目に突入した時点で、正徳に一声かけてトイレに向かった。

本気で演奏に耐えられなかった訳でもなかったし、別にトイレに行
きたかった訳でもない。

来る筈だった鈴原が来ていないことが気になっていたのだ。
とは言うものの アテがある訳でもなく結局トイレに向かう。

歩きながら

松葉杖が必要ないほど回復している事に気づく

(結局、普通に歩けんじゃん・・・)

トイレを済ませ、出口脇の自動販売機で瓶のコーラを発見

(瓶のコーラ 目面しいじゃん) そう思い早速購入

【プシュ】と心地よい音を上げて王冠を抜く

ひとくち 口に運ぶと

瓶コーラならではの強烈な炭酸とコーラ独特の香りが気持ちいい

(あゝあつ なんかないほうが良かったかなあ)

コーラの爽快感とは裏腹に、そんな後悔の念がひよっこり顔をだす。

販売機の隣にあるベンチに腰を下ろし

このまま帰るか思案してみるが、正徳の好意に水をさすようで決めかねてしまう。

僕はこんなに優柔不断だっただろうか・・・

そんなことを考えながらコーラを飲んでいると

トイレ対面にある倉庫から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「いい加減にしてよっ ブッ殺すわよっ！！」

（ブッ殺す？ 随分物々しいなあー）

僕は倉庫の扉を少し開けて、様子を伺うと

「！」

そこには、男2人に羽交い絞めにあっている鈴原がいた。

「あんたたちっ！ こんな事して警察が黙っていないわよあー！！」

「けいさつうゝ そんな人、ここに居ないみたいですけどお？」
鈴原の両腕を後ろから羽交い絞めをしている男が、もったいぶる様に言葉を吐く。

「今いなくったって、ここの騒ぎを聞きつけて誰かが来るわー！」

「へゝっ 只今 大音量でライブ開催中でございます。」

鈴原の前に立っている男がおどけて言う

「そつ 誰にも聞こえませゝん」続けて羽交い絞めしている男

そついい終わると鈴原の前に立っている男が、ブラウスを前からボタンごと引きちぎる

全てのボタンが床にパラパラと音を立てて飛び散り

胸元のブラが丸見えになってしまう。

それを見て顔色を変える鈴原

もがきながらブラウスを引きちぎった男にケリをいれようとするがあっさりかわされてしまう。

「ちくしょおー ちくしょおおー ちくしょおおー」

両足をジタバタと動かして暴れまわる鈴原だが、前の男にかすりも

しない。

「ふっふーんっ 顔に似合わず 結構なじゃじゃ馬さんですなあ」

前にいる男が、
鈴原の両足をアッサリと掴んで足の自由さえも簡単に奪ってしまっ
た。

「こんな娘って、オレっ結構燃えるかも ククッ」

「オレーもお 燃えちゃうっ 燃えちゃう」

その2人は羽交い絞めにした手と足を保ちつつ
巧みに上着やスカートを脱がしはじめる。

「誰か助けてえ！！」初めて悲痛な声で鈴原が叫んだ。

フェロモンの香り13

【乱闘（その1）の巻】

すると、扉がバタンと大きな音たてて開く

「随分つと楽しそうなお遊びですねー鈴原殿」

「たつ拓都お！！ どうしてここにいるのよお」

『なんだああーおまえっ！！』鈴原を悪戯しようとしている男が双方 凄んで叫ぶ

「この状況だったら、正義の味方ですかねー僕っ?！」

『はあゝっ』羽交い絞めの男たちが顔を傾けながら振り向く

「なっ何冗談言ってるのよお 拓都お早く助けなさいよお!！」

「ちっちっちっ 助けて下さい 拓都さま でしょ?！」

拓都がそう言い終るとコーラをグビリと一口飲む

「この状況見ればワカルでしょ 冗談じゃないんだってばあー」

「助けてください　たくとサマ　と言ったら助けてあげてもいいんだれけどおね」

「ちよつとお拓都お　いい加減にしないと怒るわよお」

「怒る元気があるのなら、助ける必要ないみたいだね」

拓都がそう言つて、倉庫の扉を閉めはじめる。

「ちよつちよつとおく私のことを一生守るつて言つたじゃないつ拓都のバカアーー！！」

真実味のある口調で鈴原が叫ぶと　再度、扉を開けて拓都が顔を出す。

「そんな事　何時　言つたつけ？」

「へっ……よつ幼稚園」

「よつよつちえん？」

『ごちゃごちゃウルサイ奴らだのおー』

鈴原の足を押さえていた男が足から手を離し、拓都に向かって駆けてくる。

走りながら繰り出された右側から来るパンチを
肘で受け止めると体ごと飛ばされそうな勢い。

この男 結構 力が強い。

脇が空いた右側に素早く滑り込み、男の足元をすくおうと
手術してない足で蹴り込むがビクともしない。

逆に、立ち上がる前に腹に蹴りをいれられて
壁に積まれているダンボールまで飛ばされてしまう。

【ドッガア！！】「痛つてえーっ」

ダンボールの蓋が開いて中に入っていた衣装がもそもそと拓都のと
ころに落ちてくる

相手が強いんじゃないかと
3ヶ月間運動していない僕の筋力が激減しているのかも・・・

過激なサッカーの練習していたこともあり、身体能力には自信があ
ったので

思いつきりショックだ。

運動しか取り得の無かった僕から、身体能力を抜き取ったら何が残ると言うのだろうか。

僕に蹴りを入れた男は、すかさず近寄り

胸ぐらを掴んで、顔にパンチを繰り出してくる。

僕は咄嗟に、相手の男の顔面にヘディング

体力が落ちても、唯一変わらない箇所がここだ。

『ぐお』

見事、顔面にヒットして、男の鼻から鼻血がドバドバと噴出す。

「ナイス拓都お そんな鼻血男、とつと片付けちゃってよお」

男は鼻を拭って手に付いた血を見ると逆上

『うおおおおー』

猛烈なスピードで襲いかかる

僕はサッカーで鍛えたフットワークで男の攻撃をかわす。

かわす？

かわすハズ だった。

手術した側の足に体重を乗せたとなん
体が傾く（ヤバッ こける）

殆んど使っていない腿筋が強烈な加重に耐え切れなかったのだ。

【ズターン】 「痛っ！！」

『バカかお前っ』 拓都の腹に数回蹴りを入れ、男は拓都の頭に足を
乗せ唾を吐く

それを見て鈴原は、足をジタバタさせながら男に向かって凄んで言う

「ケガ人相手に本気だしてバツカじゃないのお 拓都がケガしてな
かったらあんた達なんかケチヨンケチヨンなんだからね！！」

『この状況をわかってないようだね、現在 主導権はオレたちにあるんだよ お嬢ちゃん』

フェロモンの香り14

【乱闘（その2）の巻】

へへっ 早く やっちまおーぜ アニキ」

『そう焦るなっつ 久しぶりの上玉なんだからよお』

『シゲルの情報も捨てたモンじゃないのお』

「シゲルっ？ シゲルってウチの高校のシゲルなのかあ？」

そう言って倉庫の入り口に現れたのは、正徳

「まさ君っ！！」 鈴原の表情が明るくなる

拓都の頭に足を乗せていた男が振り向く前に、正徳が男の背中に体当たりする（ドカツ）
するとその男は、蹴ってくださいとばかりに鈴原の前に転がりこんだ。

「こんにやろお！　こんにやろお！！　こんにやろお！！！」

待ってましたとばかりに、鈴原が高速で　その男に蹴りを繰り出す。

『おのれらぁーーーー！！！！』

鈴原を後ろから羽交い絞めにいる男が、鈴原を後方に放り投げると

何時の間に回りこんだのか、拓都が鈴原を抱きとめる。

「キャッ」

「おつとつとお」

拓都に抱え込まれると、鈴原の顔が拓都の顔横に納まる。

「あつ　ありがとお・・・」

照れた表情で礼を返す鈴原、すると

「結構　重みがあるもんなんですねえ」　と拓都

「なによお失礼ねっ　これでも標準体重よお　」

「体重じゃなくってサッ」と意味深に拓都がかえすと

「じゃ　いたいなんなのよお　（怒）」と鈴原が怒ってかえす
そこで拓都が目で、鈴原の胸を指すと

そこには、抱きとめた時に鈴原の胸を押さえてしまった拓都の手が
あった。

「バツ　バツカじゃないのぉ　この変態　タクトオ!!」

抱き込まれた自分の体を拓都から速攻で離して、真っ赤になって怒
っている。

「ちょっとお、その2人 イチャついてないで加勢して欲しいんですが」

先ほどの2人相手に悪戦苦闘している正徳

中学時代に柔道部だった正徳でも2人相手だと、さすがにつらい。僕と鈴原が加勢して、約10分

この乱闘も

鈴原が

2人放った強烈な急所キックで幕を閉じること

「ざまーみやがれっ てんのよお!」

手を両脇において、全部自分でやっつけたとも言つ勢いの鈴原

「さてとお どうしますか 拓都くん」

【数日すると仕返しにくるぞおコイツラ】と正徳が目で訴えかけてくる。

僕は暫く考え込むが、倉庫内を見わたし崩れたダンボールをみて良案が浮かんだ。

蓋が開いて出てきた衣装 【バニーガール♪】

その衣装に2人を着替えさせ記念撮影、これで今後の活動に終止符をうつつ作戦だ。

「今度つきまっとなったら、日本中にばら撒くわよっ」

そう言って、バニーガールの衣装を着た2人に再度 急所キック繰出す鈴原

『うおっ!! (激痛) 』

そんな鈴原の行動を無視するかのように正徳が

「なつ 拓都 言っただろう?!」と目で鈴原を指して言ってくる。

「ああつ 確かに胸 デカかったよお ビックリだ」

そう発言したとたん、鈴原が僕たちの方を振り向く

「なんかエロイこと言ってなかったー そのの ふたありいー（怒）」

「いえっ 何も言っておりません（汗）」と怯えてかえす僕と正徳
「そんなことより、これ着ろよお」僕はトレーナーを脱いで鈴原に渡す。

はっ？ と言う表情の鈴原に対して、正徳が鈴原の胸元を指差す

「ギャーーーーー！！！」

剥き出しのブラを見て、鈴原が真っ赤になって奇声を上げたのは意外だった。

（正徳っ 前に言った、鈴原に色気がでてきたってとこ 訂正してくれない？）

（いつ 今すぐ訂正させていただきます。）

僕は、そんな会話を鈴原に聞こえない様に会話した。

フェロモンの香り15

【キラリン美少女を探せ の巻】

先輩バンド【ブービートラップ・ファンキーマガジン】の演奏は最高だった。

他のバンドとは一線をひくグループと演奏

何といつても

ギター兼ボーカルの瀬川さんの声が独特の雰囲気で、聴く側を巻き込んでいく

もちろん、的確にそして安定感のあるベースの中島さん
女性なのにパワフルで音抜けのいいドラムの小林さんが脇を囲んでいるからなのは
言うまでもない。

演奏終了後、先輩たちと少し会話をして
ライブハウスを後にする。

このまま打ち上げに、なだれ込みたかったが
帰ることにした。

アルコールを飲む年齢じゃない僕らには、別世界の空間に思えたからだ。

ガッキー二も含め、鈴原のおごりで4人で食事することに。

「おごりつてマツクかよ 鈴原あゝ」

「あんたたちが、もっと早く助けに来たらモスにしても良かったんだけどお」

そう鈴原が言った後

ガッキー二がマツクの良いところを演説なみに解説し始めた。

さすが、マツク バイト暦3年

「ところでさあゝ、ムジテレビに誰か書類送ってなかったかしらあ」
顔を伺う様に、鈴原が淡々と喋ると、正徳の表情が微妙に変わる。

「やっぱりつ まさ君ねええーっ!!」

鈴原は怒って、立ち上がると、正徳は興奮して

「きつ キラリン美少女を探せ！！ ホントに書類審査を通ったのかっ？！」

正徳も席を立って鈴原の手を握る。

「なんか そんな手紙が届いてたわよね」

あまりにも興奮して喋る正徳に、呆気にとられ、ぼそぼそかえす

鈴原

「何だそりゃ キラリンびしょびしょ・・・???」

「拓都お 聞いて驚くなっ あのムジテレビの超人氣番組・・・」

この後、書ききれないほど【キラリン美少女を探せ！！】の書類審査を突破する難しさ

最終合格者のCM・ドラマの起用率など、くどくどと力説されてしまふ。

鈴原も僕も正徳の勢いに押された感じで

口を挟むどころではなかったことを書き添えておく。

ただ、ガッキー二だけは正徳の演説?!をニコニコしながら聞いていられたことが奇跡だった。

正に愛の力なのだろうか………？

「言っておきますけどお　わたしは絶対行きませんからね」

「えっ　マジでえ勿体ない！！　最終審査にあの如月英治や坂本あけみが居るんだぜ」

「ふーん　そうなのお？　興味なあゝい」

正徳の鼻息の荒い喋りとは裏腹に、そっけない鈴原

TVドラマを数本かけ持ちしている如月英治は、僕でもわかる売れっ子俳優

最近、月9などで色男ぶりを見せつけている。

坂本あけみは、昨年発売された携帯オーディオプレイヤーのCMに起用された

バックダンサー【ミルク・ザ・Dカップ】の一人
4人いるダンサーの中で、飛びぬけた人気ぶりだ。

「うわぁー凄いじゃないですかあ　鈴原さん」

二重の瞳を更に大きくしてガッキーニが羨ましそうに喋る。

「その二人を見に行くだけでも最終審査に行く価値あるんじゃないの
のぉ」

フライドポテトを頬張りながら僕が口を挟む。

「拓都にまで薦められると思わなかったわ」不機嫌な口調でかえす
鈴原

この時 僕は

最終審査に行くように薦めたことを、あとで後悔するとは思わなかった。

フェロモンの香り16

【マネージャーの巻】

病院に戻ったのは、23時を少し過ぎたくらい。

無事気付かれずに病室に帰還

身代わりの دونالد もベットに横たわっている。

夜勤の裕子さんが夜の見回りに来るまで、起きていたかったのだが
久しぶりの外の世界と激しい運動?! で疲れていたのだろう
朝の検温の時間までグッスリ熟睡してしまった。

「どうしたの お 拓都くん」

翌朝、看護師の青木さんによるマシンガントークで起こされる

昨日の乱闘でついた顔の小さな傷を根掘り葉掘り聞かれることにな
ったのだ

- - - - -

その日の昼食後

僕の病室に星野さんが また現れた。

「お昼寝する時間だったかしら (笑)」

「いえっ 大丈夫ですよ (笑)」

すると

笑顔で喋る星野さんの後ろから、スーツ姿の男が顔を出す。

男の登場に少し驚いた表情をすると

「私のマネージャー 長谷川 修 (ハセガワ オサム) ヨロシクね」

「あっ 駆け落ちの人お・・おおっ」咄嗟にワイドショーのネタが口からでてしまう。

すると星野さんの後ろで、マネージャーの長谷川さんが必死に笑いを堪えている。

「笑っちゃダメよ長谷川っ 世間ではそんな風に私たちをみているのよ」

半笑いで答える星野さん

「この子が、愛のお気に入りくんなのかい？」

業界風のデザイナーズ眼鏡を直しながら長谷川が聞く

「へっ お気に入り・・・？」僕がポカンとした表情をする。

「お気に入りなんて失礼よっ、川崎君とはお友達よねっ」

「おっ お友達と言っても昨日会ったばかりですけどお」

「【一度会ったら星野の友達】って愛のデビューキャッチコピーだったよなっ」

長谷川さんがボソッと発言

「何年前の事言っちゃってんのお (笑)」

僕と星野さんは顔を見合わせて笑ってしまう

マネージャーの長谷川さんは、見た目と違い気さくなひとだった口数は少ないのだけど、いいタイミングで面白いことを言ってくる。

こんな人が、星野さんを幸やわせにできる人なんだと心底思う

「愛が看護師の青木さんに、ギター弾いている人が誰かって聞いた
だけなんだろう？」

ベットサイドに置いてあるギターを品定めする様に確認しながら
長谷川さんが星野さんに聞く

「そうなのお そしたらその15分後には直接会って弾いてくれる
って言ってきたのよお」

「えー僕っ そんなこと言っていないんですけどお」

「青木さんが芸能リポーターだったら、芸能界は崩壊するなっ」
また、ポツリと長谷川さん

「バカね長谷川っ 川崎くんにふれ込まないでえ」
星野さんの目じりは緩んだままだ。

「ねえ また弾いてくれないかなっ 昨日の曲」
「自分も聴きたいなあ」顎を右手で撫でながら興味深げな長谷川
さん

「長谷川はマネージャーをする前は、曲のアレンジャーをしていた
のよお
未完成の曲にアドバイス出来るかもね」

「アレンジャー・マネージャー・電子ジャヤー」と長谷川さんがまた
ポツリ

「……たまに、外しネタもあるから注意して 川崎くん（プツ）」

「ぶはっ（笑） 了解です。」

外しネタの発言は、僕が力んでギターを弾かないように計算された長谷川さんの技だったことを後で知る。

お陰で今日の演奏は昨日以上のデキ

綺麗な、そしてセツナイメロディーがギターの弦から溢れ出す。

一通り弾き終わると長谷川さんが、「凄くいいね〜うん、いいよ川崎君っ でも……」

「でも？ でもってなによっ 長谷川っ、こんなにいい曲なのにい〜」と星野さん

「でも何かが欠けている……」僕が長谷川さんの顔を見て答える。

「そっ何かが……後半のサビ部分になるメロディー？、情熱的な何か？ ……かなっ」

「顔の擦り傷とか見ると、十分情熱的な感じするんだけどおなあゝ私には」

星野さんが悪戯っぽく僕の傷のある頬を親指で撫でる。

僕が赤くなつて照れると長谷川さんが

「その顔は、情熱と言うより根性で感じただけどあ?！」

昨日の夜を一部始終知っているかの様な発言にドギマギしてしまう。

「その曲つて10日後までに完成出来ないかしら?」と星野さん

「ムリですよ10日なんてえ だいいちに退院していると思うし・

・・」

「退院?!」

「今朝、正式に担当医の磯崎先生から言われたんです。」

「じゃ川崎くんの携帯の番号教えてくれないっ 連絡するからさっ」

「僕っ携帯電話持ってないんです・・・」長谷川さんが困ったぞおて顔をする。

「ん」星野さんは少し考えて 「私の携帯電話あげるわ」

「えーーーーーっ」

「私の携帯は長谷川からの着信時だけ、着メロが違ふのよお　ほらこれ」

【ピッポロピッポロピッポロピピー】ラーメン札幌一番のメロデーが流れる

「長谷川の生まれ故郷が札幌だけに、札幌一番よお」

「でもお……………」

「私用で使っても構わないし、通話料金も長谷川もちつにするから川崎くんにはお金がかからないわ、
かかってきた電話も知らない人なら出なくていいんだし」

「おいおいっ」こまつた顔しながらも仕方ないと言った長谷川さん

「その代わり、１０日後に曲の完成ヨロシクね」

「がっ頑張ってみますけど、何故１０日後までに完成なんですか？」

星野さんはニコニコしながら黙ったままだ

すると長谷川さんが「愛の誕生日なんだよ、ワガママ聞いてもらえると助かるよ川崎君」

そう言って深々と頭を下げた。

フェロモンの香り17

【フェロモンの香り の巻】

星野さんと長谷川さんが病室から出て行くと入れ替えて
正徳がやってくる。

「どーよお筋肉痛になってねーかつ？」

「筋肉痛よりも筋力が少なくなってるのに驚いてるよ」

「俺もあんなに苦戦すると思わなかったよお 退院したら筋トレす
んぞお」

「ああっ 望むところだっ」

「と 言うことで、夜のトレーニングで必要な？ 本日のDVDの
登場お」

靴からDVDをもったいぶる様にゆっくり取り出す。

何時もはコピーされたDVDだが、今日のはパッケージングされた
正規品の様だ。

「グラビアもの 持ってくるなんて目面しいじゃん」

「バカにしちやいけないよお拓都くん」

「別にバカにはしてないけどね」

「確かに今までのブツより刺激は少ないかもしれない、しかししかしたっ！！ 今話題のグラビアアイドル 星野 愛 ちゃんのDVDだっ どうだ驚いたか！！」

「ほっ ほしの あいつ」

「おっ さすが拓都くん、既にご存知だったかなっ？！」

「いやっ 最近ワイドショーで賑わしてる人だなあゝってね」

この病院に星野愛さんがいるんだぜと、一瞬 正徳に話しそうになるが思いとどまった。何処からマスコミにばれるかわからないからだ。

「その通り、ワイドショーのおかげで秋葉もネットもお祭り状態なのだよ明智君」

「んーイマイチわからないのだが、星野愛さんのイメージビデオが入ってるだけなんだろう？」

「入ってるだけってっ カァー！これだから素人は駄目なんだよね〜」

（なんだよ素人って、じゃプロがあるつつーのおかよっ！）

「マズは、この星野愛ちゃんのDVDは入手困難で増発の予定もないレア物なんよ」

「なるほど」

「ここ1年ブレイク後に色あせないグラビアアイドルのオーラ、そして」

「そして・・・?!」

「強烈なフェロモンの香り」

「ふえ ふえろものかおり？ なっなんだそりゃ？」

「そっ フェロモン 男を虜にする香りだ!!」

「なんだよ それ?! どういう匂いがするってんだよ フェロモンって」

「具体的な匂いとかではなく五感で感じる香り、それがフェロモンなのだよ拓都くん」

「・・・正徳が違う世界にいつちゃってるわ・・・」

「このパッケージの星野愛くんを見たまえ」そう言って正徳が僕の前にDVDのパッケージを差し出す。

パッケージ上部にタイトル【二度目に会ったら星野の恋人】と印刷されており

その下に黒のビキニ姿の星野さんが笑顔で笑っている。

写真で見ても星野愛さんの笑顔はとてもキュートだった。

「この大きな胸の谷間をよく注目したまえ!!」

「胸の谷間?.....」

「ほらほらほら、じわじわと胸の谷間からフェロモンが漂ってくるのがわかるだろ?」

「ふんふん 微かに男を虜にする香りがじわじわとおーってオイッ!!」
「パッケージの匂いしかしねーっーのお ホント意味わかんねっ」

「フェロモンがどーかしたのかしら」

病室の扉が【ガガー】と勢いよくひらくと聞き覚えのある高い声

鈴原だ。

「まさくんっ 拓都をたぶらかさないでっちょーだい!! 昨日の件も含め、危ない道に進んでいるんじゃないのぉ2人ともっ (怒)」

そう行つて星野愛のDVDをあつという間に取り上げる。

「ちよつちよつと、それだけは勘弁してくれよー鈴原あゝ」
「するような声で正徳

「拓都が退院するまでの間、私が厳重に保管させていただきます」

苦虫を潰したような顔の正徳をよそに鈴原は、恒例の授業を写したノートを取り出す。

「明日と明後日が土日だから、その分の宿題も入ってるわよっ

夜中にモリモリ頑張つてちよーだいね」

「モリモリって、何だよそれっ・・・勉強で満腹にはなりたくないね。」

「そんなこと言わないで、ほらっ夜食作ってきたんだからあ」
差し出された弁当箱は、3段重ねの重箱だ。

「おおっスゴっ！！ 稲荷飯と肉が入ってんなら頑張っちゃうかも僕」

「もちろんお肉も稲荷も大漁よっ」

「ズルウー拓都お 1段ちよーだい」

『ダメエー！』僕と鈴原が同時にかえす。

その夜、正徳と鈴原と一緒に消灯まで勉強することに

鈴原は母さんと喧嘩をした様で、直ぐに帰りたくなかった様子

正徳は、もちろん肉目当てで残っただけだ。

3人で勉強しながら正徳の言っていた

【フェロモンの香り】の事が何時までも頭から離れる事はなかった。

現実に出った星野愛さんからは、フェロモンの香りは漂っていたのだろうか？

記憶を辿るが、香りらしい記憶は思い当たらない

思い出すのは嬉しそうに微笑む星野さんの顔だけだった。

アイドルの価値1

なんだよっそれ！！ の巻

翌日の土曜日

朝食後に母さんが何時もの着替えを持って現れる

「拓ちゃん病棟で何かあった？」病室に入るなり母さんの言葉

「えっ別になんもないけどおどうして？」

「婦長さんを含めて、看護師さんたちが怖い顔してナースステーションに集まってるのよ、土曜日に婦長さんがいるのも珍しいでしょ？」

「へえ」

素っ気無い言葉をかえしたが、星野さんが病院にいたことが知られたのかとハラハラしてしまう。

「来週には退院なんだから、安静にして毎日過ごすんだよ」

午前中に妹の詩音のピアノの発表会があるとかで
母さんは病室を出て行く。明日ゆっくり父さんと詩音とで来るよう
だ。

母さんの言葉が気になり、ナースステーションに様子を見に行くこ
とに。

何時もなら、この時間には看護師の申し送りも終わりナースステ
ーション内は落ち着いてる筈だった。

（あれっホントだ、土曜なのに看護師のほとんどが顔をそろえてい
るぞぉ）

物々しい雰囲気ではあるが

マスコミが押しかけている様子でもなく、星野さんとは別件なのだ
ろうか？！

婦長とベテランの美香子さんが、身支度をしてナースステーション
を出て行く。

2人の顔は血相を変えているので、やはり只事ではなさそうだ。

「そんなところに隠れて何やってるのぉ」

「うおっ！！ よっ吉田さん」

「えへっ 今日退院なんですう（o）／」

ミニスカートの端と端をもって、お辞儀しながら吉田さんが喋る

「えっ今日だったのお おめでとうー！」

「ありがと川崎くん」

「吉田さんが退院したら、整形外科も寂しくなるなあ」

「えへっ」

「身支度すんでるってことは、もう行っちゃうんだね」

「うううん、それが会計の手続がすんでないのぉ」

「どうして？ ナースステーションから退院の書類もらえばすぐでしょ？！」

「何かあったみたいで、朝からミーティング中のまま」

「なにがあつたのぉ？」

「急に婦長が来て主任の美香子さんと話しこんでたけどお、内容はわかんない」

「ふん・・・」

「それより会計が終わったら、後で病室に行くね 川崎くん」

「ああっ待ってるよ」

病室に戻り、程なくして看護師の青木さんがやって来る

検温の時間だ。

「青木さん 病棟でなんかありましたか？」

青木さんなら、何があつたか教えてくれると思いジャブを入れてみる。

しかし、何時に無く口が重い青木さん

直ぐに話題を変えられてしまい内容はわからずじまい。

何時ものマシンガントークは不発の様だ。

青木さんが病室から出て行くと

星野さんから貰った携帯電話から着信を知らせるベルが鳴る。

着メロは「スターウォーズのダースベーダのテーマ」

どうやら長谷川さんからの電話ではなさそうだ。

液晶画面を見ると相手は【如月英治】と表示されている。

きつ如月英治！！ （どっとうしよう？）

まさか電話に出るわけにいかないので鳴らしっぱなしにするとそのうちに留守番電話に切り替わった。

（参ったなあ・・・）

暫く考えてマネージャーの長谷川さんに電話することにする

携帯電話のメニュー画面からアドレス帳をひらくと
ずらずらとカタカナと漢字の項目が羅列される。

（なんで同じ項目が漢字とカタカナであるんだよ）

その中からマネージャーを探し、早速 長谷川さんに電話

「はい長谷川です。」

「もしもし川崎ですが・・・」

「おっ川崎君かつ 愛は検査で今いないだが、どうかしたか？」
「星野さんの携帯電話に着信がありました・・・」

「あーっ 着信音がダースベーターだったら無視していいぞお」
「でも相手が如月英治さんの様でしてえ・・・」

「無視無視！！ アドレスの項目がカタカナで入っている奴らは全て愛の嫌いなやつらだからさっ」

「嫌いってえ如月さんを星野さんですか・・・？」

「テレビと現場では印象が違うつてこと解かるかな、川崎くん」
「はあゝ そんなもんなんですな・・・」

「夢を壊して悪かったカナ？！」

「じゃ カタカナの項目はダースベーターの着メロなんですか？」

「そつ、自分の場合はサツポロ一番！！」
「だったら 漢字の場合の着メロはっ」そこまで言った時に吉田さんが病室に飛び込んでくる。

「たつたたたたいへん！！ 川崎君っテレビつけてみてえ」
「えっ どうしたのお？！」

「はちっ 8チャンネル！！」

言われるままテレビの8チャンネルを点けると
画面上部に臨時ニュースが表記されている。

【港区のマンション 如月英治さん宅 浴室で藤川裕子さん28歳
自殺未遂 意識不明の重態】

裕子さんて、この病院の藤川裕子さん？・・・自殺？・・・如月
英治のマンションで？？？

なんだよっ それ！！

アイドルの価値2

如月英治　の巻

【港区にある如月英治のマンション】

「山田あ！！　外の状況はどうなった？」

「先ほど見た時より、記者の数は増えてますね　如月さん」

「チツ　何でオレのマンションで、あんな事するんだよ」

「また酔った勢いで結婚しようぜ　何て言ったんじゃないんですか？」

「酔ってるんだから無効だろ、そんな約束」

「歌手の藤原紀子の時も揉めましたよねー同じ内容で　確か・・・」

「でも、紀子は酔って言ったこと理解してくれたじゃん」

「藤原紀子は芸能界って所を良く知っている方です、状況を考えたら当たり前に対応ですよ」

「そうかなー一般人だって同じだろ？」

「彼女は、芸能界での駆け引きが上手なだけでなく恋多き人。だからマスコミにも漏れなかったですよ」

「けどお同じ人間じゃん」

「今回の相手は素人さんですよ、本気になって当然です」

「……………」

すると、如月英治のマネージャー山田の電話に連絡が入るく

「はい山田です、 はっはい・・・ええ・・・わかりました ありがとうございます。」

携帯電話の通話が終わり如月英治に向き直る。

「どっとうした山田・・・」

「藤川裕子さんの意識が戻りました、 医師の話によると もう心配ないということです。」

「ふゝ たくうゝ」ソファに深く腰かけ右手でこめかみを押さえる。

「大丈夫と解ければ、 早めに次の手を打っておきましょう。」
そう言ってマネージャーの山田は数箇所、 電話をかけ始めた。

手持ち無沙汰の如月は、 フト思い出した様にトイレに駆け込み携帯電話を手取る。

電話の掛先は、 星野愛 だった。

[illegible]

【川崎拓都の病室】

画面上部の臨時ニュースを見て固まる拓都

その時、星野さんから貰った携帯電話からダースベーダーのテーマが鳴る。

携帯電話の液晶にうつしだされた相手は【如月英治】

（きつ　如月英治っ！！）　思わず僕は携帯電話の通話ボタンを押してしまった。

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

「もしもし 星野お ニューズの件はもう知っていると思うけど誤解なんだ、オレが冗談で言ったことを真に受けてホント困っちゃうよ 変な女でさあゝ」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

『なんで黙ってるんだよ！！ 怒ってんのかよ？ だから身勝手な女だったっーか頭イカレた女だったんだってえ』

「・・・頭がイカしてなんかないよっ！！！！」

『 ！ 』

「裕子さんは身勝手な女でもない！！ あんたは裕子さんに何をしたんだ！！！！」

『お前 誰？ 長谷川でもなさそうだし・・・？』

「おいっ答えろっ！！！！ 何をしたんだっ と聞いているんだっ！！！！」

『・・・星野はそこに居るのか？』

「うるさい！！！！」

『・・・何故 星野の携帯電話をお前が持っている？』

「黙れっ！！！！ 僕の質問にこたえろ！！！！」

『・・・・・・・・』

「畜生っ 答えろって言ってるだろ！！！！」

『わかった 答えよう、その代わり星野愛の居場所を教えろ』

「嫌だっ！！！！ お前なんか教えられるかっ！！！！」

『キミの質問に答えるのは、星野の居場所を喋ること。それが条件だ』

「・・・・・・・・。」

『なら1つ良いことを教えてやろう。お前の大事な藤川裕子の命に別状ないと、先ほど病院から連絡があったよ。』

・・・・・・・・裕子さんが無事・・・・・・・・

「・・・・・・・・分かったよつ　でも電話じゃなくて直接話がしたい。」

『イイだろう、東京駅の八重洲口から出ると美術館がある　そこに
14時だ』

「わかった、逃げるなよ」

僕は携帯電話をきつて、我にかえた。

裕子さんに何をしたか聞いたところで、僕に出来ることは何も無い
はずなのに

如月英治と僕が会って、いったい何になるのだろうか？

軽率かな行動をとってしまうほど、僕はバカな人間だったのだろうか

だけど、今

こんな行動に僕を駆り立てているのは

猛烈な勢いで込み上げる怒りの力なのは確かだった。

吉田さんには、裕子さんの様子を見に行くと言いつてもらった。もちろん、僕が退院後に退院祝いをしようと約束をして……。

そして僕は、携帯で正徳を緊急事態と言いつて病院に来る様に呼び出す。

ジャージからジーンズとＴシャツの簡単な服装に着替える。

正徳が来るまでの間に
長谷川さんが僕の所に来たが、如月英治と話をしたことは言わなかった。

「ニュースの藤川さんて、ここの看護師さんなのかい？」

「はい、ここの整形外科病棟の看護師です。」

「ニュースでは重体ってなっていたんだが、大丈夫なんだろうか？」

「裕子さんの命に別状ないらしいですから安心してください。」

「そうか、無事で良かった。ところで先ほどの電話の後、如月英治

から連絡こなかったか？」

「いえっ 電話はきてないです。」

「そうか・・・ならインだが・・・。」

程なく正徳が病室に到着
長谷川さんには、裕子さんのお見舞いに行くと話して病院を後にした。

アイドルの価値3

【芸能リポーターの巻】

港区にある如月英治のマンション前には
TVクルーがひしめき合っている。

最近、芸能ネタに乏しかった為か
各社必死の構え

長期戦も考慮に入れて、簡単なテントも設営する始末だ。

「どうも可笑しいな・・・」

「可笑しいって何がデスか？ 梨木さん」

ベテランリポーターの梨木とリポーター研修中の大柳オオヤナギが
マンション玄関前に陣取っている。

「新米には解からないだろうけどあ 何か臭うんだなあ・・・」

「臭うって そんな臭いますか、さっき食べたケンタッキー」

「バカッ その臭いじゃないよっ んっ 待てよっ」

「どうかしました？」

「ピザの宅配って、先ほど来たよなあ」

「はあー来ましたねーストロベリーコーンが 2人で」

「2人？ 2人でピザの配達来るか？ 普通・・・」

「そう言えば、帰る時の人って身長が高くなってたかも？！」

「判ってたんなら、それを早く言えっ！！ 如月英治の今日のスケジュールを教えろ！！」

「スケジュールって、この事件でキャンセルでしょ？ 梨木さん」

「いいからっ 早く教えろ！！」

「東京駅 八重洲口で月9ドラマ【ナニスヤ デカ】の撮影でしたね」

「て事は、川崎君が誰かから聞いたってことお？」

「そつ そうなると多分、一番情報が早く入るのは如月英治のマネージャー山ちゃんってところかな」

「えっ 川崎君がその情報を聞いたって事・・・」

「となると、さっき出て行った川崎君は如月くんに会いに行ったってことが濃厚な線かな!？」

「冴えてるわね 長谷川っ!!」

「どうする? 愛」

「もち現場に急行でしょ」

「了解」

そう言つて正徳は酒屋の仕入れがあるとかで、早々帰つてしまふ。
帰りはJRになりそうだ。

美術館の入り口前に大きな柱が数本
その影から如月英治が登場した。

（ホンモノの如月英治だ）

「よく逃げなかったなあ！！」初めに発言したのは僕だった。

「もっと年がいてると思ったけど、随分と若い子だったんだなあ」

そう言つて如月英治がニヤケタ顔で握手を求め、手を拓都の前に差し出す。

「バカにするなあ！！」拓都は差し出された手を跳ね除け如月英治の胸倉を掴むと

如月は、無抵抗だぜとばかりに両手を上にあげる。

「な・・・なにをした・・・」

「自己紹介も無しで、もう本題かい？ 坊や」

「うるさいっ子供扱いするうなあ！！」

「これは失礼 坊や」

「くっ」

「おっとお そんな怖い顔しなさんな 名前を知らないから仕方ないだろ 坊や」

「坊や坊や言うんじゃねーよお 僕は川崎拓都だ」

「そおっ 拓都君か。 私はご存知 如月英治 ヨロシク」

「お前の名前を聞きたくて、ここに来たんじゃねーぞお」

「知ってるよ 裕子の事 藤川裕子のことだろうっ?！」

「そうだった さっさとお話せ!!」

「っ！ かつ オレは裕子に何もしてねーぜっ 悪いけどお」

「何もしてないワケないだろ!! だったら裕子さんが、どうしてあんな事しなきゃいけないんだ!!」

「悪いけどオレは本当に何もしてないんだぜ、彼女がオレを何度も何度も誘ってきたから仕方なく付き合ってたけどなっ・・・」

「おまえの言い訳だろっ!!」

「そうかなあゝ1度でいいから食事がしたいって言ってきたのは彼女なんだぜ」

「うそだっ!!」

「嘘なもんか、食事をした後は1度でいいから抱いてほしいって彼女が言ったんだよ」

「うそだっ！うそだっ!!」

「だからオレは、彼女の願いをかなえてあげただけ 感謝される側だと思わないかあ」

「デタラメ言っくなっ!!」

「結構いい女だったし、あっちもいい具合だったんで彼女が満足するまで何度も抱いてやったよお」

「ゆっ裕子さんは、そんな人じゃないっ!!」

「くくっウブな坊ちゃんだねー いい男やいい女を抱きたいと、みんな思っていることだろ? 違うか? 拓都君だって、そう思っているだろう?」

「僕は、そんな事・・そんな事を思っで・・ない・・」

「だから、オレのマンションであんなマネされるとホント迷惑なんだよね」

「お前は、デタラメを並べてるだけだ!!」

「勝手にオレに近づいてきて、あんなことして 彼女は狂ってるね 頭オカシイよ」

「裕子さんを侮辱するなあ——！！！」

【バギッ！！】

「いつてええ——！！！」

怒りに任せて、僕は如月英治の顔を力一杯殴ってしまった。

【パシャ！！ パシャ！！】その時、フラッシュが横から焚かれる。

横を見るとビデオカメラを回している男とカメラを持った男が近づいてきた。

「いやー恐縮ですっ恐縮です！！！」

そう言つて近づいて来た男の右手にはマイクが握られ
左手には赤色の名刺

特ダネ取材を山の様にスクープしている通称スッポンの梨木リポ
ター

一瞬見ただけで、僕でも芸能リポーターとわかる風貌だ。

「恐縮ですが、お二人はどんな関係ですかあ」

中年太りの体に紺色のスーツ姿、いやらしい笑みを浮かべながらマ
イクを差し出される。

「くっ スッポンの 梨木っ」

殴られた頬を押さえて如月英治がイソイソと美術館の中に消える。

僕は、スッポンの梨木ともう一人の男に囲まれ質問攻めに遭うこと
に・・・

「VTRは回っているんで、あんまり騒がんほうが利口だよ」

梨木は同行させている新人にビデオカメラの撮る角度など指定しながら

着々と取材の準備を進めていく。

「あつ この取材が終わったら取材料も出るから安心して」

そう言って背中をポンポンと叩かれる。（安心してなんだよ・・・）

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

【美術館の影に止めてあるワンボックスカーの中】

「まずいわね、川崎君。梨木に捕まっちゃった……」

「如月英治を殴った瞬間もVTRに収められた様だし　マズイなあ」

「何とかならない長谷川っ」

「んーーーーっ」こめかみを押さえて唸る長谷川修

「いいわっ　私の独占取材と引き換えて揉み消しなんてどう？」

「スッポンの梨木に独占取材は正気の沙汰ではないぞお」

「仕方ないでしょ　私の大事な川崎くんを梨木の餌食にしたくないもん」

「・・・たく・・・わかったよっ愛」

そう言って車から降りると、身軽な足取りで梨木と拓都の前に長谷川が向かう。

「お久しぶりです梨木さん」

長谷川の突然の登場にさすがの梨木も言葉を失ったようだ。

「これはこれは長谷川マネージャー」梨木から笑みが消える

「この状況でこのタイミングの登場ってことは訳有りってことですか、長谷川君」

「お察しの通りで……」

「色男のゴタゴタを追っかけていたら、えらい大物ネタが喰らいついてきましたなあ」

「その話は場所を替えて」

長谷川さんは梨木さんと助手らしき人をつれて、近くの喫茶店に入っていく。

スポンの梨木リポーターの登場だけでも気が動転しているのに長谷川さんまで現れて、一言も言葉を発する事が出来なかった。

僕が、その場に立ち尽くしていると突然ケイタイが鳴った。

着メロは札幌一番のテーマ

「はい・・・カワサキです・・・」

「川崎君っ後ろっ見て」電話の相手は星野さんだった。

後ろを振り向くとワンボックスカーの窓を開けて
星野さんが手を振っている。

言われるまま車に向かうと、星野さんの優しい笑顔が待っていた。

「一人で看護師さんの仇を討ちに行くなんて凄いわね、川崎くん」

「僕は、ただ・・・ただ・・・悔しくて・・・」

「いいのよっ 英治は殴られて当然なんだから」

星野さんの言葉を聞きたびに、僕の瞳から涙が止め処なく溢れだしてくる。

「本当は、殴るつもりなんて無かったんだ・・・」

「わかってるわ・・・」

止まらない涙のおかげで、それ以上喋ることが出来なくなってしまう僕は、何時の間にか星野さんに優しく抱きしめられていた。

「川崎君っ 英治も悪気があってやったんじゃないって事も覚えておいてほしいのぉ」

「・・・」

「彼は自分のやっていることが悪い事だと本気で思っていないのよ」

「・・・」

「天然のスケベたらしくてどこかしらね・・・」

「・・・」

「でも、殴られた時の英治の驚いた顔っ笑っちゃった。私もスッキリしたわ」

「・・・ぐおぐっ・・・ぐ」お」

「あれっイビキ?! 川崎君もしかして寝てるぅ ふふっ可愛い
(^o^)/」

その後

僕は長谷川さんが車に戻ってきたことも知らずに、病院に到着するまで熟睡してしまった。

アイドルの価値4

【パパの巻】

何よー！！　せっかくお見舞いに行つたのにイナイなんて　どういうことお（怒）」

拓都の見舞いから帰つて来た鈴原藍

（また、まさ君が連れ出したのかしら・・・たぐう）

見舞いと言って拓都に会いに行つた藍だったが
本当は父親の事で拓都に相談したかつたのだ。

記憶の中にあるパパの記憶は幼い時のものしかない
だから、今さらパパに会いたいと思う気持ちが湧き上がるとは思え
なかった。

先日のママの手紙を見て、取り乱した自分が恥ずかしい
そんなんだから、後をつけられていた事も判らずに危険な目にあつ
てしまったのだから・・・

そう思つて見たものの

頭から離れないパパの想いは
募る想いを掻き消す為の誤魔化した心に過ぎなかった。

あれからママとは、会話らしい会話はしていない。
もちろんママの仕事が多忙と言うこともあったが
以前のような信頼感に溢れた親子関係からはかけ離れている。

私は普段は入らないママの書斎に来ていた。

「きつたない」

部屋の窓際に置かれた机の周りには仕事で使う資料が山積みになっている

「少しは整理しなさいよお」

本の山を掻き分けて机まで辿り着くと
机の引き出しを引っ張り出し、各所調べてみる

が、パパに関するものは何も無かった。

鍵の掛かった引き出しは無かったので、怪しい箇所はなさそう
部屋の隅にあるママ愛用のマッサージアに腰掛ながら

先日見た手紙が本当に悪戯だったのかもしれないと思い始めていた。

（なんか、ママに悪いことしちゃったかな・・・）

オートマッサージのスイッチを押すと

駆動する機械音が、シーンとした部屋に響きだす。

旧式のマッサージチェアは首から腰のみのマッサージ機能だけ

「ぐおくうく効くううう」 最近の高校生にもマッサージチェアは必須アイテムじゃ」

背中を体重をマッサージチェアに預け、前にある足乗せ用の椅子に両足を放り投げる。

【ポコッ！！】

「ほげっ なんじゃ」

マッサージチェアから降りて、足乗せ用の椅子を調べてみる。

「およっ」

クッション部分を外すと中は空洞の物入れになっていた。

「甘いわねママ、藍に探せないものは無いわ……」

中には5通ほどの便箋が入っていた。

もちろん差出人は パパ 毅志

全部読んでみるが、どれも連絡先が無い（どうして無いのよ）

少ない文章から読み解くと

パパの借金でママと別れた様子

今は返済も終わり、一緒に暮らしたいと言ったものだった。

私は、短い文面のパパの文字に温もりを感じていた。

携帯電話の電子メールばかりで、手書きの文字に触れるのがあまり無かったからかも知れなかったが
何故か涙が込み上げてくる。

パパに会いたいと言う思いが本物だと
このとき私は確信した。

アイドルの価値5

【秘密の巻】

翌日は、日曜日

休日はリハビリや回診が無い、あるのは朝昼晩の3度の検温だけだ。

朝の検温の後

昨日の件を星野さんと長谷川さんに改めてお詫びしようと

1Fの病院内にあるカフェでアイスコーヒーを3人分購入して
婦人科病棟に向かう。

「そう言えば、何科の病棟か聞いてなかった・・・」

近くにあったナースステーションの看護婦さんに調べてもらう。

「星野愛さんですか？」

「そうです、スラッとした感じの人で・・・」

「星野・・・？ あっ 星野愛のソックリさんの佐藤さんねえ」

（げっ ここでは佐藤愛さんだった・・・）

「あっあああー そっそう 佐藤愛さんです。」

「佐藤さんなら、病院を移るとかで先ほど退院の手続き済ましたよ」
「えっ そうなんですが?!」

（退院？ こんな急な退院なんて、絶対 僕のせいだ……）

まだ居るかもしれないと思い
星野さんのいた病室に行くが、既に姿は無い
病院の正面玄関まで行くが、やはり見当たらなかった。

（携帯電話……）

長谷川さんにかけるが、電源が入っていないか電波の届かないエリアのメッセージ

仕方なく自分の病室にもどると鈴原が待っていた。

「おはよー鈴原っ 朝早くどうしたの？」

「おはよう拓都お！ ニヒッ」

「なんだよあ その笑顔 気持ち悪い……」

拓都の手元にあるアイスコーヒーに目を向ける鈴原

「そんな沢山のアイスコーヒー、1人で飲むのおかしらっ」

「あっあはっ すっ鈴原が来ると思ってさっ 日曜日だし・・・」

「へえっ3カップあるようですが、1つ あまっちゃうじゃないのお？」

「へっ?! あっ あれっ」

「あれっじゃないわよお」

「まっ 正徳のお分だよお」

「ふうん」

拓都の手から黙ってカップを取って

拓都の目を窺いながらストローからアイスコーヒー飲む鈴原

「まさ君のお分ねえ」

「あっああ そうだよお」

「ふうん」

「そうそうっ 今日はバッチリ宿題仕上げといたぜえ」

嘘を誤魔化すようにベットに座り、何時ものノートを差し出す。

「今日はノートチェックに来たわけじゃなかったのお」

「何かあったん？」

「相談したいことがあつたんだけどお　もおいいわっ
「えっ　なんでえ？」

「クスッ（^^）」

「なんだよっ　クスッ　ってえ」

「解決しちゃったから」

「解決???　僕に相談する事が？」

「そっ解決」

「どーやってえ」

「フッフ　秘密よっ」

「なんだよっ　それ」

「だって、拓都も秘密にしてるみたいだから」

「秘密つてなんだよ？」

「いろいろよ・・・色々な秘密（笑）」

僕はこのとき、鈴原の【相談】したかったことを

もつとよく聞いてあげべきだったのかもしれない。

そして

星野さんたちが病院から消えて数日後、僕は程なく退院した。

梅雨明けした夏の盛りのことだった。

アイドルの価値6

【噂と決心の巻】

退院して数日後

退院したら普通の学生生活に戻れると思っていたのだが
既に夏休み突入中

もちろん補習で僕は学校に登校していた。

むせ返る暑さと、うつとうしい蝉時雨の中
毎日、山形先生と顔を合わせるとは思っていなかった。

救いは、補習生徒の中に正徳がいることだけ

トホホホ（泣）

開けっ放しの窓のカーテンが微かに揺れる教室の中

数学の補習授業をする山形教師

『とまあ、そう言うことで……この方程式を使って……それぞれをあてはめると……』

「どーでもイインですが、超眠いんですけどお正徳い」

「特に数学は催眠術より効きますな、拓都殿」

「せめて教室にクーラー付けてくれってんのお（蒸）」

「右に同じく、強く賛成！！」

【カキン >レフトーさがってえ！！<】校庭では女子がソフトボールの練習をしいてる様子

「しかし、こんな暑い時間にグラウンドでソフトボールですか？」

「明後日、決勝らしいよ県大会のお」

「スゴオ そんな強かったっけーウチのソフト部」

「ピッチャーをヨク見てみなよお」

『うわっ 鈴原っ!!』

『はいっ そこっ!! 川崎拓都っ この問題を解いて』

「はへっ?」

『はへっ じゃないだろ 授業中は校庭じゃなくて黒板を見るものだ!!』

「すつすいません」

【うりああああああ】

グラウンドからは鈴原の唸り声が聞こえてくる。

【どああああああ】

「かなり気になる声があるもんですから……つい……」

『明後日は決勝戦なんだから、気合が入って当然だろ まっそう言う訳だ』

「お袋さんと喧嘩したんだとお鈴原」

「でっズーっとあの調子なのお？」

「ソフト部としては、あのままの方がいいみたいだけどお（笑）」

「・・・・・・・・。」

「ところで鈴原から例のDVD、還してもらったのか？」

「もちろん、星野愛のレアDVDは俺の宝物だからなっ」

「ふふっ」

「星野愛と言えばさあ、最近ネットで妙な噂がひろがっててさあ」

「なんだよっ・・・妙な噂ってえ？」

「ムジテレビの深夜にやってる特ダネ特捜部隊で、星野愛の独占取材を生放送するって噂」

「どっ独占取材っ？！ 生放送でえ？！」

「編集のきかない生でやるなんて、さすがスッポンの梨木はヤルこ

とが違うね」

「なに梨木を褒めてんだよお正徳っ！！」 思わず立ち上がる拓都

「何怒ってんだよっ拓都！！」

『はいっ その2人、煩くて授業にならないだろう！ 走って頭冷やしてこいっ 校庭20周！！』

「あちゃー！！」

だらだらと僕と正徳は校庭に出る。

「どうしたんだよ拓都っ そんなムキになるなんて、俺 怒る様なこと言ったか？」

「いやっゴメン そんなつもりじゃ無かったんだ・・・」

（噂なんかじゃないんだ・・・スツポンの梨木に独占取材なんて・・・絶対僕のせいだ）

『おい』マウンドの上から鈴原

「げっ鈴原っ！！」

『補習授業終わったのお』

「……………」校舎にある時計を確認して2人は同時に頭を横に振る。

ベンチの生徒に声をかけ、鈴原が僕らのところに駆け寄ってきた。

「もしかしてヤマセン（山形先生）に怒られたとか？」

「なんで判るんだよっ」と僕

「退院後の自主トレかと思っ たわ」

「デキが悪いもんで……………」頭をかきながら正徳

「悪くならないでよ まさ君、そんな風に言っ てないんだからサッ」

【コラッ！！ 油うつてないで、ちゃんと走れえええ！！】
校舎の窓から山形先生がゲキを飛ばしている。

「ゴメン鈴原っ 先生もああ言ってるんで行くなっ・・・明後日の
決勝がんばれよっ」

正徳がそう言うと

「私は試合に出ないけどお大丈夫よ、優勝するわ」と鈴原

「鈴原が出ないって、今日の練習はなんだよ」と僕が聞く

「ストレス発散よっ 拓都お」

「ストレス発散って意味わかんねーっ、何で試合に出ないんだよお」

「ふふっ 明後日のその時間は、2次審査があるのよお」

「それって鈴原あ！！、キラリン美少女を探せの審査に行く決心
がついたってことかあ！！！」

目をランランと輝かせる正徳

「行かないって言ってなかったっけえ？」僕が驚いて聞く

「あらっ拓都だって、勧めてくれてたじゃないのお」

【お前らあああと10周追加するぞおお!!】
校舎の窓から、また山形先生がゲキを飛ばしている。

「そんじゃ、後19周走らなきゃいけないんで行くわ」校舎で叫ぶ
先生を確認しつつ僕

「絶対、応援いくからなっ!!」正徳が拳を握り締める。

「ほら正徳いくぞお」拓都が正徳の襟を引っ張って走りだす。

「がんばってえねえ」

「しかし、どう言う心境の変化なんだよ 鈴原は……」

「まっ身近からアイドルが出るかもしれないなんてワクワクするじやねー拓都お」

「まっ審査通ればの話だけどおなっ」

「星野さんの独占取材の真相調査といい、忙しい夏になりそうだぞお今年はー!!」

「なに勝手にテンションあげてんだよ正徳」

校庭を走るスピードがじょじょに上がる正徳

「おいおいっ そんなスピード上げたら20周走りきれないゾオ」

汗だくで校庭を走る2人、グラウンドではソフト部のナインに鈴原の
ゲキが飛ぶ中

南側にあるプール後ろからは、入道雲がモクモクと沸き立っていた。

アイドルの価値7

【紀子とあけみ の巻】

P M 9 : 3 0 【麻布の高級マンション 最上階1121号室】

豆腐の上のつた薬味

キュウリにナスにオクラが細かく刻まれ

昆布のトロミと隠し味の調味料とあいまって

超おー冷酒に合うじゃないのおよおもおゝ

「ワタシを酔わしてどうするつもり？ 豆腐くん」

そしてこのアジのナメロウ

味噌の量が絶妙でワタシの体と合うわね

男と女も顔や性格よりも体が合うかどうかが大切って言うけどお

味覚が合うかどうかってのも入れてほしいわ♪

再度

江戸切子細工のぐい飲みに冷酒を注いだ後

少量のアジのナメロウを口に含んで

キンキンに冷えた純米酒を口に運ぶ

「くうくこでらんねえく！！ ホント・・・この為に生てんのよおねーワタシ♪」

（ハッ！！ 何っ中年おやじモード入ってんのぉ？！ それもトッ
プギアに入ってるわっ（汗））

「一人で、こんな事して、幸福を感じているワタシ 寂しいわ・・・」

「１人って、ちょっとお紀子さん 勝手に呼び出しておいて自分の世界に入ってますん？」

「あけみの料理は最高よお 男のいない寂しさを忘れさせてくれるわ」

「私は男の代わりかよっ（笑）」少しコケながら半笑いの坂本あけみ

「今度、ワタシのバック（バックダンサー）じゃなくて グループ シングル出すんでしょ？」

「社長から聞いたんですか？ 私はまだ早いんじゃないかって言っ たんですけどねー」

「そんな事はないわよっ 実際 人気はワタシより上よっ 既にね」

「えゝミルク・ザ・Dカップがですか？」

「違うわよっ グループじゃなくて坂本あけみ 単体だよ」

「そんな事ないですよ、タマちゃんやミサポン・もえちん だって 人気ありますよぉ」

「それはナイッ！！ あいつらはダンスマシーンよっ、ただの機械 オバケ」

「ひつどおーいつ、いくら藤原紀子のお言葉でも言い過ぎだと思いまーす（怒）」

「そうね〜【機械オバケ】は言い過ぎかなっ ははっ（汗）」

「飲みすぎじゃないですか？」

「いいのいいの久しぶりのオフ日なんだし、飲みたい気分なのよね」
「」

「星野先輩の番組、すべて紀子さんが穴埋めしてるんですもんね〜
気持ちわかります。」

「愛の件で飲みたいってワケじゃないのよ、愛は全然悪くないし、
アイツは凄くイイヤツなんだからね」

「そんなつもりで言ってませんよっ、私も星野先輩には何度も助け
られましたから」

「そんでさ〜あけみちゃん、話かわるんだけどお」

「何ですか、紀子さん」

「今度」リーガーのお兄さん紹介してくれないかしらあ」

「だめですよお、前回紹介した私の友達だって数回食事しただけで飽きちゃったじゃないですかあ」

「そんな事言わないでえゝ寂しいのよねえ」

「ジャパニーズの亀有くんの時も、私の友達の時もフライデーにスクープされたわりには、ホントは何にも進展してなかったんでしょう？」

「だってえさあ やっぱり如月英治がインダモンねえ」

「まあ」女は（獣）ケダモノ、男は（果物）クダモノ それが藤原流】のキツチコピーが泣くわね」

「愛を見ておもったのお 正直に生きようってえ」

「星野先輩か・・・」

【ブーーン ブーーン】紀子さん携帯鳴ってますよ

「アケミでてくれない？ カメちゃん（亀有）だったら居ないツーことで」

「まったくモー はいっ モシモシ あっ 森田社長お」

「森田のオッサン？ じゃ出るわ」

「はいっ 今 藤原に代わります。」

「モシモシ 今日から明日まで、ワタシたちはオフ日でございます〜」

『休みの日に悪いんだが、六本木に急いで行ってほしいんだ！！』

「えっ 何かあったんですか？ 社長お」

『イロイロあって、関東スポーツの梨木が愛の独占をやるらしい・・・』

「すっ スッポンの梨木ですか？ なにやってんのよ長谷川がついていながら！！」

『今から六本木のバー・ギロツポンまで 来れるか？』

「愛の為ならもちろん行きます」

『坂本にも協力してもらってくれ』

「わかりました」

【ピッ】

「行くわよっ あけみ！！」

アイドルの価値 8

【バー ギロツポンの巻】

P M 1 0 : 3 0

六本木

栗の木を切り抜いた一枚板の頑丈なカウンターテーブル

ダウンライトで妖しく照らされ、使古された客元のカウンター袖が艶かしく光る。

ブランデーやバーボン・ウイスキーなどのプレミアムボトルがカウンター背面に並び
オールバックに白髪を束ねたバーテンダーが慣れた手つきでシェイカーを振る。

芸能人がお忍びでもつかう会員制の高級バー【ギロツポン】

その店内で

関東スポーツ社の芸能人専門リポーター梨木（通称：スツポンの梨木）と

森田プロ所属の星野愛マネージャー長谷川修が打合せ中

「生で突撃取材なんて、ホントに了解してくれるとは思ってなかったよ 長谷川君」

梨木さんだから引き受けたと思ってもらえれば、光栄です。」

「ふふっ そうなると、あの少年には、よっぽど価値がありそうだし・・。」

「彼の記事は絶対出さない、それが条件ですよ 梨木さん 忘れないで下さい。」

「わかってるよっ、詮索したくなるのは職業病ってことかな」

「約束は守ってもらいます。」

「約束もなにも、VTRも写真のデータもキミに渡してしまったんだから少年の記事は書けやしないよ」

「ありがとうございます。」

「こおらあ気つけろやあ！！（激怒）」

「ちつよとお正徳っ 安全運転しろよお！！」

「バカッ 時間に間に合わなかったら意味ないんだよお拓都」

「何でギリギリになって連絡してくんだよ、もう少し早ければ余裕で行けるのに・・・」

「しょうがないだろっ 極秘情報なんだから」

「そんな極秘情報とやらは、どこから仕入れんだよお？」

「アイドルブロガーのゴットシンだよっ」

「ゴットシン？」

「もともとアキバのローアングラーで有名らしいんだけどお、それよりもアイドルのレア情報に詳しくて正確なんだっ まさに神、ゴットなんだ！！」

「ろっ ローアングラー?! 何だよっそれってえ」

「ホントにその手の情報に疎いな〜拓都お〜」

「うっせーっ正徳が詳し過ぎるんだよ!!」

「ありがとう」

「ついっかっ褒めてないし……（汗）」

「仕方ないな〜教えて進ぜよう!」

（仕方ないって……なんだよ……。）

「ローアングラーとは、新手のカメラ小僧みたいなもん」

「カメラ小僧……」

「そっアイドル専門のカメラ小僧お〜ローアングル専門のね」

「ローアングル専門って それえて」

「そっ パンチラ！！ パンチラ専門ってことさっ」

「ぱっぱっパンチラ」

「ムフフッ」

「ムフフッって、何でそんなヤツ知ってんだよ正徳っ（困）」

「拓都お その説明は後っ！！ もう少しで外苑東通りに入るから
運転集中させてくれ」

「ああっ 渋滞すり抜けするのね・・・」

「！」

「ちっちよっとお 正徳っ バイク止めてくれっ！！」

「えっ どうした拓都？」

「ハズじゃ困るんだよっ 放送は生だよ生っ 全国放送だよ!!」

「ちょっと外 見てきますんで、繋いでて貰えませんか」

「繋ぐっ たって、せいぜい10分がイイとこだよ長谷川君」

「大丈夫です、梨木さんの顔は潰しませんから」イソイソと店の出入り口から店外に出て行く。

『4・3・2・1・Qです!!』女性スタッフのタイムキーパーがQを出すと番組のオープニングが流れる

ジャジャーン 『特ダネ 特捜部隊っ!! 特捜部隊 特捜部隊
いいいい!!』

「こんばんわっ 突撃リポーター梨木隆弘です。」

「今日は、芸能人ご用達のバーに来ていますが、この場所に話

題のあの人が来ると言う情報が入ったワケなんですけど・・・誰だと思えますか？」

スッポンの梨木のアップから画像がひいていくと店内がバーである事がわかる。

そして、ニヤニヤした表情で得意げに話し始めた。

「なんとお　あの失踪事件以来、姿を隠しているグラビアアイドル星野愛さんなんですよお」

TVカメラはカウンターテーブルから店の入り口にパインする。するとタイミング良く扉が開き、女性客が入店

「おっやって来ましたかあ?!」大げさにリアクションしながら梨木が喋る。

ドヤドヤと店内に入ってきた客は、歌手の藤原紀子とダンスユニット【ミルク・ザ・Dカップ】の1人坂本あけみ　だった。

「おおーっと、意外な人たちの登場ですが星野愛と待ち合わせでし

「ようか？」

意外な展開に驚いた梨木だが、持ち前のアドリブで機転を利かせたコメントを吐く

入店時に梨木を直視したハズの2人は、何食わぬ顔でカウンター席に腰を下ろしカクテルを注文

梨木の存在を知っても無反応の2人に、間髪入れずに突撃取材を続ける梨木。

「恐縮です恐縮です！！特ダネ特捜部隊の梨木隆弘ですが」

「えー何っ？！ ヤッダー、ビックリ」 梨木さあくんじゃないですうかあ」シオラシイ演技で驚いてみせる藤原紀子

「私たちオフ日なのに取材なんかされちゃうんですかあ」

坂本あけみが、超ブリッコ風に答える。

「2人は本日はお休みと言うことで、取材するのは本当に恐縮なんです。が セツカクなんでチョットだけチョットだけ お話させて貰

「とてもいいでしょうか?!」

「えゝお話ですかゝ何かシラケルかもゝ」カクテルグラスを指でなぞりながら坂本あけみ

「ままつそゝ言わずに」そう言つて、梨木が目力で2人に迫る

「じゃ梨木さんも一緒に飲みましょうよゝゝ」

威圧的な梨木の形相を無視するかのように藤原紀子がそう言つと、間髪入れずにバーテンダーに注文

「ドライマティーニを濃い目で」

「こつ濃い目でてキツイなあゝもゝ藤原ちゃん」生放送と言つこともあり、この場はやられたという表情の梨木

「うふつゝ」軽く笑顔を見せ、余裕の悪女ぶりの藤原紀子

「と言つことで、意外な展開になつて来ましたが星野愛は現れるのでしょうか?」

状況を立て直す為に、カメラにコメントを残す梨木隆弘

『一旦CM行ってくれ!!』

生放送中のTVはコマーシャルに放送が切り替わった。

アイドルの価値9

【誘拐の巻】

一方 店の外にいる長谷川修

「愛が時間内に来ないなんて初めてだ、何かあったのかな・・・」

店の周りを確認するが、それらしいタクシーは到着していない。
左腕の電波時計に目をやると23時10分
既に梨木の言っていた繋ぎの時間 10分間を経過している。

「病院に確認したほうが良さそうだなっ・・・」

ジャケットのポケットを探り携帯電話を探すが見当たらない。

「しまった カウンターの上に置いたままか?！」

バツが悪そうに、店内に戻る長谷川

「あっ オサムっち」店内に入ってきた長谷川修をみつけて、坂本
あけみ

「長谷川君っ 星野君は来たかねっ!？」梨木が声を張り上げる。

「いえっ 途中、何かトラブルでもあったらしく遅れている様です。」

「それじゃ困るんだよっ、星野愛の独占特番組んで本人がイナイじや済まされんぞお」

「大丈夫です、今すぐ確認しますんで・・・」

そう言ってカンターテーブルの携帯電話に駆け寄る長谷川

長谷川の顔を見るなり不機嫌そうな藤原紀子

「ちよっとお長谷川あ、どう言っ訳よお 愛の独占特番なあってえ
ー！！」

「紀ちゃんっ、そんな怖い顔すんなよお イロイロあつたんだって・
・・・」

すると、後ろでタイムキーパーから声がかかる

『CMあけでえ間もなくカメラ戻ります！！ 3・2・1・Q』

左後ろに陣取ったスタッフのTVカメラのランプが赤から青へ切り替わる。

すると梨木が、TVカメラの前に長谷川修を引つ張り出す。

「星野愛さんのマネージャー 長谷川さんが到着です!!」

スッポンの梨木らしいアドリブで生放送中に長谷川修を巻き込む

「こっこれはこれは、梨木リポーター偶然ですね（汗）」

カンターの携帯電話に手をかけるが、突然マイクを向けられ携帯電話はそのまま

「見てらんないわね」

そのやり取りを見て、藤原紀子がカクテルを飲み干す。

「ちつよとお 梨木のおっさん」

TVカメラの前でやり取り中の2人が、その声で振り返る。

「一緒に飲むって言ったわよねえ（怒）」

そう言つて藤原紀子が梨木と長谷川をカンターテーブルの両脇に据わらせ、肩組をしだす。

「何なんだよ拓都お」

「いいから早く」

【キキーツ】

路肩に停車中のタクシーの後ろに停止するバイク

「やっぱりだっ」後部座側の路肩にしゃがみこんだ女性に近づく

「ほっほっほっ ほしのあい さん」正徳が驚きで後ずさり。

「星野さん大丈夫ですか？」

「あらっ偶然 川崎君じゃない、こんな夜に散歩でもしてるの・・・」

「なに冗談言ってるんですか、顔 真っ青ですよっ」

「少し休めば大丈夫よお」

「そんな様子に見えないんですけどお」

「あんちゃんもそー思うだろ、病院に行ったほうがイイって言うってんだけどね 知り合いなんなら後は頼むよ」
タクシーの運転手はそう言つと、あまり関わりたくないらしく料金も取らずに行ってしまう。

（何で星野さんが拓都のこと知ってんだよ……）

拓都と星野愛のやり取りに、呆氣にとられる正徳

『どうかしましたか？』

後ろから声をかけてきたのは、年配の女性

何処かで見かけたことのある顔だ。

「あらっ 先日退院した川崎君、そちらの女性は婦人科にいた佐藤さんかしら」

「あっ整形外科病棟の婦長さん?!」

「よく覚えてたわね 正解よ」

「どうしてここに?」

「ちょっと待って川崎君、偶然の再会でイロイロお話したいところだけど そう言う状況じゃなさそうね」

「佐藤さんの腕を持ってちょうだい川崎君。そこのお兄さんもこちの腕持つて」

「えっおっ俺がですか?」キョットンとした顔で正徳が答える。

「そっ貴方よ」

「病院に連れて行くんですか?」僕が婦長さんに聞く

「もちろんよ、このままじゃマズイわ」

「やめてっ！！ 私を六本木まで急いで連れて行くのよ川崎君」

正徳と僕の腕を払いながら星野さんが叫ぶ。

すると、体勢を崩し倒れそうになった星野さんを婦長が抱きとめる。

「如何しても行くつもりだろうけどお、脈も乱れているし このままでは無理ね」

瞬時に脈や顔色などを判断する婦長

「すぐそこに私の夫がやっている病院があるわ、一旦治療しましょう。」

「ダメよっ 長谷川もファンも裏切れないわ・・・だから行かなきゃ・・・」

ふらつきながらも歩こうとする星野愛を再度抱きとめてる婦長

「判ってるわ。でも、そのままじゃファンの知ってる星野愛にならないでしょ」

『何で知ってるのお婦長さん!!』

「その話も後よ川崎君、早く運んで」

婦長の旦那さんが経営している病院

神谷医院に到着するなり、看護師にテキパキと指示をだす婦長さん

星野さんの左腕にはあつと言う間に2本の点滴
そして肩に大きめの注射が打たれていた。

薬のせいか、星野さんは眠ったようだ。

「さてと、これで星野さんはひと安心」

「ありがとうございます、婦長さん」

「でも、点滴2本が終わるのには早めても30分はかかるわよ」

「さんじゅつぶん」正徳がガツカリした口調で言つと

「そーねー特ダネ特捜部隊が始まって20分は経過しているから、ここから行くのは時間的にも難しいわ」

「どうして知ってるんですか？　そこに行くって」

「息子から聞いたのよ、もちろん佐藤さんが星野愛だったのも病院にいた時から知っていたことよ」

「病院って拓都のいた病院なのかぁ！！」正徳が仰け反りながら驚く
「ごめん正徳っ　星野さんに口止めされてたんだよ」

「そんな話してる場合じゃないわよ、時間はどんどん過ぎてるわ」

そう言いながら婦長が病室のTVをつけ、8チャンネルに合わせる。

そこには、スッポンの梨木と歌手の藤原紀子、人気ダンサー坂本あけみが映っている。

（あれっ　もう一人、男の人がいる・・・はっ長谷川さん！！）

「取り敢えず、星野さんの状況をマネージャー知らせます！」僕は携帯電話から長谷川さんに電話をかけた。

普通に電話をかける僕を見て、正徳も婦長も驚きだ

「拓都って、マネージャーの電話番号知ってるんだ・・・」怪訝な表情の正徳

[illegible]

バー
ギロツポン内では

藤原紀子が梨木リポーターに悪態をついている。

「だからねえ、あんたがフライデーに乗せた記事は嘘っぱちだったわけよおお・あの2人ともただの食事相手ってわけっ、そんなわけっ、寂しいわけっ、ワケワケなわけっ」

「長谷川君っ 藤原ちゃんを何とかしてくれ!!」

「紀ちゃん、少し冷静になって」長谷川が言うがお構いなしの藤原紀子

「あゝん さみしーよおゝおおゝ ホントに寂しいんだかあらあゝ」

泣き出した藤原紀子を慰めるフリをして坂本あけみが耳打ちをする。

（藤原さん、今度は私がやるから泣真似しながら次のネタ考えてて・・・）

すると、藤原紀子が泣きまねをしたままウィンクする

坂本がカウンターテーブルから梨木の前にやってくると「ミルク・ザ・Dカップより緊急発表ですう」と右手を上げる。

「どっとうしたあ坂本君」

突然立ち上がった坂本あけみに驚いて、つい聞いてしまう梨木

「来月っ ミルク・ザ・Dカップが歌をリリースいたしまあーす♪」

「なっなんとお でっその曲名は？」梨木が坂本あけみにマイクを突き出し曲名を確認

「【恋のフィンガーテクニク】9月1日iTunes Storeで先行配信です！ヨロシクね（微笑）」

「はいっ有り難うございます、ミルク・ザ・Dカップの歌のリリースのお知らせでした。」

（ヤバッ 早くも無難にまとめられてしまった。）

坂本あけみが、横目で藤原紀子を確認すると泣いたままの状態で目が怒っている。

バタバタした店内が一瞬静まり返ると
カウンターテーブル脇に置いてある携帯電話が鳴り出した。

「あっすいません、私の携帯電話です。」そう言って 長谷川修が

電話を取ろうとすると

携帯電話の液晶画面に表示された着信名【星野愛】を確認した梨木が先に電話を取ってしまう。

「ハイッ もしもし梨木隆弘です。」

（くっ なっ なんで梨木が電話にでるんだよ（焦））

僕は、長谷川さんじゃない通話相手に声が出せない。

「もしもし星野君っ ？ ！今日はバーに来ないのかね」

（どっどーする ？ どーする ？ どーすればいいんだ ！ ！）

「星野君は約束をまもる人だと思ったんだがね」

その言葉を聞いて僕の頭に血がのぼったからなのだろうか？

それとも潜在意識が得策と考えたのだろうか？

僕はどうしてこんな行動を取ったのか、僕自身でもわからない。

だけど必死だった。

後先なんて考えられなかったんだ。

左手で自分の鼻を摘み、声色を変えて僕は梨木にむけてこう言っていた……。

『星野愛を誘拐した……』

アイドルの価値10

【要求は？ の巻】

梨木の動作が一瞬止まる

「星野愛を誘拐？ 誘拐ってどう言うことだっ！！お前は誰だ何ものだっ！！」

『おとなしく要求をのまなければ、命の保障はないぞお…………。』

「要求？ ホントに星野愛を誘拐したのかね？」

「信じなくても別にいいんだよお、星野愛がどうなってもいいのなら…………」

「ううゝんっ それはあゝ困るな…………どうすれば星野くんを帰してくれるんだ」

「…………。」

（ヤバッ要求まで考えてなかったぞお・・・）

「要求はなんなんだ！！」TVカメラを意識した迫真の演技？
の
梨木

「よっ要求は・・・」

「要求は?!」

「よっ要求は・・・次の電話で詳しく話す」

【ピッ】僕は通話を切った。

「くっ切りやがったあ」

梨木が長谷川の携帯電話を凝視しながら言葉を吐く

「愛を誘拐つてえ ホントにそう言ったんですか？」

長谷川が驚いた顔で聞き返すと、小声で梨木は聞き返す。

「長谷川くんの仕組んだ企画じゃないのかね・・・」

「いやっ私は別に何も知らないですよ・・・」

そう長谷川修が言い終わると梨木はカメラに向き直り、しんみりと喋りだした。

「犯人の要求は次にかかってくる電話で話すそうです。」

「愛を誘拐って、どう言うことよ」困惑した顔の藤原紀子

その隣で心配そうに様子を伺う坂本あけみ

「みんな落ち着け、相手は通話時間を短時間で済ますような知能犯だ。下手な動きはできんぞお」

そう梨木が言うとTVクルーに一旦CMに行く様に指示

TVカメラのランプが赤に替わりCMに切り替わる。

すると、そのタイミングで藤原紀子が

「何言ってるのよっ、早く警察に連絡しなさいよ!!」と興奮気味に梨木に食って掛かる。

「それは出来ないな藤原ちゃん、そんな事したら番組は即中止になっってしまう」

「あんたは愛の命より、番組の方が大事だって言うのぉ?!」完全にキレた藤原紀子が大声でかえす。

「まって紀ちゃん、今 警察に連絡するのは得策とは言えないぞお」

長谷川が顎を擦りながら冷静に答える。

「どう言っことですか?」坂本あけみが静かな面持ちで聞き返す。

「犯人は生放送中に私たちにコンタクトしてきているんだよ」

「全国放送をしていることを知っていて連絡してきたってこと?」

「そっ つまり全国の視聴者にも、このやりとりを知ってほしいって思っている可能性が高いんだ」

そこまで 長谷川が喋ると今度は梨木が喋りだす。

「何か意図があつてのコンタクトつてことだろう、下手な動きをして犯人を刺激することになると 場合によっては放送中に星野さんの命が本当に危なくなる。」

そこまで言つてスタッフの1人に何やら耳打ちをし出す。

長谷川は顎を擦りながらフト考える

（愛の携帯電話つて川崎君が持ってたんだよなあ・・・誘拐の犯人は川崎君・・・なのか？）

『間もなくCMからカメラ戻ります』タイムキーパーが慌ててコールする。

スポンの梨木は、マイクを握り直しカメラの前に立ちニヤリとする。

（くくつ 面白くなってきやがったぜ！！ 俺の人生最大のスクープネタだ、本当に星野愛ってアイドルには価値がある・・・。）

んが大人なコメント

「だけど、また電話をして要求を連絡しなきゃないんだろ、何を要求するんだよ拓都」

「別に考えてないよお そんなのお」

「そうね〜本当の誘拐犯じゃないんだし、どうしたらいいかしら・・・」

そついい残し考え込む様にして婦長さんが病室から出て行く。

僕と正徳は、何も考えられず生放送中のテレビを見つめるだけだ。

テレビの中では、星野さんの突撃取材をする予定だった話から

現状までの経緯を、スッポンの梨木が大げさに手振りを交え解説して行く。

話の合間に長谷川さんにコメントを求めたり、歌手の藤原さんに星野さんとの秘話を話させたりと視聴者が引き込まれる話術

僕自身、その番組を観て楽しんでしまっている。

でも、その番組の中心にいるのが星野さんを誘拐した犯人がいるのだ。

つまり、僕たちだ！！

（ガーン）

その現実到我に返り、冷や汗が背中を流れるのがわかる。

テレビ画面の中では、ネタが尽きないとばかりに梨木が喋りっぱなし

「このこの長谷川マネージャーの携帯電話に犯人から連絡がかかってきたのです！！」

長谷川さんの携帯電話をテレビ画面に突き出して、アップで見せると

「犯人の要求は まだ来てありません。要求は、また連絡して来ると言っていました。が星野愛さんの安否が心配です・・・」

そう言って目を閉じ神妙な面持ちをする。梨木が喋るのをやめた為、

バーの店内は静まりかえった。

暫くその表情のままでいると突然目を開き「安否だけでも確認いたしましう」

梨木は、長谷川さんの携帯電話にある、着信リダイヤルボタンをカメラの前でプッシュした。

その瞬間、僕と正徳は思わずテーブルの上の携帯電話に目を向ける。するとテーブルの上で携帯電話がバイブレーションでブルブルと踊りだし

長谷川さんの携帯電話からの着信だとばかりに、札幌一番の着メロが鳴り出した。

アイドルの価値11

【確認の巻】

「どうする正徳？」

「どうするって、でなきゃ駄目だろ？」

「今度は正徳でてみないか？」

「いつ 今更でれる訳ないだろっ！！」

「だよなっ・・・・・・・・」

僕はリズムカルに札幌一番を鳴らす携帯電話を取り
通話のボタンを押す。

「もしもし梨木隆弘ですがあゝ」と いきなり濁声の梨木の声

僕は忘れずに鼻を摘み喋りだす。

「こちらから連絡すると言っただろっ!!」

「あっあゝスイマセン恐縮してます。」

「なら電話をきるぞお」

「ちよちよつちよつと待つてください!! あのおゝ星野愛さんの声を聞かせてもらえませんかねゝちよつとダケでいいんです、ちよつとダケで・・・」

「それは出来ない」

「でも・・・それじゃ・・・ホントに星野さんがそこに居るのか分からないじゃないですか?!!」

「・・・・・・。」

「要求以前の問題ですよ、星野さんがそこに存在しているかどうかの証拠がほしいんです。」

「……………」

（別に要求も考えて無いっのぉ、どうしよう星野さんは寝ているし…………）

「代わるわよ川崎くん」ベットの方から声がする。星野さんだ

僕は咄嗟に受話器を押さえて状況を説明しようとする、星野さんが優しく微笑む

「さっきから聴いていたわ」そして僕から電話を受け取って話し始めた。

「ご無沙汰してます梨木リポーター」

「！」

「御免なさい、時間まで伺えなくて」

「ほっ本物かぁ、本当に誘拐されていたんだな星野くん」

「バツチリ誘拐されちゃってるみたいよ、わ・た・し」

「そうかバツチリ誘拐されちゃってるんだなっ」

「こんなシチュエーション、スッポンの梨木の得意分野でしょ」

「くくっ人質が何言ってるんだか」

「日本一の特ダネリポーターなら、番組盛り上げて私もサッサと助けなさいよ」

「さすが星野愛 この状況をわかってらっしゃる、頭の良いアイドルはワシは好きだよ。」

「ここまでだ!!」

【ピッ】僕は携帯電話の通話をきる。

テレビ画面上では梨木が考え深めに、通話がきれた携帯電話を見つめたまま

「星野さん スッポンの梨木を煽ったら駄目じゃないですか？」

「あらっ川崎くんのお手並み拝見出来るんじゃないかなかったのお」

「ぐお」

「フフフツ冗談よっ」

（うわぁ〜ヤツパ間じかで見える星野愛さん、笑顔 超力ワユス）正徳が見とれていると

「そっちのナイスガイは、正徳くんだったかしら」丁寧に星野さんが聞く

「何時の間に名前を？」

「一度耳に入っただけは記憶する癖があるのよ、フフフツ」

「星野さん、体調はどうですか？」僕が聞く

「点滴がまだ残っているけど、もうピンピンよ」

ドリフの中本工事バリにガッツポーズしてみせる。

「どうします星野さん、六本木に向かいますか？」

「何いってんのよっ、ここまで話作ったんなら最後までこのネタで行きましょう」

「さっ最後までって……」この発言に正徳が目を丸くする。

「要求の電話をしなきゃならないんです、星野さんは要求の希望とがありますか？」

「要求の希望ねえ……私の引退ってのは どう？」

「いんたいっ（驚）」正徳が声をあげる。

「引退って星野さん……」

「そうね、そんなの要求になる訳なかったわね（笑）」

「目が覚めた様ね」

そこに婦長さんが飲み物を持って戻ってきた。

「先ほどは失礼なことを言ってすいませんでした。」星野愛が丁寧に挨拶する。

「仕方ないわよ、プロたるゆえんだもの」そう言って星野さんに白湯を渡し
僕たちにも麦茶を差し出される。

「あの事件の後、藤川（藤川裕子）の見舞いに佐藤（星野）さんが行ってくれたそうね」婦長さんが改まって聞く

「フッフ　元気にしてますか、藤川さん」

「裕子さん・・・」その名前に反応して思わず反応してしまう。

「佐藤（星野）さんが来てくれるまでは、喚き散らしてたのよ　何で死なせてくれなかったんだって」

「私が助けたんじゃないや無くて、その川崎くんが藤川さんの病気を治してくれたんです」

「ふふっ川崎くんがナイトだったのね」

「いえっ僕は別になにも・・・」

「あらっ藤川さんの仇討ちしてあげたじゃないの」

「拓都お前っ仇討ちもやってたのかぁ？」

「藤川、あなたに会いたがってたわよ」

「僕がお見舞いに行ったときには、既に裕子さん退院してたみたいで・・・」

「明日会えるわよっ、彼女　ここの病院で働いているの」

「えっそうなんですか？」

「あらっ、こんな話ばかりしてられないわよね」

婦長さんが真面目な表情になり話題をかえる。

「役に立つかどうかしれないけども、私の家のバカ息子」
そう言って現れた男は、アキバ系を絵に描いた様ないでたちの男だった。

アイドルの価値12

【ペロペロ〜ンの巻】

汐留シオサイト

ミュージック・メガマーケット・プロダクション
エムベック本社ビル 会長室内

その寝室に60代の男と若い女がプロジェクターTVの大画面で特ダネ特捜部隊を視聴中

「何よつこのヤラセ番組わぁー」

「梨木もこんな大それた番組をする様になつたんだにい」

「そんなんじゃないで、何で森田プロのタレントだけがギロツポンにいるのよ不公平だわ」

「ムヒムヒツ 坂本あけみを森田の所にやったのが失敗だったかに
い」

「ふんっ あんな女っウチの事務所に必要ないわよ」

「しかしイイねー藤原ちゃんのオッパイ、うちのプロダクションもボインちゃんが必要だにゃー」

「それって、私へのあてつけかしら水上会長」

「のんのんっ はまだみく 浜田未来はうちのプロダクションを背負って立つ歌姫だしよお」

「でも会長は胸の大きい娘が好きなんでしょう?」

「バカだね未来ちゃん、そんなの関係ナイナイでしょおよお」

「ホントに〜」

「ホントだしよお、未来ちゃんの可愛いオッパイもボキは大好きしよお」

『ペロリン』

「キャッ!ー! くすぐったーい さっきしたばっかりでしょ」

「ムヒムヒッ」

「ダメよお 水上会長お あの番組ブツ潰してくれなきゃ させて
上げないんだからあ」

【ガチャ】

すかさずベツトサイドの電話を取り電話をかけ始める会長の水上

「社長にまわしてくれ・・・あー里^リ花か、今放送中の特ダネ特捜部隊
の放送を止めさせろ」

『でも、お父様 生放送中ですし森田プロのタレントが出演中です
わ』

「かまわん、森田に恩義はあるが番組仕切ってるのは梨木だしよ」

【ピッ】

テレビでは番組の延長が決定され、梨木と誘拐犯のやり取りは続いていた。

放送局のムジテレビには、ファンや他局の報道陣より問い合わせが殺到し

電話回線はパンク寸前

なのに何故か警察からの問い合わせは入っていなかった。

「要求を聞こう」相変わらず梨木の迫真の演技？ は視聴者を釘付けにする。

僕は鼻を摘んで、ゆっくりと要求を喋りだした。

「ドトールのコーヒーをアイスで4人分」

「どつドトール？」梨木の濁声が裏返る。

「それと・・・」

「そつそれとお？」

「種子島宇宙センターに衛星中継車を一台」

「たつたつ種子島宇宙センターって、そこに星野くんがいるのかね？」

「黙って話を聞けっ！！ 中継車には運転手は一人、宇宙センター内には他の人物は絶対入れるな」

「入れるなって言われても・・・」

「2時間後がリミットだつ、1秒でも過ぎれば星野愛の命はない」

【ピッ】

（クソッ！！ 鹿児島の子種子島宇宙センターか、ここから何時間かかるってんだよぉ）

梨木は歯ぎしりをしながら悔しがる。

「2時間って、東京から中継車運ぶにしても間にあわないわよ」

藤原紀子がカンター席から降りて、心配そうに梨木に喋る。

「いやっ それは大丈夫、種子島にはロケット打ち上げ時の撮影用で中継車を待機させてある。」

「じゃ時間まで届けることは出来るのね」ホッとした藤原紀子に今度は坂本あけみ

「でも何故 宇宙センターに中継車なのよ？ 要求って普通は現金とかじゃないのぉ？」

「そんな問題はいつでもイイんだよ、ワシが要求時間までに現場にいけないのが問題なんだ」

『なにそれ！！』藤原と坂本が同時に吐き棄てる様に喋る。

「へりだと時間的に無理だが、チャーター機なら何とか間に合うかも」ポツリと長谷川修

ニヤリとイヤラシイ笑顔を浮かべると梨木は携帯電話で何処かに連絡をしながら

撮影班と一緒にバーから外へ

その後を藤原紀子と坂本あけみが追いかけていく

「修っちは行かないの？」あけみが長谷川修に声をかける。

「ああっ気になる事もあるし、ここに残るよっ」

「私たちっ森田社長にも言われてるから後追いかけます!!」

梨木リポーターと撮影班、そして藤原紀子と坂本あけみがドヤドヤと店外に出ると

そこには4ゝ5人黒いスーツを着た男たちが待ち構えていた。

「今すぐこの番組を中止しなさい!!」真ん中の男が叫ぶ

「意外と遅かったなあゝお前たち!!」

神谷医院 内

「本当に、こんな要求で大丈夫なんですか・・・？」

僕は半信半疑だった。

「大丈夫に決まってるよっ 何疑ってんだよ拓都お」

正徳が興奮しながら言うてくる。

僕は婦長の息子のアイデアに従って、要求を言うていただけなのだ。

「まだ大丈夫じゃナイヨ、これからが本番なんだから出かける準備してちょ」

その言ったのは、チョット太めの体型に厚めの眼鏡

そして上着のＴシャツには、【ローアングル命】とプリントされて

いる男

つまり婦長さんの息子、慎也さんだった。

正徳の話によると、慎也さんは伝説のアイドルブロッガー【ゴットシン】だったんだと驚いていた・・・その話に僕も超驚きだ（汗）

（神谷慎也、神谷でゴット、慎也でシン　それでゴットシン　ってことお???）

「準備オーケーよっ」何時の間にか星野さんは看護師の仕事着ナース服を着込んでいる。

（なっ　なんか異常に似合い過ぎなんですけどお）

「君たちもこれ着るのよ」そう言って婦長さんは男性用の看護師服を手渡す。

本来なら誘拐犯って事で、尋常じゃないくらい緊迫する状況なのに

星野さんをはじめ、みんなノリノリで準備を進めている。

そして何故か楽しくてワクワクまでしてしまっているのだ。

これが伝説のアイドルブロッガー【ゴットシン】のチカラなのだろうか？

僕は病院で使う搬送用の救急車に乗り込み
ゴットシンの指示する場所に向かうのだった。

アイドルの価値13

【種子島宇宙センターの巻】

鈴原藍の住むマンション

明後日の【キラリン美少女を探せ!!】2次審査受ける準備で風呂上りに念入りに手入れをする鈴原藍

母親が月に1度しか使わない高級パックを化粧箱からクスネて顔にパック中

何の気なしに点けたテレビの中で
生放送中の特ダネ特捜部隊に釘付けになっていた。

「いったい、どうなっちゃうのよお？」

テレビ画面上では梨木とスタッフ、そして藤原紀子と坂本あけみがチャーター機で種子島宇宙センターに向かう機内を映し出している。

相変わらず機内でも熱弁をふるう梨木

祈るような仕草で手を合わせる藤原紀子は
何時もの悪女ブリから遠ざかった可憐な表情

坂本あけみは、何処で購入したのかドトールの袋を抱えている。

鈴原がテレビのチャンネルをまわしてみると

他局も地方局と連携を組み

状況は違えども星野愛誘拐事件の特集を放送しだしていた。

「スゴッ NHK以外は星野さんの番組になってるわ・・・」

ムジテレビは既に地方局から種子島上空にヘリを2機飛ばし
島上空からの画像も番組の要所要所にカットインさせていた。

ヘリから照射される強力なスポットライトは、さながらハリウッド
映画の様に物々しさをかもし出している。

「ゴジラでも出てくる勢いね・・・大丈夫かしら星野さん」

間もなくチャーター機が種子島に入るころ
飛行機の無線に誘拐犯から連絡が入ったことを告げられる。

誘拐犯の連絡は星野愛のマネージャー 長谷川修が受け
その内容を機内へ無線で伝えているのだ。

『今、犯人から入った内容によると、中継車を運転する人間を指定
してきた模様です。
指定してきた人物は、ふじつ？ 藤原紀子・・・さんです！！』

『えっ わたしっ！！』

『嫌ならわたくし梨木が代わりに運転して入ると交渉します！！』

『映画の撮影で大型車は運転したことはあるけど・・・犯人が、
ちよつと怖いわね・・・』

『じゃ運転手はわたくしが、代わりにして行くということで交渉し
ましょう！！』

『あつ でもつ 愛のことも心配だし、私が運転します』

『大丈夫ですか？』

『大丈夫です！！』

状況察知して交渉させてくれよ的に不満そうな梨木

そんな 梨木の表情がアップで写ったかと思うと画像が乱れる。

【キュキュンッ グオオオーン】チャーター機が島に着陸したのだ。

種子島宇宙センターの上空は、次々にヘリの数が増え8機近い数のヘリが旋回している。

全機、機体からスポットライトを宇宙センターに向け照射しているのでセンター付近はさながら真昼の様。

センター正門前には、テレビ局関連のリポーターやスタッフ

そして野次馬でこつたがえ状態

その正門前に用意された中継車の横に、黒塗りの車が急加速で近寄り音を立てて停止

【キキーッ】【ボタンー！】

降りて来たのは、梨木たち一行

「藤原ちゃん、話した通り中継車から専用のカメラを撮影しながら中に入って行くんだぞお解るな？！」自分が中に入れないジレンマでイライラしながら喋る梨木

「わかってるわよお、そんな大きな声出さないでっよお」（怒）「

「はい これ ドトールのアイスコーヒー」坂本が藤原にドトールの袋を手渡す。

「紀子さん 梨木はあんなこと言ってますけどお危険な場合は撮影なんてしないでいいんですからね」

「大丈夫よっ久しぶりに私と愛が競演するのよ ビビッてなんかいられないじゃない」

「ほほうっ 何時もの藤原紀子に戻ったようだなっ」梨木がニヤリとする。

そして、梨木の実況する中

藤原紀子が中継車に乗り込み宇宙センター正門から
ゆっくりと敷地内に中継車をすすませると

梨木の携帯電話に長谷川から連絡がはいった。

『上空のヘリを全部撤退させると犯人グループから連絡です。』

「くっ わかったっ直ぐに各局に通達する！！」形相が険しくかわ
り梨木がスタッフに指示をとばす。

そのやり取りをテレビで観ていた鈴原は

「ヘリの音が煩くて梨木リポーターの声もヨク聞こえなかったのよ
ね」

と言いながらフェイスパックを顔に着けた状態でコクリと頷く

ヘリの撤退の間、テレビは一旦コマーシャルにはいった。

この瞬間と思い、飲み物を補充する為にキッチンに向かう鈴原

「ギャーーーーー！！！」

ガラスに写った自分の顔に驚き奇声を上げてしまった。

（げっパックしたままじゃん）

バスローブから

すっかりパジャマに着替え テーブルの上には飲み物とクッキー
番組放送の長期戦にも対応可能に準備する。

鈴原が再度テレビに目を向けると

ちょうどコマーシャルから番組に映像がもどったところだった。

センター全体を写すようなアングルのカメラが映し出され

テレビ画面を観るかぎり、宇宙センター上空のヘリは1機もいなくなっただけ。

ヘリの複数からなる旋回音が消え、宇宙センター周辺はシーンと静まりかえっている。

そんな雰囲気打ち消すかのように、梨木の実況が再開！！！！

『センター内の入り口に停車された中継車から　今　藤原紀子が降り立ちましたあああ』

藤原紀子が肩に担いだ中型の中継カメラが
宇宙センターの建物入り口を捉えると、中継車にその映像が送られ、テレビ局に送信する衛星アンテナより一旦テレビ局に映像を送り、そのテレビ局から全国にその映像を各家庭に中継される仕組みだ。

藤原は予め指示されたロケット発射台に向かう。

各部屋や廊下には照明が点灯されているが、職員がいない為物音一つ無い

そのため、歩く音が反響して耳ざわりなほどだ。

宇宙センターの外では、藤原紀子の映し出す画像を梨木が相変わらず解説している。

暫く歩くと、扉に【この先ロケット発射台 危険】の表示

「ここね・・・」藤原が重厚な扉のノブに手をかけた。

アイドルの価値14

【みなさん さようなら の巻】

そしてゆっくりノブを回し扉を開ける。

【バシューッ】密閉された扉が開放される音

【ガッガガーザザー】

カメラの画像が一瞬乱れる。

突然、犯人らしき3人が迫って来たのだ。

その3人の風貌を見て藤原紀子は声も出せない。

メタル系の衣服をまとった彼らの顔は
人間とは似ても似つかぬ軟体動物系の顔だったからだ。

そして

軟体動物系の生物が藤原紀子の方に近づいてくる

すると

カメラの枠内に辛うじて映っているドトールの袋を
その生き物に取り上げられてしまう。

軟体動物系の顔をした人間は、どちらかというとタコ形の顔をして
いた。

タコ顔の人間は、ごそごそと袋を開け取り出したアイスコーヒーの
1つを

後方に佇む星野愛に手渡す。

「ありがとう」そう言って星野さんはアイスコーヒーを一口

「あゝ美味しい、地球を後にする前に最後に飲みたかったのよね」

得体の知れないタコ形の生き物も、器用にストローを使い飲みだし
妙なうめき声を上げるしまつ

「なっ何なんだあ あの生き物は？」

物凄いテンションで実況していた梨木の声のトーンが少し下がってしまふ。

「星野愛の誘拐犯が化けているのか……」

カメラ越しでも実にリアル感があり、キグルミを着てる様には見えない。

画面中央に映る 星野愛が落ち着いた口調でゆっくりと話し始めた。

「梨木リポーターならびにTV局関連の皆様、そして私のとても大切なファンの皆様
私は誘拐された訳ではありません。」

3体の生き物の1体が、画面後ろに映っている円盤型の乗り物の扉を開ける。

「私の故郷から自分の星に帰るようにと、3人の王族チューコッタが迎えに来たのです。」

星野さんがそう言うと両サイドにいる2体の生き物が「うおっうおっ」と唸りながら歌い始める。

「ブーッ 星野さんって宇宙人だったのお？」

飲みかけのジュースを噴出し鈴原がTVの前で仰け反る。

（迎えに来た王族のチューコッタって、何で星野さんと違う容姿なのよ お へんなのお・・・）

「でも、あの両脇のチューコッタの声 どっかで聞いたことがあるわね」

（何度も聞いたことがあるような声だわねえ・・・）

解りかけるがTVに映るチューコッタという生物の不気味さが先にたち答えが出ない。

「ラリラリララー・ラリララー」

今度はチューコッタが歌いながら踊り始める。何故か応援団の様な踊りだ。

「私の大切のファンの皆様に、こんなカタチでさよならする事になつてしまつて本当に御免なさい・・・何時の日か 私のハートを皆に届ける事が出来るといいのだけれど・・・」

星野愛の瞳からは一筋の涙が流れ、両脇のチューコッタは床にひれ伏す。

「ちょっとお・・・これって・・・本当の話だったりするの？」

鈴原がそつ口走つた瞬間

「んっ?! チューコッタの踊りって うちの学校の応援団がやつてるヤツじゃん?!」

モニターの中で、星野愛が笑顔で手を振っている。

「私は故郷の火星に帰る旅に出ます、長い間応援してくれて ありがとう！！ そして、みなさん さようなら」

星野愛と3人のチューコッタと呼ばれる生物は
後ろにある円盤型の宇宙船に、備え付けられたタラップから乗り込む。

それを見た梨木は無線で藤原紀子に指示を入れる。

「藤原ちゃん！！ 星野君を解放しない様なら約束が違うつ 星野君を引き止めてくれっ！！」

「・・・・・・・・。」

「藤原ちゃん？」

「・・・・・・・・。」

「藤原ああ応答しろっ!!」

「・・・・・・・・。」

「くそっ!!」

梨木は予備の中継用のカメラを担ぎ
宇宙センターの中に駆け出した。

応答しない藤原紀子の映すカメラでは
宇宙船に乗り込んだ後にハッチが閉められ、機体下部からモクモク
と煙が噴出

【ゴッゴゴゴォー】

轟音が響いたかと思うと、画面いっぱいに閃光がキラメキ
一瞬 画像が真っ白に

そして
宇宙センターの建物上部からは、花火の様な光の玉が上空へ一直線
に上がって行く

「どっとうなった？ 状況を教えてくれ！！」

無線で外部にいる坂本あけみに状況を確認する 梨木

『センター上空に宇宙船が消えました。』

「なっなんだとお？ 本当に行ってしまったのか・・・」梨木は口
ケット発射台に急ぐ

外の報道陣と野次馬は突然の出来事に呆気にとられている。

坂本あけみを含め、センター上空へ飛び去った宇宙船の事が信じられ
ないらしい。

【バタッ バタッ バタッ バシュー】

「ふっ 藤原ちゃんっ！！」

ロケット発射台の扉を開けると、藤原紀子が倒れていた。

「あつあ．．．すっスッポンの梨木．．．」

「良かったっ気がついたか．．無事だったんだなっ」梨木は藤原紀子を抱き起こす。

「ごっ御免なさい．．わたし．．．」藤原が力なく梨木に誤る。

「．．．まあ．．いい．．カメラはしっかり映してくれていたよ．．
」

藤原が持ち込んだ中継カメラは入り口に入って直ぐの作業パネルに置かれ
撮影を続けていた様だった。

発射台脇に置かれたドトールのアイスコーヒーも全て飲まれている様子

「数秒前までここに居たのか．．．こんな事になるなら、ワシが強引にでも中継役になるんだったわい」

ロケット整備用パネル横にある椅子に力なく座り込む梨木

このとき梨木は藤原紀子の口から香るドトールのアイスコーヒーの匂いを見落としていた。

アイドルの価値15

【ローアングル ゲットオ！！の巻】

「うふふふっ」

「わっははは」

「くくくくっ」

小さくなる地球を見ながら、みんな大爆笑

中継された通り、僕たちは火星へと旅立った……。

と そんな事があるわけがなく

テレビ中継された内容は、全部ゴットシンこと慎也さんが仕組んだことだった

種明かしの話をするには

僕らが神谷医院を出発した場面まで、時間を戻さなければならない。

星野さんと正徳、そして僕が搬送用スペースに乗車

運転席にはゴットシンこと慎也さん、助手席には婦長さん

5人に乗せた搬送用の救急車が走り出して30分後、路肩に静かに
停止

「着いたヨンサマ」運転手の慎也さんが僕らに声をかける。

車外を見ると何処かで見たことあるような建造物

球体のオブジェがあるビルって【お台場のムジテレビ本社？】

「慎也さん、行き先って宇宙センターじゃ……」検討違いの場
所に僕が聞く

「誘拐犯がわざわざ捕まる様なマネは出来ナイス、それに宇宙セン
ターは遠いザンシヨ」

そつ慎也さんが言つと両手を胸の高に広げ【待て】のポーズ

「ここからが大事なんだから良く聞いてクレパス」
みんな慎也さんに注目する。

「まずはマゝマ（婦長さん）、マッポ（警察）には連絡済みでスカ
チヨ？」

「ええっ伝えたわ、ムジテレビ主催の生ドラマなんで本当の誘拐と
間違えない様にして下さいと・・・」

「よろしいザンス。次に星野殿、ジャーマネのハセピー（マネージ
ヤーの長谷川）に依頼の件大丈夫？」

「最初びつくりしてたみたいだけど、状況は飲み込めた様なんで大
丈夫よ」

「グラマーねーちゃん（藤原紀子）から了解メールの返答は来てマ
ッサル？」

「大丈夫よっ チャーター機に乗る前に了解返答きてるわ」

「オッゲベイベツ!!、でわでわ正面玄関よりID無しで受付を強行突破しちゃうザンス」

「えっ 何でっ ムジテレビの局内に入っちゃうの?」

僕が言った言葉は無視され車は急発進、正徳の頭の上にも?マークが出ている模様

【キキキーーーーギユーーーーン キュキュッ ガクン】

直ぐに車が急停止する、窓の外を見ると既にムジテレビ正面玄関前
婦長さんが救急車の後部ドアを開け、ストレッチャーを外に運び出
す。

「さあ乗り込んでチヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨオ
!」

慎也さんがそう叫ぶと婦長さんが先頭で走り出し

ストレッチャーを星野さんが小走りで押して行く

遅れを取ってはいけないと、僕と正徳が訳けも解からずついていく。

ムジテレビの１Ｆフロアーにバタバタと５人が突入

「間に合わなくなるので 急いでえ」と受付に聞こえるように婦長さん

いつの間にか付け髭と聴診器を身につけた慎也さんが、受付嬢に声をかける。

「Ｃスタジオで怪我人が出たので急ぎマッスル!!」

受付嬢の目が一瞬丸くなるが、全員白衣と言うことで難なく通過

すると、前に立ちはだかった警備員

一瞬ドキッとしたが、停止させるどころかＣスタジオの近道を教えてくれる始末

一番早く行けると言う東側のエレベーターに乗り込む事に難なく成功する。

「ぷっぷぷぷ」エレベーターの扉が閉まると、星野さんが笑いを堪えきれず噴出した。

「案外楽しいわね、ふふふ」今度は婦長さん

「第一関門突破デスマッチョ」慎也さんがオドケタ口調で言う。

意味の解らない僕ら2人は顔を見合わせるだけだ。

「慎也さん何でムジテレビに来たんですか？」

僕が再度 慎也さんに聞くと、4階でエレベーターの扉が開く

4階フロアから入ってきたのはムジテレビの人気女子アナウンサー
中島 ナカシマフミ 富美さん。

中島アナと星野さんは番組で競演したことがある為、正体がバレる可能性があった。

エレベーター内が静まりかえり緊張が走る。

星野さんは顔を見られない様に、下を向いて顔を隠すが
女子アナの中島さんは気づいたのかジロジロと星野さんの方を見て
いる。

中島アナが口を開こうとすると、先に慎也さんが喋りだす。

「中島アナウンサー 昨晚 夜遊びしましたね」

【ギクツ】と驚いた顔で慎也さんの方を振り返える中島富美アナ

「どっどうしてわかるの？」

「顔にでておりますなあああ」

「でっ出てますう、ホントおにい？」

「予防しておかないと1年先は大変な事になつてるでしょうねえ」

「やゝん、どうしよう？ なんかイイ予防とかお手入れってありま
すう先生っ」

「一度専門のクリニックで見てもらった方がイイね」

「専門って、そんな病院あるんですかあ」

「外苑通りにある神谷医院が丁寧でおすすめてですよ」

そこまで言つとエレベーターの扉が開き中島アナの降りる階に止まった。

「どうも有難うございました。」頭をペコリと下げる中島アナ

「きつ キラキラしてる・・・」正徳の目がハートマークになっている。

すると慎也さんが下の方からゴソゴソと何かを取り出した。

デジイチ？（デジタル一眼レフカメラ）

「中島アナのローアングル ゲエトオ！！」

（ゲットオって、まさかパンチラ？ ゴットシン、隙が無い・・・
って犯罪じゃないのお・・・）

正徳がゴットシンに中島アナのパンチラ写真をもらう約束をしたのは定かではないが

2人がコソコソ耳打ちしていたのは事実だった。

エレベーターはCスタジオのある10階に停止

5人はエレベーターから降り、Cスタジオに向かう。

アイドルの価値16

【ドッキリの巻】

スタジオの扉を開けると

そこには宇宙センターの発射台が再現されたセット

「こっこれって・・・」僕は慎也さんの顔を見る。

「先週の木स्प【矢追純一のUFO特集】で使ったセットだヨォン」

慎也さんが言った通り、木曜スペシャルで放送されたスタジオセット種子島宇宙センターの発射台をモチーフにしたものだった。

「慎也さん、どうしてセットがまだ残ってるってわかったんですか？」

「今週ゴールデンでやるドキュメンタリー【スペースコロニーの全て】にセットを流用するのがわかってルンバ」

回りを見渡すと、セットの周りには新しいセットのパーツが準備されている。

僕が関心して各パーツのセットを確認していると

慎也さんは、イソイソとセットの配置を作り変えていく。

「マゝマ（婦長）カメラのアングルを見るから、そこに立ってちょ」

「このパーツの位置はココでいいですか？」正徳も率先して手伝いはじめる。

（星野さんは何処に・・・）僕はスタジオを見渡すと入り口脇のデレクターシアに疲れた表情で座っていた。

「大丈夫ですか？」僕が近寄り声をかけると星野さんの表情が笑顔に変わる

先ほどまで体調が悪かったなんて思えないほど、本当に素敵な笑顔だ。

「大丈夫よ川崎くん、凄く楽しいわ」

「楽しいって星野さん？ 全国ネットの番組で誘拐犯扱いされているんですよ」

「ふふふつ だからイイんじゃない？ 全国の視聴者にドッキリ仕掛けている様なものなのよお 傑作だと思わない？」

「でも、もしも ばれたら・・・」

「【でも】も【もしも】も考えちゃ駄目、川崎君らしくないわね、成功することを考えなくっちゃ」

「でも 星野さん・・・」

「ほらっ また、【でも】 って言った（笑）」

【ガチャ】Ｃスタジオの扉が開く

ビックリして振り向くと、長谷川さんがドトールの袋を抱えて入ってきた。

その後ろから、もう一人 奇抜な衣装を着た女性も入室。

「ごめん ごめん 中々捕まらなくて、こちらメイクアップのガモウさん」

長谷川さんが入ってくるなり紹介されたのは綺麗な女性

ただ、オムツの様な変な衣装をまとっている。

「初めまして、ガモウです宜しくね」そう発せられた声は低音のゴツイ声

（えっガモウさんて、もしかして男?!）

その答えを聞く前に、無理やり慎也さん・正徳・そして僕が椅子に座らされる

どうやら有無を言わせず、メイクアップをするらしい。

「こちらのガモウさんはステイプルスバークも唸らせたSF Xメイクアップの第一人者です。安心して顔を預けるように」
長谷川さんがニヤニヤしながら説明

星野さんも婦長さんも笑いを我慢してるしているのが判るほど肩が

震えている

（ハッキリ笑ってもらった方が僕としてはスッキリするのだが・・・）

「顔のイメージは何かイイかしらあ」ガモウさんが慎也さんに聞く

「一応、星野姫が火星に帰る設定なんでタコちゅーでオネゲーしやつす（@0@）／」

「うふっ、業界用語で言っとチューコッタね」そう言い終わるとメイク道具を広げ作業開始

「3人を50分で仕上げるんだから、ジツとしてなくちゃだわ」

そうガモウさんが言うと、両手別々の作業を器用に開始

僕らのメイク中には長谷川さんと星野さん、そして婦長さんが打ち合わせ

耳から入ってくる会話を聞くと

中継車の運転手を藤原紀子さんにする様に、チャーター機の梨木に連絡を入れるらしい。

事前に携帯メールを使い、藤原さんには星野さんと打ち合わせは完了済みだ。

藤原さんがロケット発射台に入った瞬間に、こちらのスタジオのカメラに切り替える作戦

・・・成功するのだろうか？

カメラがスタジオに切り替わった後

放送関連の作業を長谷川さんが受け持つ事に

藤原さんの役を婦長さんがすることに決定した。

「左手に持ったドールの袋が映る様に、この角度で・・・」

カメラの撮り方を長谷川さんからレクチャー

そんな事をやっているうちにタコ顔の宇宙人 チューコッタのメー
キャップが完了

銀色の宇宙服らしき衣装を星野さんと、特殊メイクをした僕らも着

用し 準備万端

全員で中継カメラの切り替わった後の最終段取りを打ち合わせする。

何時の間にか、約束の2時間後が迫っていた。

運転手を藤原さんにする様に、機内に連絡を入れる長谷川さん。

そして、スタジオのモニターを使い 放送中の種子島宇宙センターの様子を確認

長谷川さんが怪訝そうな表情になる。

最終段取りで

種子島にいる慎也さんの親友 ワカピー（若林さん）が宇宙船に見立てた花火を最後に上げる予定があったからだ。

事故防止の為、上空のへりを撤去する必要があった。

モニターに映る凄惨な数のへりを見て、長谷川さんは再度梨木の携帯に連絡を入れる。

慎也さんは

隣のスタジオにある大きなUFOのセットをCスタジオに持込
チューコッタのメイキャップのまま最後の作業をすすめる

不気味だ（笑）

僕と正徳は、放送中に踊りを入れるから何か考えろと言われ模索中

「UFOってことでピンクレディーのUFOでいいんじゃない？」と
正徳

「ピンクレディーって踊りわかんのかよお」

「ユーフォーって言って右手を頭から出せばいいんだろっ?」

「それじゃ鼠先輩のポツ　だろっ」

「ヤッパ駄目か?!」

「つーか、パクリって直ぐわかんのはNGでしょ」

「じゃどーすんだよ」

『紀ちゃん（藤原紀子）がもう直ぐ発射台に到着するぞお!!』
長谷川さんが大きい声で叫ぶ

「みんなっこっちよっ」 星野さんがUFOのセット前で手を上げる。

僕と正徳、そして慎也さんが素早く星野さんの前へ集合

「ヤッベー踊りどーする?」と僕

「ピンクレディーでいいんじゃないねえ」と正徳

「星野姫を応援って事で、応援団をパラパラ風にやってクレパス」と慎也さん

「えっ？ 応援団っ？」と僕と正徳

「中継が切り替わったら、マ〜マ（婦長）の所に突撃朝ごはんてちゅ〜」と会話にならない返答の慎也さん

『中継え切り替わるぞお！！』 操作ルームから長谷川さんの声

すると星野さんの気合の号令

「さあっ日本の試聴者全員にドッキリするわよ」

婦長さんの構えた中継カメラのランプが赤から青に切り替わった。

この後は、TVで放映された通りの内容

僕と正徳の歌と踊りのタドタドしさを抜かせば
ほぼ完璧な演技だったと思う。

慎也さんのリクエスト、応援団の踊りをパラパラ風にやるって事

これには完璧に答えられなかったけど

何とか高校の応援団でやっている感じで踊れたので僕は満足している。

特殊メイクのお陰で、僕らの学校の生徒も絶対気がつかない筈だ。

そして大きなハプニングも無く

最後の難関

スタジオのカメラから宇宙センター藤原さんのカメラに

中継を戻す仕事

長谷川さんが難なくこなし無事完了となった。

『無事終了おゝ お疲れ様でした！』 長谷川さんが右手を上げて
完了の合図
すると みんな 安堵の表情

「やったね」星野さんが両手でブイサイン

「さすが愛だ、あそこで涙を流せるなんてなっ 昔やったドラマを
思い出すよ」

と笑顔の長谷川さん

「しかし それ そのメイクっ 傑作ね 王族チューコッタ3人衆
フッフッ」

星野さんも笑顔だ

「マゝマのカメラワークも絶妙ベイバー」チューコッタの格好で親
指を立てる慎也さん

「ねゝセツカクなんで皆で写真撮りません？」僕が言つと皆 即答
で承諾（笑）

ゴットシン愛用のデジタル一眼レフカメラが、まともな撮影に使わ
れることとなった。

宇宙服の星野さん

王族チューコッタ3人衆

オムツ風の奇抜な衣装のガモウさん

ナース服の婦長さん

そしてスーツ姿の長谷川さん

【カシャッ！！】

異様な取り合わせの7人が写る記念写真がカメラのフレームにおさめられた。

写真を撮った後は、跡片付け（証拠隠滅）の為に長谷川さんはスタジオに残った。

星野さんは、ガモウさんに血のりを塗られ軽く特殊メイク（けが人バージョン）

メイク中に失礼ですが、随分凄い服ですね」僕がガモウさんに聞いてみる。

「オムツですか？」続いて、正徳が言っではいけない単語を口にしました（汗）

「あらっ パリコレで今年の最先端なのよっコレ！！ オートクチュールで120万だったかしら？」

軽く回答され僕らの口は空いたままだ。（120万でオムツかよお・・・）

星野さんのメイクが終了すると、そのままストレッチャーに乗せられる。

「笑ってないで、痛がつてる顔をするのよお」

ガモウさんが言うが、手鏡で自分の顔を見た星野さんはケラケラと笑ったまま。

僕は再度、看護師の衣装を身につけ（もちろん特殊メイクは落とした後）

堂々と正面玄関から外に出ることに成功した。

救急車のサイレンを派手に鳴らし、ムジテレビを後にする。

サイレンの音がお台場のビル街に反射して

沢山の人が笑っている様に僕には聞こえていた。

なんたって、日本の試聴者全員にドッキリを成功させたのだから
そんな風に聞こえても不思議ではない。

もちろん、車中の僕らも笑いっぱなし

ホントに無邪気だった。

無邪気すぎて、些細な事なんか気がつくことなんかできなかった。

星野さんが、どれだけ無理して笑顔を作っていたのかなんて・・・
・・。

アイドルの価値 17

【アイドルの価値 の巻】

《エムベック本社ビル 会長室内》

「結局、番組放送されちゃったじゃない」

「わかったしよ、こんな事ないように社員を教育し直すしよね」

259

「そんな事より・・・星野愛が火星人？ どう言うことよ・・・」

「プロジェクター画面に映る巨大なTV映像を観ながら呟くはまだみく浜田未来

「梨木の番組が星野愛の番組になっちまったにやゝ、さすがしよお星野愛っ」

『カチンッ シュボッ』

ベツトサイドで葉巻に火をつけながらエムベックス水上会長

「番組つてえ水上会長お、テレビのスタジオには見えなかったし種子島上空に円盤も消えたわよ」

「ボキもスタジオには見えなかったし、星野愛の流した涙も演技には見えなかったしょ」

「だったら星野愛はやっぱり・・・」

「宇宙センターの発射台に映っていた円盤（宇宙船）は、木स्पで使ったセットしょ」

「えっ？ でも木曜スペシャルのセットなら、ムジテレビのスタジオにあるんじゃないやあ・・・」

「TV関係者で放送設備をいじったことがある人物なら中継箇所を瞬時に切り替えるなんざあ容易に出来るしょ、たとえば・・・長谷川くんとかね・・・。」

「長谷川つて、エムベックスの元アレンジャーだった」

「そう、ヒットしそうな曲でも、長谷川くんがアレンジした曲はすべてヒットさせた伝説の男だにゃ」

「そんな伝説の男が何で星野愛のマネージャーしてるワケよお」

「ボキが2人ともクビにしたからしょ」

「クビ？」

「そして2人を森田が拾った。」

「星野愛はイイとしても、どうして長谷川をクビにしたのよお？」

「ボキとの【顔会わせ】を星野愛が断り、その手助けを長谷川修がしたしょ」

「・・・・・・・・。」

「ボキの事務所で【顔会わせ】を断った人間は星野愛だけっしょっ」

「・・・・・・・・。」

「だから、許すことは出来なかったしよね」

「・・・・・・・・・・。」

【顔会わせ】とは会長の水上とベツトをともにすることを指していた。

社長を退いた今でも、絶大の権力を握る水上と顔会わせすると言うことは

芸能界で売れる歌手やタレントになるということであり、断れば芸能界から

抹殺される事を意味していたのだ。

エムベックス本社ビル最上階から見る夜景はとても綺麗だった。

その夜景を浜田未来が空虚に眺める。

（断るって選択もあったのよね・・・・・・・・）

振り返り、葉巻を深く吸う水上会長に目をむけ

会長の若作りした顔とは裏腹に狼狽した体型を見つめ溜息をつく。

（この男を利用しようと思っていたけどお・・・・逆に利用されていたのかもね・・・・）

「んっ？ ボキの顔に何かついてるかい未来ちゃん」
会長を見つめる浜田未来に気がつき会長が聞く

「うううん 会長は若々しいなあって思っちゃってえ」

「もう一回戦なんて思っちゃってるんじゃないしょねえ？」

「フフフッ」

「これ以上、エムベックスの歌姫が夜更かししたら駄目しょ」

「あら今夜は会長がお誘いしたのよお」

「未来ちゃんの肌に影響でたら社長にボキもどやされるしょね」

「あら会長も怖い人がいたのかしら？」

「それはないしょ、ちっと急な仕事ができたしょ」

「急な仕事？」

「朝の１１時にリムジンを下につけるから、それまでココでユックリしなさい。」

明日からのアルバム発売イベント・スケジュールはマネジャーから伝えるしょ」

そういうとガウンを羽おり、隣部屋の書斎に移動し早々に電話をかける。

【トゥルルルル・・・ガチャ】

「社長の里花につないでくれっ・・・」

『・・・こんな遅くどうしましたお父様』

「会長と呼びなさい、ビジネスの話しょ」

『失礼しました・・・会長お・・・』

「明日以降、タレントを補充するしょ」

『はっ？ 先日 ヤングヤングマガジンでの募集で３名補充したばかりじゃ・・・』

「駄目しょ、あの娘らじゃ本当のアイドルになれないしょね」

『お父様も太鼓判を押してくれた3人じゃないですか?』

「会長とよびなさい」

『かつ会長も大手を振って了承したタレントですよ?』

「たしかに」

『だったら……』

「真のアイドル 星野愛を超えるタレントを作る為しょ」

『星野愛を超えるタレント……』

「ボキが彼女を手放したのは失敗だったしょ」

『でも、あの娘たちだって磨けば星野さんを超える可能性が……』

「顔・スタイル・トーク・振る舞い、この要素をすべて兼ね備えていることが売れるアイドルの条件でしょ？」

『ですから会長、あの3人だって教育すれば・・・』

「それだけじゃ駄目しょ、星野愛は別の要素　存在感　がある！！
存在感のオーラ。

いやっ

フェロモンがスーパーアイドルを作るしょね」

「そのフェロモンこそが、本物のアイドルの価値でしょう！！！」

ラブソング1

【夕焼けの巻】

翌日

夏休みだと言いつのに、朝早く母さんに起こされる。

本日も補習授業があるからだ。

昨晩は、あのまま家まで救急車で搬送（送って）してもらい帰宅置いてきた正徳のバイクは後日とりに行く話となった。

「超ねみいゝんですけどお・・・」

正徳は補習授業を欠席

僕も休みたかったが、休むわけにはいかなかった。

星野さんと約束した曲の披露が明日へと迫っていたからだ。

自宅で曲創りをしてもよかったのだが

ギターの音で近所から苦情が来たことがある為

家では思いっきりギターは弾けない。

本気でやるなら、音量など考えずに集中したかったのだ。

そんな訳で、ギターは補習授業の初日から吹奏楽部の部室に置いたままだったりする。

吹奏楽部の部室と言っても音楽室なのだが・・・

眠い目を擦りながら、なんとかヤマセン（山形先生）の授業をクリア。

寝不足のせいか
体がフワフワして昨日の出来事が夢だった様にも思っていたのだが
信じられないことが補習教室内でおきていた。

補習に来ている生徒が、昨晚の【特ダネ特捜部隊】の話題でもちきりなのだ。

どうやら昨晚の出来事は夢ではなさそうだ。

今日の補習授業はヤマセンで終わり

僕は音楽室に向かった。

吹奏楽部の部員が登校しているわけもなく、音楽室は蛻の空だ。

北東の校舎にある教室は、昼に近いこともあり少し薄暗くなっていた。

静まりかえた教室にはいり

北と東側の窓を開けて、教室に風を入れる

すると東の窓から

穏やかな風がサラサラと入ってきた。

「んゝ気持ちイイ……」

補習授業の一般校舎とは比べられない位すこし易い。

僕は西側の一角にある

楽器の収納庫をあけて、ギターをとりだし

『ボロロン』

早速、ギターを弾いてみる

楽器を鳴らす為に作られた教室（音楽室）だからなのか
更に輝きを増した音色を奏でる

（いい響き……）

ギターを乗せた股のポジションを直し、またアノ曲を弾きはじめる。

いつもより、少しスローな感じでのイントロ演奏

窓から入ってくる風が、北側の窓に変わり
先ほどの入ってきた風よりも温度が低めの風が、僕の首筋を撫でる。

真夏の教室だと言つのに信じられないくらい心地いい。

僕は穏やか気持ちでギターを弾いていた。

弦を弾くと、昨日の出来事が脳裏に浮かんでは消えていく

ドキドキしたり

ハラハラしたり

ビツクリしたり

みんなの顔が現れる。

7人で撮った記念写真

みんなの笑顔

どっかで見たことがある笑顔・・・・・・・・？

ほしのさん？

いや違う・・・・・・・・。

すずはら

そうだ、いつも鈴原が僕にむける無防備な笑顔だ。

僕の弾くギターからは

しょ？」

「いいのよっ、私は正式な部員じゃないんだし」

「だけどおウチのソフト部が決勝まで来るなんて奇跡なのよお助けてあげなさいよお」

「もともと私の正式な所属部は、水泳部じゃん だからイイのよっ」

「だってさあ準決までピッチャーやってたんでしょ？」

「私が投げなくなっただって、エースの里中さんがいるのよっ問題なしよ」

「なんか冷めたくない？、どうしちゃったのよ最近の藍は」

「どうもしてないわよ……」

そこまで言つと校舎の3Fからギターのメロディーが聴こえてくる。

「吹奏楽部って、今日 学校に来てたっけえ？」と美穂

「吹奏楽部じゃないわよお、あの演奏は拓都のギターね」

「へえー川崎君って楽器やるんだあ」

「うんっ マジ上手いよ 拓都のギターは」

「あれえー今日ここで泳いでいるのって川崎君のギター聴くためえだったりしてえ」

「美穂ったら、なに変な想像してんのよおっ!!」

「おっ？」

サラサラと上空からやわらかい風がふきだし

音楽室からのギターの音がはつきりと聴こえはじめる。

「気持ちいい曲ね」美穂が目を閉じて聴き入っている様だ。

「そっね・・・」

鈴原も目を閉じて耳を澄ましてみる。

（何時ものアレンジとは違うわね・・・気持ちイイ・・・）

聴いたことの無い後半のフレーズが弾き終わるとギターの音がパタリと止まった。

「ん？」

いくら待っても演奏は再開されない

「ちょっと見てくるわ」タオルを手に取り鈴原が音楽室に向かう。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

「グウゴォー」

音楽室では寝不足がたり
拓都は腰掛けていた机の上で熟睡していた。

音楽室を覗き込み、爆睡しているのを確認して入ってきたのは
ライブハウスで鈴原を襲った2人組みの情報源「小林しげる」

丸刈り頭の中央部がより深く刈られている。

いわゆる 逆虎刈りだ。

「お前たちのおかげで酷い目にあっただんだ・・・」

憎悪に満ち溢れた顔で拓都に近づく 小林しげる

そして周辺を物色する、拓都を殴る物を探す為だ。

（おっ随分つとイイものをもってるじゃねえかつ・・・）

しげる は拓都の横に置いてあるギブソンのギターを静かに手に取る。

（殴るのは変更だ！！ 悪いが、これは戴いていくぜっ）

しげるは音楽室を出ようと歩き出すと、入り口からはスクール水着姿の鈴原が現れる。

『なにやってるのぉ！！』

「ヤバッ」茂はギターを抱えたまま鈴原に体当たりして廊下に飛び出す！！

【ズダン】

「キャッ！！」体当たりされた反動で、鈴原が壁に激突

「んっ？・・・どうした・・・」

寝ぼけ眼を擦りながら拓都が目を覚ます。

「たっ拓都お　ぎっギターがギターがつ！！」

廊下の右を指差しながら鈴原が絶叫ぎみに叫ぶ

「ギター？」

机の横を確認して我に返る拓都

ギターがなくなっている事に気づくと、机から跳ね起き

鈴原の指差す方向に走り出す。

「スクール水着 エロイね 鈴原あ」鈴原の脇をすり抜けるときに一言声をかける。

「くっ エロ拓都おおおおー！！」拓都の後を高速で追いかけてくる鈴原

「ダアアアアアアアアアアア」

小林しげるが後ろを振り向くと
拓都と鈴原が超高速で近づいてくる。

2人とも物凄い血相だっ

「ゲッ なんなんだっ」

「まてうゴラァー（怒）！！」

廊下の突き当たりにある階段近くでスピードが落ちた小林しげるに

スライディングする拓都

『ザシュー　ズダン!!』

足が引っかかって　小林しげるが派手に転ぶ

間髪いれずに

速度の乗ったまま　しげるに蹴りを入れる鈴原

『ズドッゴ!!』鈍い音

「うおっ　ゲフッ」白目を剥いて気負うしなう小林しげる

【バビヨンッ　ピン　ガンガン　ゴッゴッ　バビヨン】

「なんだっ　今の音？」

「あれっ拓都のギターは？」

「無い」

「ん？　ん？　ん？」

『誰だあ上からギター落とすヤツはあー死ぬところだろ！』
階段下から怒鳴り声

（げっあの声はサッカー部の顧問 鬼瓦っ）

鈴原と僕は鬼瓦と知りつつも、仕方なく下の階に下りていく。

『なんだ川崎か、推薦取り消しの腹いせか？』

「そっそんな事するわけないです。」

いろいろな意味を含めて、話が長くなりそうだったが
鈴原がテキストに話をまとめて短時間で開放される。

「さすがだな 鈴原」

「そんな事ないわよっ先生の特性をしっていれば誰でも出来るわよ」

「そんなもんかよ」

「それよりもギター・・・壊れちゃってる・・・」

「ああっ派手にいつちゃってるね……」

「わたし・・・勢いよく蹴りこんじゃったから弾かれたのかも・・・」

「僕がスライディングしたからだよ」

「でも……」

「仕方ないよ、それよりも鈴原のお陰で曲完成したんだ!!」

「私のお陰? どう言ってるの?」

「どう言ってる事と言われると、どう言ってることなのだろうか……?」

「言っておいて聞かれると解かないなんて変なお」

「んゝそつだよなあ・・・何言ってるんだろ……」

「変なのって言えばっ 昨日の【特ダネ特捜部隊】も変だったわよ

ね
」

「ギク!!」

「何驚いた顔してんのよぉ
」

「いやっ別に……………」

「拓都は番組を観たんじゃなくて、出演していたからかしら」

「
！」
」

「図星だったりしてね 王族チューコッタくん（笑）」

「なっ なな なっ」

「学校帰りながらジックリお話 聞きましょうか 拓都殿」

「ナハハハッ何言ってるのかなっ 鈴原藍くん」

「拓都が嘘つくと鼻の穴開くのよね」

「なぬっ！」急いで鼻を両手で隠す拓都

「わっかりやす〜いつ　鼻が開くなんて嘘よっ（笑）」

「ひっかけたな鈴原っ（汗）」

「嘘は良くないぞお拓都くん」

「うつく・・・（汗）」

下校しながら昨晚の事を鈴原に話すハメになってしまった。

星野さんと病院で友達になった話や昨晚TVで放映されていない裏話など

素直に話す。

僕の話聞きながら、時折みせる鈴原の笑顔に
いままで味わったことの無い気持ちになっている自分に驚いていた。

（なに鈴原にドキドキしてんだよ……。）

西に傾いた太陽のせいなのか、今日の鈴原の顔は妙に眩しい。

空を見上げると

綺麗な夕焼けに染まり始めている。

何時の間にか

僕の心も夕焼け色に染まり始めていた。

ラブソング2

【再会の巻】

神奈川県の高尾区にある高尾の自宅

その2階建ての民家前に黒塗りのベンツが駐車中

「雰囲気が変わっていたんで全然気がつきませんでしたわ」

「ハハハッ、お恥ずかしいかぎりです。」

「ねえ森田さん 拓都の怪我も完治したことですし、そう何度も足を運んで頂かなくても大丈夫ですから」

「いえっお母さん、拓都君の大学推薦が取り消しになったと聞きました、本当なんですか？」

「えええ、受験に備えて今日も補習授業に行ってます。」

「そうですか・・・本当にスマナイ事をしてしまいました。」

「そんなあ頭を上げて下さい、拓都もよく確認しないで道路を横断したみたいですし、しかたありませんよ」

「いや、そんな事は・・・もし宜しければ私の会社に来てもらうことも考えておりますので、何時でもおっしゃってください。」

「何から何までご丁寧に」

【ガラガラッ】

「ただいまあゝ」

「あら拓都おお帰りなさい」

「こんばんは拓都くん」

「アノ車 やっぱり あんたか・・・」

「こら拓都お、ちゃんと挨拶しなさい!!」

「良いんですよお母さん」

「ふんっ」

茶の間を横切って2階に上がろうとする拓都

「おっギター使ってくれているんだね」

「あっ これは……」

壊れたギターを隠そうとするが見られてしまう。

「随分派手にやったなあ」

「わざと壊したワケじゃないからなっ!!」

「どれどれ」そう言って拓都からギターを取り上げるベンスのおやじ

「あっ」

「んううゝ何とかかなりそうかな・・・・・・・・・・」

「・・・壊して・・・悪かった・・・・・・・・・・」

「すぐ直して届けるよ」

「直せるの?」

「3日くれないかい」

「3日ですか・・・明日まで何とかありませんか?」

「明日は厳しいなあゝ使う予定でもあるのかな?」

「いえ別に・・・そうですか、明日は無理ですよね・・・・・・・・」

「うむ・・・わかった 明日の午後までに何とかするよ、演奏場所は何処?」

「いえっやっぱリイイです・・・壊したままで申し訳ないけど それ

神谷医院

【ダツタタツ】自動ドアが開くと肌の露出が激しい服装の女性が飛び込んでくる。

「長谷川っ 愛の病室は何処？」

「おおっ紀ちゃん、もう種子島から戻ってきたのかい？」

「当たり前じゃない！！ あんたに任せてたら、また独占番組やらされるかもしれないじゃないのお」

「これは手厳しいなあ」頭を掻きながら答える長谷川修

「早く案内しなさいよお」

「わかったよお 安静中なんだから病室で騒ぐなよ」

【カシャカシャ！！】

柱の影から藤原紀子の胸元を望遠レンズで激写する男

「ウキツキツ 生で見る藤原紀子 イイですなあ」

「慎也さんっ覗き見は駄目ですよお」

「おりっ裕子リン、本日はお早いご出勤じゃないい？」

「裕子リンてのは止めてもらえますう慎也さん（笑）」

そう言われたゴットシンこと神谷慎也は、今来た藤原紀子と看護師の藤川裕子を見比べる。

（藤原紀子に藤川裕子・・・2人の共通点は苗字の【藤】と名前の【子】、藤と子でフジコ
そして如月英治・・・実に興味深いですなあ）

「そんなところで何コソコソやってるんですか？」

「オワツチヨ！！」ずり落ちた眼鏡を直しながら振り向くゴットシン

やって来たのは拓都と正徳

「何だ 同志たちではないかあ」

そう言っただけ握手するゴットシン

呆れたというリアクションをとりたかったが、今日はゴットシンの隣に藤川裕子さんがいる。

僕は藤川裕子さんとアノ晩以来の再会

「やっと会えたわね拓都くん」

「久しぶりです裕子さん」

「少し見ないうちに、何だか大人っぽくなったんじゃない？」

「そっそですか？ 裕子さんの方こそ痩せましたか？」

「それでも体重増やしたほうなのよ、拓都君の話を聞くまで食べられなくなっちゃってえ」

「僕の話聞くまで・・・？」

「そうよお星野さんが教えに来てくれたの、拓都君がアイツをぶん殴ってくれたってね」

「ああその話、星野さんに聞きました。」

「お陰で元気が出たし、アイツの事も何だか吹っ切れちゃったわ。」

「……どうしてあの晩、僕の病室に来たんですか？」

「うふっ、拓都君の病室に行ったのは、お別れする為だったんだけど」

「お別れ……あの時にはもう、決心して（自殺を）いたんですね。」

「そうね決心していたと思うわ、でもね 拓都君にキスをしたときに、ホントに気持ち揺らいだのよお」

「あんなヤツの為に、信じられません」

「好きになると周りが見えなくなっちゃうものなのよ、本当にバカだったわ」

「もうあんなことしないでください。」

「もう大丈夫よ、あなたに教えてもらったから」

「僕は教える様な事なんか、何もしてないですよ」

「うううんっ、十分過ぎるくらいしてもらったわ」

「十分過ぎるくらいって・・・・・・・・・・。」

「謙遜なんかしないでいいわよっ、昨晚のTVでも星野さんだって助けちゃったんだし」

「そんな事ないです、あれは慎也さんが・・・」

「婦長さんも慎也さんも拓都くんが巻き込んだのよっ、あなたが居なかったら成功しなかったわ」

「考え過ぎですよ裕子さん」

「拓都くんには、人を助ける不思議なパワーがあるのかもね」

「……………」眉間にシワを寄せて困った顔の拓都

「ぶはっ（笑） 何神妙な顔してんのよお拓都くん。」

「僕にそんなパワーなんてある訳ないと思うんですけどお」

「たえよっ（笑） さっ、そんな顔しないで さっ 星野さん
ところに行きましょう!!」

ラブソング3

【コンテスト10分前 の巻】

【トントン】

扉をノックして拓都と藤川が病室に入る。

「ヒーローの登場ですよ星野さん」

「何言ってるんですかつ裕子さん!!」

「あらっ川崎くん」ベットから少し顔を上げて星野さん

「この子が噂の坊やね」パイプ椅子に腰掛けた藤原紀子さんが品定めするかにように僕を見つめる。

その横で長谷川さんが右手で口を抑えている。
どうやら笑いを堪えている模様

「意外と可愛い顔してるじゃないっ」藤原紀子がそう言って、僕の顔を右手で撫で回す。

「私の拓都くんを誑かさなくてももらえますう？」看護師の藤川裕子が拓都の手を引き戻す。

「あらっ川崎くんは私の恋人よ」と星野さん

「えっええええー」この状態に僕は言葉にならない。

「クツクツクツク（笑）」長谷川さんは涙を流して笑っている。

「ハイハイッ病人をそんなに興奮させないでえ（笑）」
病室に入ってきたのは婦長さん、どうやら星野さんの点滴の時間らしい。

僕は、星野さんと明日の演奏の場所を確認

「明日は何処で演奏するんですか？」

「この近くのスタジオを借りようと思ったんだけど、空いてないみたいなおよお」

結局、長谷川さんの顔が利く

ムジテレビ内のスタジオを手配してくれたとのこと。

「むっムジテレビ・・・ですか・・・」

「ハイツ、これがムジテレビのゲスト・パス」

「パス？」

「これがあれば、昨晚の様なマネをしなくても正面玄関からどうと
うと入れるわよ」

そんな話を先に聞いてしまい、ギターを壊して手元に無いことを話
せない。

「別にスタジオで演奏しなくてもイイんじゃないですか？」と星野
さんに聞く

「私の誕生日なんだから、特別にスタジオ確保よ」とのこと。
それを言われると、もう何もいえなくなってしまった。

（もう演奏出来ないなんて言えないぞお・・・どうしようギター・・・
んっ待てよ！！ 前に正徳がギターの話してたよなっ）

「正徳っギター持ってなかったっけえ？ あっあれええ？」

今になって、ようやく正徳がいなかったことに気づく

「連れの子なら、慎也さんの仕事部屋にいったわよ」と裕子さん

「マジすかー!」

正徳を呼びに（帰る為）慎也さんの仕事部屋へ行くと

中は物凄い数の機械や物で溢れている。

ゴチャゴチャしているが、慎也さんの考えた規則によって配置されているらしい。

「このヘンテコな機械は何に使って……」僕が聞くが

「コラア触るでナイナイ!! 全て企業秘密でアルアル大辞典」と即効で怒られる。

終始、正徳と慎也さんはコソコソと小さな声で話し、相槌をうつている。

（なんだか異様な雰囲気なんですが……）

こんな状況なもんで

正徳を慎也さんから奪回して帰るのに一苦労したのは言うまでもな

[illegible]

「同じく司会のマイケル寺岡デス!!」

300

ちろん

一般のお客さんもぎつちり

『いよいよ最終選考に審査員のみなさんも気合十分で会場に駆けつけておりマスヨォー!!』

【ワアアアアアア】

『さあ会場のみなさんも一緒にお願いします。キラリン美少女をさがせつえええ!!』

会場も含めたタイトルの号令とともに、審査員が入場し席に着く。

『さあナカジー、今回最終選考に残った美少女候補生ですが、いかがですか?』

『先ほど生でチラツと見てきましたが、ものすごく綺麗ですよぉーマイケルさん!! 審査が終わったら連れて帰っちゃ駄目ですからね』

『それでは、早速キラリン美少女候補生の紹介と行きたいところですが、その前に審査員のみなさんの紹介から』

「スタジオM7の道順ですが、右手にあるサテライトスタジオの後ろ側に連絡通路がございます。」

「はい」

「その連絡通路を真っ直ぐ行くと突き当たりにエスカレーターがありますので、そのまま2Fが上がってください。」

「2Fですね」

「2Fには幾つもスタジオがありますので、扉にM7と明記されている場所が目的のスタジオとなります。」

「わかりました、ありがとうございます。」

「お客様!!」

「！」

「その背中の荷物を確認させてもらいますか。」

「えっ　これですか？　ギターですよ」

「大変申し訳ございませんが、危険物の確認をさせてもらっております。」

「ああー、どうぞお気が済むまでチェックしてください。」

昨日は病院からの帰りに正徳の家に向かい、ギターを探すことに
結局　ギターは正徳の家にはなく、あったのはウクレレ（笑）

最悪の場合はそのウクレレで演奏しようと思って借りてきたのだけれど

家に帰ると

親父のギターが修理から戻ってきていた。

随分と古いギターなんで時間がかかったようだが、タイミングよく
昨日、修理からあがってきたのだ。

「ハイありがとうございますー!!」

無事（当たり前だが・・・）危険物のチェックも終了

受付のお姉さんの作られた笑顔に見送られM7スタジオに向かう

（凄い盛り上がってんなあゝ）

サテライトスタジオ裏の連絡通路を通ると
通路壁から外の熱気が中に伝わってくる。

（お笑いでも収録してんのかあ？）

突き当たりのエスカレーター手前まで来ると
キレイドコロの女の子が数名

どうやらサテライトスタジオ出演者の控えフロアらしい。

横目でチラリと見ると

顔もスタイルも当然といった感じでモデルクラス

「んっ！」

「んっっ！ー！」

「んつつっ！！！」

「何でいるんだよお！！！！」

そこにいたのはゴットシン

「おおっ 拓都殿」

「おおって 何故に慎也さんがここに？」

「正徳殿と待ち合わせしてるのだが、現れんのだよ」

「えっ 正徳？」

「正徳殿と一緒に応援しにきたノクニカラ」

「オウエン？ 何の応援？」

「未来のアイドル鈴原殿ですよお」

「鈴原？って、今日はキラリンなんかのコンテストとかじゃなかったの？」

「はい正解なりケリ」

「えっ？」

「ここがキラリン美少女を探せの控えフロアでございマッサル」

「コンテストってムジテレビでやるのお？　じゃ鈴原は何処？」

「それが肝心の鈴原殿もお見えになってないんでゴザル」

【ドスコイ！！　メールでござす♪】　↑着メロ音

するとゴットシンの携帯にメール

イソイソとメールを確認するゴットシン

「ギョエエーーーーー」

「どうしました慎也さん」

「鈴原殿をバイクで輸送中なんで、コンテストに遅れるってえ
ーサス」

あまりのショックにうな垂れるゴットシンこと神谷慎也

「慎也さん、少し遅れるくらいなら大丈夫じゃないのお？」

「ノンノン、時間にルーズなのはNG　そしてゲームオーバーざん
す。」

僕は間髪入れずに正徳の携帯に電話

『はいこちらバイク便　正徳（♪）』

「何時からバイク便になったんだよ（怒）」

『ぐははは、本日からだよ（笑）』

「何でお前が鈴原を宅配してるわけ？」

『およう、ゴットしか知らない情報を知っているなっ?!』

「そのゴットシンの横に僕がいるんだよ!」

『そうだったんだっ、なら話は早い　鈴原が着くまで何とか持ちこたえてくれえ』

「持ちこたえるったって、何で鈴原が時間まで来てないんだよお」

『ソフトボールの決勝で投げたんだよお』

「ええっ出ないって言ってなかったかあ」

『エースの里中が怪我して投げられなくなったんだとお』

「なんだってえ」

『もちろん完封勝ちだけどね!』

「 ！ 」

『ごめん信号青になるから切るなっ 後は宜しくう！！』

【ピッ】

「後は宜しくって言われても……………」

《キラリン美少女を探せ最終審査出場のみなさん、入場10分前で
す》

控え室にアナウンス

「じゅ10分前って、ヤッバーじゃん」

「拓都殿、こちらに来てチヨ」ゴットシンが控え室脇のトイレに手
招き

「慎也さん、もうムリですよお」

「イイ考えがあるある大辞典っ」

【ボタン】

トイレに2人が入室して扉が閉められると中から拓都の叫び声

「ちよっちよっとおゝ慎也さんやめて下さあああよおおおお
」

ラブソング4

【ファースト アピールタイムの巻】

「と言うことで、審査員4名と会場前列にいらっしやいますプロダクションスカウトの皆さんの紹介でした。」

司会のマイケル寺岡のコメントの後

審査員席の

如月英治、坂本あけみ、有名作曲家の小村鉄馬、グラビア雑誌編集長のジャーニイ坂野が一礼

「マイケルさん今回も多数の取材陣が押し寄せて、このコンテストの注目度がうかがえますね」

「そうですね、正に会場は熱気でムンムン状態です!!」

「そのムンムンは会場だけじゃありませんよおマイケルさん!! 色気と美貌でムンムン状態のキラリン美少女候補生がこれから登場しちやいますからねえ」

「とうとう登場しちやうんですねええ」

「それでは行きましょうお! キラリン美少女候補生による、ファースト アピールタイムです!!」

派手な音楽とともに会場にカクテル光線が当てられ、右袖から女性達が入場

すると、会場は拍手と歓声につつまれた。

入場してきたキラリン美少女候補生は6名

それぞれファートアピールということで、柔道着やレオタードなど特徴ある衣装を身に着けての入場だ。

最後の6名目が入場すると会場の歓声がどよめき変わる

最後の一人が顔に覆面をつけて入場して来たからだ。

審査員の4名も驚きをおくせない模様

「おいおいっ、顔見なくて審査できんのかよお・・・」審査員席の如月英治が不満を漏らし、呆れ顔で席で天を仰ぐ。

観客席両サイドに陣取ったマスコミだけが、意気揚々とカメラのシャッターをきっていく。

「こっ今回は、イロイロな趣向の方がいらっしやって楽しみですね」司会の中島富美が笑顔を作り場を盛り上げる。

「はいっ、それではエントリーNo.1番 品川翔子さんの3分間

アピールタイム　お願いします!!」

『エントリーNo.1番　品川翔子お　瓦十枚割りします　オスツ
!!』

柔道着を着たエントリーNo.1番の女性からファーストアピール
を開始していくが

No.6の女性に気をとられているのか会場はザワついたままだ。

覆面の女性は、タイガーのマスクなのかビミョーなトラか猫の様な
模様

上半身は戦隊者の衣装の様な、プロテクターをデフォルメしたもの
を装着し

下半身はミニスカートに黒のだぶだぶのジャージとブーツ

不恰好の上に体のラインも顔も見えず、異様な雰囲気をかもし出し
ている。

そんな状態のままエントリーNo.5までアピールタイムの順番が
まわる。

『エントリーNo.5番　清原麗華　アメリカでボイストレーニン
グを積んできた経験を生かし、ゴスベルを歌います!!』

聖歌隊の衣装を着た清原麗華が歌いだすと会場のザワつきが消え、
みんなが歌声に注目

丁寧に手入れされた栗色のショートヘアに大きな目
浅く焼けた肌は健康美をアピール。

厚めの唇からは、重厚でキレイな歌声が響きでる。

そんな最中

前列のスカウト席にエムベックスの会長、水上健一が遅れて着席

先に来ていた社長（水上里香）に耳打ちしている、清原麗華を獲得
候補に入れたのだろうか？

「はいっ、清原麗華さんのファーストアピールでした。」

「それでは、エントリーN o , 6 番 鈴原藍さんの3分間アピール
タイム お願いします!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「鈴原藍さあん、お願いします!!」

（ ヤバ！ この格好で立ってるだけでいって慎也さん言った
のに・・・・ ）

異様な格好で立っている人物の中身は、もちろん拓都
その拓都は、ファーストアピールすることなど聞いているワケが無
かった。

「鈴原藍さん聞こえてますかああ?!」

（聞こえてますけど、喋ったら男ってバレるし本気でピーーーンチッ!）

「鈴原さあ……………」司会のマイケルがそこまで言うと鈴原に化けている拓都が突然倒れこんだ。

【ドタン!】

「!」司会の2人、審査員の4名、会場みんなが驚いて立ち上がる。

「ううう…………ウララウララ、ララウウラー」拓都からは呻き声にも似た声か

「もしかして、川崎君なのか…………」と前列の左端に、社長からスカウトを任命されてきている長谷川修

審査員席の坂本あけみも気がついたのか困惑しながら前列のスカウト席にいる長谷川を見つめる。

そして呻き声をあげていたエントリーNo.6は立ち上がり、先日話題になった宇宙人

【チューコッタ】の踊りを踊りだした。

『おおおおおー！！』会場の観客はタイムリーなネタに歓声がおこる。

「凄い！！ 完璧な振り付けだぞお」マスコミブースに来ていたスツポンの梨木の口から言葉がもれる。

「完璧と言うより、そのものですよねえ」彼女の踊り」隣にいる見習いの大柳が言葉をかえず。

「ううん・・・臭うな・・・」そう言いながら、梨木が考え込む様に右手を口にあてる。

「そんな臭いますか、さつき食べた餃子あ」自分で口臭を確認しながら大柳

「バカッ、その臭いじゃないよお！ クダラナイこと言ってないでスタジオの裏に回るぞお」

2人はコソコソとスタジオの裏手に向かった。

6名の美少女候補生のファーストアピールが終了すると、美少女候補生たちは

一旦裏の控え室に引っ込んだ。

『ナカナカ個性派揃いのアピールタイムでしたが、いかがでしたでしょうか？』

『それも全員ボディーもフェイスも一級品！！』

『おつとお約1名は謎めいた候補生がいましたね（＾０＾）』

司会のナカジーとマイケルのコメントの後、審査員からの第一印象が告げられる。

最初に口を開いたのは、グラビア雑誌編集長のジャーニー坂野
「イヤハヤ、ただスタイルがイイ時代は終わったんだねえコレ」

『と言いますと具体的にどう言うことですか？ 坂野さん』マイケルが聞く

「んーズバリ！！エントリーN o . 1の品川翔子さんなんですよおコレ。

彼女の均整のとれたボディに時おり見れる筋肉の盛り上がり、そして柔道着の間からチラチラと垣間見るムネのふ・く・ら・み。ズバリ パーフェクトオ」

『おつとお一発目からジャーニー坂野さんの最高評価 パーフェクトがでてしまいましたあああ！！』

「坂野さんは相変わらずですなあ」横から口を挟んだのは有名作曲家の小村鉄馬

「相変わらずとは失敬なっ」ムツとした顔で横の小村鉄馬を睨むジヤーニイ坂野

「みてくれも大切でしょうが、やはり個性でしょう」呆れ顔で小村鉄馬がコメント

『と言いますとN o , 6の覆面の娘なんかはカナリ個性的でしたが・
・・?』
マイケルが聞き返す。

「いやいや、N o , 5の清原麗華ですよ。聴いたでしょアノ 歌唱
力」

『ええっ確かに引き込まれる何かがありますね彼女の声には』

「そっ清原くんの歌声は、ボクの創造力をかきたてるのだよ」正に
プレミアムボイス!!」

『これまたファーストアピールから小村さんも高評価ですう!!』

「あのねえ」2人の高評価は俺でもわかるんだよっ、N o , 6の
娘はなんなんだい? あんな格好でのアピール許されんのかよ?

スタイルも歌声も評価できやしない!!」

如月英治が司会の2人にコメント

すると、司会の中島富美が冷静に答える。

『ファースト・アピールは何をしても良い審査ルールなんです。』

「じゃ俺の判断で審査していいんだなっ」

『もちろんです、その為に色々な業界の方が審査員に来ていただいているんですから・・・』

渋々納得したと言う風に腕組みして黙り込む如月英治

前回の事件の件もあり、これ以上 事を荒立てても利益が無いと踏んだようだ。

『女性の視点から見て、6名の最初のイメージは如何だったでしょうか？ 坂本あけみさん』

少し考え込む仕草を見せながらも、的確にそして冷静に答える坂本あけみ

「そうですね、今回の候補生はそれぞれ個性があって今までの審査基準じゃ計れないレベルだと思います。」

『と言いますと、現段階では審査の格差は無いとおっしゃるワケですか?』

「……個人的には格差は無いワケでもないのですが、まだ審査発言が出来るレベルではないとお……………」

『なるほどっ 個性的な候補生だからこそ、トータル的な審査考慮が必要と言っことなんですネ』マイケルに代わってナカジーこと中島富美が答える。

「さすが中島さん、察しがはやいですね……………」坂本が答えると間髪入れずにマイケル寺岡

『あいたたああゝ察しの悪いのはワタクシだけでしたネ（笑）』

それを遮るかの様に喋りだす中島富美

『それでは10分かの休憩を挟んでセカンドアピールタイムです！』

- - - - -
- - - - -
- - - - -

控え室から少し離れたトイレに拓都とゴットシン

「ちよっとお慎也さん、立ってるだけじゃダメだったじゃないですか？」

「ゴメンでござる拓都殿」

「ゴメンじゃないですよ、バレたら代わりに出た意味ないじゃない」

「ムフフフ」不気味な笑みを浮かべるゴットシン

「たまたまチューコッタ踊りを思い出したからいいもの……」
「
口を尖らせる拓都

「拓都殿は追い込まれると切り抜けるパワーを持っているのですヨ
ンサマ」

「もー裕子さんみたいに変な事言わないでくださいよ」

「最初は誰でも自分のパワーを信じたくないもんザンス」

「ところで、正徳と鈴原はまだ着てないよね」トイレから顔を出して辺りをつかがう拓都

「その様ですなあ……このままですとセカンドアピールも拓都殿が必要ヨン」

「必要ヨンってえ慎也さん（怒）」

拓都はそう言うと、間髪入れずに正徳に電話

【プルルッ・・ピッ】

『はいっ 毎度おなじみバイク便の正徳』

「何でそんなに元気なんだよお前は」

『どうした？ テンション低いなあ拓都お』

「当たり前だろっ 鈴原の代わりに審査に出されてみろっ」

『それは滅多にできない経験だなっ、それで高ポイント取れたか？』

「高ポイントってっオイツ！！ バレなかったのか？とか大変だったなっ？とか言えないワケ」

『でも結局は上手く行ったんだろ』

「何だよっ お前まで当然みたいに言っちゃって」

【間もなくセカンドアピールタイムです、美少女候補生は水着に着替えて出場準備を整えてください。】控えフロアのスピーカーからアナウンスがながれる。

「おい正徳っ！！　まだ着かないのかよお、次の審査が始まっちゃうぞお」

『後１０分ぐらいだっガンバレ拓都お』

【ピッ】

正徳が言い終ると携帯の通話が切れる。

「１０分ってビミョウな到着時間・・・・・・・・」

「拓都殿っセカンドアピールの入場時間ですかっちょ」

「ですかっちょってえ水着審査なんでしょ？！　無理ですよっ」

「このままの服装でイイんです」ゴットシンの口元にまた笑みがこぼれる。

トイレから拓都は引っ張り出され会場へ

会場に次々と入っていく候補生は全員水着

（何だよっ何だよっ、やっぱりみんな水着じゃん）

審査会場に入るのを止めようと歩みを止めると、後ろからゴットが背中を突つつく

「ちょっと慎也さん・・・こんなんで出たら今度こそアウトですよ
・」

するとゴットシンは右手の親指を立ててグットラックツのポーズ

会場に無理やり押し込まれた拓都
全員会場に入り、水着審査のセカンドアピールが開始される。

ラブソング5

【セカンド アピールタイムの巻】

「おい聞こえたか大柳っ」

「ええっ聞こえましたよ」

「距離があるから、話してる内容まで聞き取れなかったが・・・」

「私も内容までは聞こえてませんが、男の声でしたよ」

「マスクの候補生は間違いなく男性だよな」

「ええ・・・間違いありません」

「チューコッタ踊りの件といい、A級品のネタ素材発見だな」

「種子島での一件も、これでカラクリが解るんじゃないですか？」

「よし、ナンバー6の候補生から目を離すなよ大柳っ」

いやらしい笑みを浮かべてマスコミブースに戻る2人

一方、審査会場ではダンサブルな楽曲と共に水着の候補生が磨かれたボディーを披露していくセカンドアピールが開始され様とした。

『さあお待ちかね！！ 水着審査セカンドアピールタイムです。』
司会のマイケルが力の入った声で叫ぶ

『エントリーナンバー1番から元気よくお願いします！ それではどうぞお』
『今度はナカジーが候補生に向けてアナウンス

そのテンションの高さと裏腹に審査員は水着姿になってない鈴原藍（拓都）を見て固まっている。

（どえーこの状態、大丈夫なワケないでしょう・・・ゴットオ・・・）

ただ一人、水着姿じゃない鈴原藍（拓都）に審査員の視線が痛い。

モデルなみのボディがリズムカルにそしてしなやかにエントリーナンバー順に披露され
とうとう鈴原（拓都）の順番に回ってしまう。

（この状態で、どう切り抜けろってんだよっゴットシン！？）

会場の観客もマスコミブース陣、さして審査員、スカウトたちも鈴原に化けている拓都に視線が集まり、ダンサブルな楽曲だけが宙を舞う。

（くっくっそぉーもうヤケクソだぁ）

そう思い拓都が踊り始めようとすると会場から誰かが叫ぶ。

『もう茶番はヤメタラどうかね！！』叫んだのはスッポンの梨木

（げっすっスッポンの梨木っ！！）

突然の発言に会場がザワつきだす。

『スイマセンが審査中に発言は控えてください。』
司会アシスタントのナカジーが梨木に向けて言うが、梨木はお構いなしで続けて話す。

『だいたい水着審査で覆面に戦隊ものの衣装のままなんて可笑しいと思わないのか？』

梨木がイイ終わると続けて審査席の如月英治が喋る。

「だからさっきから俺も言ってるじゃん、あんなんで審査なんか出来ないってさあ」

言い終ると会場の観客からも、同意賛同の声が飛び出す。

それを受けて

司会のマイケルとアシスタントのナカジーが少し耳打ち

『このままでは審査の続行が困難になりかねるので、ナンバー6の鈴原藍さんには、ここで覆面を取っていただきましょう。』とマイケル

『どうしても覆面を取れないと言う場合は、ここで棄権とみなします。』ナカジーが続けて話す。

審査席から坂本あけみが心配そうに鈴原藍（拓都）を見つめる。

（くっ・・・だから無理だつていったんだよ・・・）

拓都はどうしてイイのか判らなくなり、その場で立ち竦んだままだ。

すると

たたみ込む様に、またスツポンの梨木が口を開く。

『覆面を取るワケにはいけないよなあー、中身が男なんだから！！』

（何で梨木にバレてい ん ん だ あ あ ！ ！ ） 拓都の頭の中が真っ白になる。

梨木の発言を聞いて会場のザワツキは最高潮に膨らみだし、【取れっ取れっ】のコールが出る始末。

司会の2人も如何してイイのか顔を見合わせたまま……………。

最悪の状態になってしまったぞお、取りあえず棄権させて事態を収拾しなくては)

スカウト席の左端に居た長谷川修が司会の2人に声をかけよう手を上げるが

その前にエムベックスの社長、水上が声を張り上げた。

『面白いつ!! 覆面をしてるとはいえ、どうどうと女性のコンテストにやってくるとは大した度胸、ボキに素顔を見せてほしいしょ』

『ちょっと待つてください、覆面を取る取らないより審査を進行させるのが先決ではないでしょうか』あわてて長谷川が話す。

『この状態で覆面を取らないで、話が済むハズはないしょ長谷川くん。先日、超特ダネを放送した芸能リポーターの梨木くんがマズ納得でんきんしょね』

会場の観客席からも賛同のヤジが飛び始めてしまい、審査席の坂本あけみは頭をかかえている。

そのとき、ダンサブルな楽曲が消え

マジックショーに使う様な奇妙な楽曲に音楽が変わると

会場右袖からピエロ風に顔をペイントした男性が大きなマントを持って現れた。

（しっ慎也さん、このタイミングでどうして？）ピエロ風の男はゴットシンこと神谷慎也

ピエロのゴットシンは大きなマントを裏返して見せ、種も仕掛けも無いだろう？という表情

仕組まれた様に手際のよい演出に、会場にいる人がみんながその行く先を見つめる。

大きなマントを大きく広げ鈴原に化けている拓都を大きく包み込むと

絶妙のタイミングで舞台の後ろから誰かが滑り込んできた。

「おまたせ拓都」

「すっ 鈴原あー!!」

「遅くなってゴメンネ」

「って、何でこのタイミングなんだよあ」

「色んな話は後っ、それ覆面も衣装も脱いでちょうだい」

「・・・たく」

モソモソと蠢くマントにピエロのゴットシンが呪文を唱え
大きなアクシヨンでマントを取り上げると、ボンッと小さな発光
と共に女性が現れた。

現れたのは、本物の鈴原藍

「みなさん、勿体ぶってスイマセン。 水着忘れちゃってえ えへ

っ
」

【おおおおっ！！】

覆面と衣装を脱いで現れたのが男性じゃなく女性だったこともあるがソフトボールのユニフォームをカットして、水着風になっている格好が結構際どく

色っぽさを醸し出していたから、会場が盛り上がるのはムリもない。

司会の2人が啞然としているのをよそに、鈴原が大きくコールする。

「ミュージックッ スタートお！！」

ダンサブルな楽曲が開始され、ノリノリで鈴原が踊りだす。

「くくっ面白いしょ、里香っあの子を絶対ウチに獲得するしょね」

エムベックス会長の水上は、娘である社長にそう言って会場を後にした。

マスコミブースでは梨木と大柳が混乱状態

「どっとう言うことだ」梨木が考え込む

「確かに男の声だったハズですよ」助手の大柳も困惑状態で舞台上で踊る鈴原を見つめる。

「ワシの顔に泥を塗りやがって……」梨木は齒軋りしながら舞台を睨んだ。

ラブソング6

【森田社長の巻】

「ギリギリセーフだったなっ」サテライトスタジオ裏の通路で正徳

「なんだよっその清々しい顔はあ、こっちの身にもなってみるよお」
服を着ながら拓都

「一時はどうなるかと、ハラハラ辰則」満足そうな面持ちでピエロ
メイクを落としながらゴットシン

「結局さあ、拓都も鈴原が気になってんじゃん」オチヨクル口調で
正徳

「なっ、そんなつもりでココに来るかってんのお」

「じゃ拓都殿は、どうしてココに来たのでゴザルか？」ゴットシン
も少し驚いた表情で聞く

「あっ、あああーーーーー」拓都は何か思い出したという
表情であたりを見渡す。

そしてギターケースを見つけると、ひったくるように手に取り小走りでエスカレーターで2Fに向かう。

それを見て正徳とゴットシンは顔を見合わせ【？】の様だ。

【M7スタジオ】

『ボタン
』

「遅くなつてスイマセンん星野さん!!」

密閉されたスタジオの扉を勢良く開けてM7スタジオの中に入ると星野さんがディレクターチアにすわり笑顔で出迎えてくれた。

「おつかれさま 面白かったわ」

「面白かった?・・・って何で知ってるんですかぁ・・・」

「各スタジオ内のモニターで局内の収録番組が見ることが出来るのよ（笑）」

「って事は、サテライトスタジオもって事ですか？」

「もちろんよっ フフッ」

「参ったなあ」

「あらっ、あれも私の誕生日プレゼントかと思ったわ」

「えっ えええ」

「藍ちゃんと すり替わった瞬間も絶妙だったわよっ、ほとんど画像じゃ解からない」

「そうでしょお（＾ｏ＾）自分の筋力が回復したから出来たフットワークっかあ・・・ってえ、なっなんで鈴原の名前を・・・」

「藍ちゃんから聞いてなかった？ 病院に居たときにイロイロ相談に乗ってあげたのよ」

「そんな話、聞いてません（驚）」

「あらっ内緒にしておく理由があつたのかしら・・・」

【ガチャ】スタジオの扉が開き長谷川修が入ってくる。

「川崎君はきているか？」

「ええ到着済みよ」

「お騒がせして申し訳ありませんでした。」

「本当にハラハラしたよつ、まさかあんな演出を用意しているなんてなつ」

「演出なんてとんでもない、またゴットが仕組んだ事ですよ（汗）」

眼鏡の位置を直しながら、笑を堪える長谷川

「長谷川スカウトつ会場は紀子にちゃんと頼んできたの？」

「ああ大丈夫だよつ、愛が言つてたNo.6の鈴原くんを指名する様に言つてあるから」

「鈴原を長谷川さんの事務所にですか？」

「そつ指名したプロダクションが数名いた場合は、本人が逆指名出来る制度なんだ」

「そしたら私のいる森田プロを藍ちゃんが指名してくれるってワケ、フツ」

「もちろん優勝が条件なんだけどね」

「鈴原が森田プロ……」

「森田プロは健全なプロダクションよ、私が保証する　だから藍ちゃんの事は安心してちょうだい」

「あつそうだ、その森田プロの社長から　これ預かってきたんだつた。」

そう言つて、長谷川が差し出したのはギブソンのギター

「えっ何で？　これって僕が壊したギター……？」

「そうなのかい？　渡せばわかるつて森田社長に言われてたんだが」

（社長つてベントのおっさん………ウソお………？）

「あらっでも川崎くん ギター持ってきてるわよ」

「前に使っていた親父のギターが修理から戻ってて、今日はこのギターを使おうかと」

「見てもいいかい？」 長谷川修に言われ拓都は頷いて答える。

【ボロロン】

ギターケースを開けて弦を弾くと長谷川の表情が変わる。

「こんな程度のイイのは初めてみたよ・・・」

「？」 拓都は意味が解からずにいると星野さんが口を開く

「懐かしいわね、やわらかくて優しい響き・・・それ鈴木バイオリン製のギターね」

星野愛が昔を懐かしむ様な表情で答える。

「さすがだな愛、正解だよ・・・お父さんもこれ使ってたんだよな」

「えええ、日本製のギターにはない音色だって何時も父が言ってた

わ

「・・・・・・・・」

「父のギターは、しばらく放置したせいか、修理も出来なくなっちゃってね・・・」

「だったらパーツを組みなおせばいいんじゃないんですか？」
僕が聞くと長谷川さんが答える。

「そうも行かないんだよ川崎君、鈴木バイオリンって会社はもうないんだ。」

「そうよっ 中古市場に出回ってはいるけど、程度のいい物はほとんど無いわ。だからここまで程度のいいものは稀なのよ・・・」

「そんな凄いギターなんですか？」

『すごいギターなんです』長谷川さんと星野さんが同時に答える。

ラブソング7

【最終審査の巻】

そのころ

サテライトスタジオでは審査員の質問による最終審査が開始されていた。

「キラリン美少女を探せの審査もいよいよ終盤ですよお」

【わあああああーーーーー】

『さあさあさあ！！ 如何なものでしょうか皆さん！！』

『もちろん最終審査はお馴染みの4人の審査員によるフリートークタイムです！！』

『より突っ込んだ質問と本音に迫る回答にご期待ください。』

キラリン美少女候補生の6名が審査員の前に座らされると基本的な質問が2、3

恋人がいるのか？ とか趣味は何か？ とかの類いの質問

6名の返答は全員、恋人は無し

趣味は音楽鑑賞やら映画鑑賞などの無難な回答だった。

「ふむっ、つまらん……プライベートは優等生な回答ですか……」

ジャーニー坂野が不満そうに呟く。

「6番の清原くんは聖歌の他に得意分野は何かね？」

そつとう気にいったのか小村鉄馬が清原麗華のみに質問する。

「最近はダンスミュージックに興味がありますが、一番好きなのは演歌なんです。みちくさ一人旅なんか最近のヘビロテです。」

「えっえっ演歌ってえ北島二郎のみちくさ一人旅ってことか？」

「ハイ、北島殿に会えたら私 死んじゃうかもデス。」

清原麗華の回答を聞いて黙り込む小村鉄馬

その状態を見て、ジャーニー坂野が鼻でせせら笑う。

「入れ込み過ぎじゃないのお鉄馬さん」馬鹿にした口調で小村鉄馬に言葉をかける。

すると

「うん、良い！！ 良いではないかあ！！ 歌唱力の裏に演歌ありっ！！ うむっ創造力が掻き立てられる！！」と小村

「はあ」意外な反応に審査員一同が目を丸くする。

その内容に刺激されたのかジャーニー坂野がエントリーNo.1の品川翔子に質問

「肌を露出するのは平気かね、ウン？」

「えっ」

「グラビア本を出す場合は、それなりのショットが要求されるからねコレ」

「裸になるって事ですか……………」

「キミのボジイなら世の中の男子は^{だんし}ノックダウン確実、正にパーフェクト」

「私、脱ぐのは…ちょっと……………」

「脱ぐのはNGってことかなっコレ」

「いやっ…あのお…そのお」

「ヘアーヌードとか、そういうモノではなくキワドイセンスって感じなんだがなあ、ウン」

「スイマセン 母に、肌の露出は出し惜しみしろって言われているので・・・」

「うーん、瓦を割る度胸のよさからスパッと脱いでくれるかと思っただがねウン」

「ぷつ、そうそう旨く行くかってんだよエロジジイ」横から小村鉄馬がチャチャをいれる。

するとジャーニー坂野が

「でも・・・そのしっかりした貞操観念が、逆にそそられるではないのコレ」と発言

小村鉄馬の一本取られたという表情に、司会も会場からも笑が起る。

笑がひと段落すると

今まで黙っていた坂本あけみが、鈴原藍に質問

「登場から随分奇抜な演出でしたが、どんな意味が込められているのか教えてもらえますか？」みんなが聞いたかった質問を投げかける。

「うふっ」笑顔を見せゆつくりと喋りだす鈴原

「注目を浴びたかったです……。」

「えっ」

「出来るだけ注目を浴びたかったって事です。」

「注目って目立ちたかったってこと？」

「ハイ」

【ザワザワ】会場がざわめき出す。

「注目される為って言うてるけど、審査に良い発言には聞こえないわよ」

「ええつでも本当に注目してほしかったから……」

鈴原が力なく答えると会場から野次が飛ぶ

「ふんっ学園アイドルの延長かよっ」

「キラリン コンテストをバカにするなよ!!」

「みなさん、お静かに!!」

司会アシスタントの中島富美が会場を制止

会場が静かになったのをみはらかって坂本あけみが続けて口を開く

「注目してもらにしても限度を超えた演出だったわよ」

「……………」

「それなりの理由がある筈ね」

「理由ですか？」

「そう理由よっ」

「理由は……私のお父さんを……見つける……為です……」

「おとうさん？ お父さんを探す為って、行方不明なわけえ？」

「行方不明ってわけじゃ無いみたいなんですが……」

「わけじゃ無いみたいって、どう言うことよお？」

「んゝそこんところは複雑なんで、割愛させて頂きまーす えへっ」

「今の時代には不似合いなメロドラマチックな要素も持ち合わせる娘か……」

ジャーニー坂野の目の色が変わる。

「この発言も彼女の計算なのかもな……」小村鉄馬も呟く

「コホン、他に質問はございませんか？」仕切り直しとばかりに
マイケル寺岡

すると傍観していた如月英治が口を開く

「No.2からNo.4の娘に質問するんだけどお、お前ら芸能ス
クール一緒だろ？」

「はい」3人とも頭を縦にふる。

何で解かったのかっ　　と言う顔でジャーニーと小村が如月に驚き
の眼差し

「コメントの内容とかスクールで教えてもらったまんまなんだろう？
！」

「すつすいません・・・」3人とも顔を赤らめる。

「だから、他の3人に注目が行っちゃうんだよ！！　お前ら本物の
個性がねえのかってんのお！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」3人は今にも泣きそうな状態

「如月さんっ質問のコーナーなので私的なコメントは控えてもらえ

「まさるか？」

如月の暴走発言を制止すべく中島富美がやわらかい口調で制止する。

「ジャーニーさんも小村さんも眼力落ちたねえ」横の2人に向け
嫌味なコメントの如月

「なんだとお、しつ失敬なっ！！」

「そうだとも、スキャンダルまみれのあんたに言われる筋合いはな
いぞお」

ジャーニーと小村が相次いで答える。

すると、如月英治が薄ら笑を浮かべ 前にいる3人に指示をする。

「もう一度、一人ずつ名前を言ってみなっ」

【えっ】という表情の3人

「いいから大きい声で言ってみな」

「エントリーNo.2番 上戸まや」

「エントリーNo.3番 中川涼子」

「エントリーNo.4番

下村真琴」

「よしっ イイ声だ」そう言つと続けて指示をだす。

「小村さんの作った曲、エックス・ザウルスの曲に合わせて3人で踊ってみろ」

「おいつフリートークのコーナーだぞお」ジャーニー坂野が怒鳴りだし

「エックス・ザウルスはハイテンポなダンスだ、彼女らのレベルでは恥をかくだけだ」と小村鉄馬まで声を荒げる。

（でも、3人の表情がさつきと違って明るくなつたわね・・・）

坂本あけみは状況が変化したのに気づき司会者にコメント

「3人が嫌じゃなければ、やらせてみたらどうかしら?!」

「そうですねーどうでしょうか？ 3人さんの意見は」
すると「もちろん、やります!!」と元気のいい返事

小村鉄馬の楽曲エックス・ザウルスが流れはじめると
申し合わせたかのように3人がパートも交え踊り始める。

【おおーーーーー】会場からも歓声

「小村くん、マニアックスにダンスやらせるより良いのでは？」
ジャーニー坂野が小村鉄馬に真顔で聞く

「えええ数倍イイですよ……」小村も真顔で答える。

曲が終わると、勝ち誇った様に如月英治が喋りだす。

「ってこと……彼女らは単体では光ものは無いけど3人なら何倍にも光る」

司会の2人も含め、会場の皆が納得

「そういう事だから、彼女らの審査は3人まとめてやってくれよな
っ」

髪の毛を掻き揚げながら如月

「3人一緒ですかあ？ ん〜どうでしょう？ 審査員のみなさん」

マイケル寺岡が他3人の審査員に聞き返す。

もちろん3人とも異議なしの回答

もともと堅苦しいルールの無いのがウリのコンテスト

会場はもちろん盛り上がる。

（やるわね如月君、これで候補生全員の格差が無くなったってワケね・・・）

如月の眼力に関心する坂本あけみだった。

ラブソング8

【スカウトの巻】

【M7スタジオ】

スローなテンポから入ったメロディは中盤で軽快なサウンドを奏でエンディングでは激しく

そして情熱感を讃え

印象的なフレーズで幕を閉じる。

拓都と対面に座っていた星野愛の瞳には涙が溢っていた。

拓都の演奏が終わったスタジオ内は静まりかえっていたが
星野と長谷川の心は演奏の出来映えに興奮を抑えきれずにいる。

「ありがとう・・・川崎君・・・。」星野さんが涙を拭う。

（楽曲の完成度も高いが、ギターの腕前が前回とは比べ物にならないくらい上達している・・・さすがに愛が入れ込むだけはあるな・・・）
長谷川は顎を擦りながら関心する。

「よかったっ、巧く演奏出来て・・・」

拓都はそう言っていると安心したように大きく息を吐いた。

長谷川修が拓都の傍に来て肩を叩く

「プロ顔負けだったよっ川崎君、ギターもいい音で鳴ってたし」

「そっそっでしたか？」

「長谷川が言うんだから間違い無しよ川崎君」

驚いた顔をしつつ顔を赤らめる拓都

「川崎くんに誕生日プレゼントも貰ったことだし、病院にもどるぞ愛」

「演奏してもらったそうそっで、追い帰すみたいになっちゃうわね川崎君」

「そんなことないですよっ星野さん、体が一番大事ですから」

僕は完成した曲を披露できた満足感でイッパイだったし
長谷川さんに演奏を褒められたこともあり、かなり舞い上がって
いたんだと思う

そんなんだからサテライトスタジオでの結果が重大だなんて考えもしなかった。

サテライトスタジオでは、最終審査が発表されていた。

審査は審査員4名による投票で決定するのだが

如月英治の発言によりエントリー者が4グループとなってしまった為なのか

見事に投票も4つに分かれたのである。

『こっこれは、見事に4つに分かれてしまいましたあ』

『と言うことは、会場の皆さんに決戦投票のボタンを押してもらうことになりますね』

【わあああああー】

『そうです!! 皆さんのお手元にあるボタンを押す時がやってまいりました。

キラリン美少女に相應しいと思うエントリーNoを押してください』

『押した集計結果が、あの画面に表示されます!!』

『それでは、キラリン・ボタン スイッチオンッ！！！』

会場の観客それぞれが投票ボタンを次々と押しはじめと
スタジオ中央のスクリーンに集計結果がグラフの様に積みあがって
いく。

【ジャガジャーーン♪】集計終了のSEが鳴ると
大きく結果が表示された。

『えっ』

『えっ』

『ええーっ！』

画面に表示された集計結果は、4グループ共に同票

『こっこんなことがありうるのでしょうか？！』

『未だかつてありえない結果となりました。』

司会のマイケルとアシスタントのナカジーが審査員席にて
暫しどうするか話し合う。

『えーっ 審査員とも話し合ったけっか、会場投票でも決着がつか
なかったと言うこともあり、4グループ共に優勝と致します。』

『よって、プロダクションによるキラリン美少女のスカウトは少々
ルール変更の上で行うこととなります。』

【M7スタジオ】

「どうする？ もう一回やるか？」

「気持ちよく出来たと思うけど、もう一回したいなっ」

「でも体がもたないだろうっ愛」

「これを逃したら、次に何時出来るか解からないでしょ」

「わかったよ、だったら今度はもう少し口を大きく開いてやってくれないか？」

「わかったわ、今度はもつと出るかしら・・・」

【ボタンッ】

M7スタジオに血相を変えた藤原紀子が入ってくる。

「あららっ 取り込み中だったかしら」口に手お当て藤原紀子

「おっとお、紀ちゃんスカウトの方はどうだった？」テーブルのコーナーヒーを手に取り長谷川

「本当にゴメンなさい！！ 何故なのか空手娘をスカウトしちゃったわ」

「へっ？ 何だってえ」

「覆面娘のスカウトができなくなってしまったのよね」

「どうゆうことよお、優勝者がアノ空手の娘って事なの？」星野愛

が聞き返す。

「うううんっ 全員優勝」

「全員優勝ってえ?????…だったら全員スカウト可能だったんじゃないの？」

「うんっだからNo.1とNo.6をスカウトしようかなあ〜と思って指名したら2人目の指名は駄目だったんですってえ」

「紀子っ司会の説明えシツカリ聞いてなかったんでしょ」星野愛が溜息まじり

「へへっ」

「へへって、紀ちゃん」呆れ顔で長谷川修

「でっNo.6の藍ちゃんは 何処のプロダクションがスカウトしたのよお？」

「エムベックスっ」

「やっぱり水上のおっさん所かぁ・・・・・・・・厄介だなあ」

「ホント厄介ね・・・・・・・・・・・・・・・・。」

長谷川も愛も顔を見合わせて黙り込む

サテライトスタジオ観客席の傍らでは

正徳とゴットシンが大騒ぎ

「バンザーイ、バンザーイ、バンザーイ!!」

「天下のエムベックスでござるよ、正徳殿」

「凄い!! 凄い!!、エムベックスって事はもちろん歌も歌った
りするんだよなあ」

「もちろんでござる!!」

「もちろんだよなっー（笑）」

「むふふふっスカウト前のお宝写真を撮っておいて、良かったザン
ス」

「俺も同級生として、鈴原を育ててきた甲斐があるってもんだっ」

「わっはははははっ」

「誰が鈴原を育てたってえ……」

大喜びの2人の前に僕が合流

「おっと拓都くんも一緒に育ててきたんだっとなっ」

「アホか正徳っ、只の同級生だろうが」

「拓都殿は鈴原殿の恋人なんで、複雑ザンシヨ」眼鏡を光らせ意味
深なゴットシン

「なっ何いってんですか慎也さん」

「ぷつ　ムキになっちゃってえ拓都ちゃん」

「お前まで何言っただよ!!」

2人のペースにハマッタまま

鈴原にお祝いを言おうと控え室に向かったのだが、会うことは出来なかった。

早速、エムベックの社長と本社に契約にいったらしい。

（星野さんたちの事務所に鈴原が入る手筈だったと思ったんだが・
・何故にエムベックス??）

仕方ないので3人で祝勝会をひらく羽目に・・・。

どうでもイイのだが、この日の2人のテンションは高かった。

何時の間にか、鈴原のファンクラブが結成され

会員No.1～No.3まで確定してしまった。（笑）

この後の鈴原といえば

翌日から夏休み明けまでの数日間、僕らは連絡がとれていない。

ラブソング8（後書き）

公式ホームページ

<http://www.okbabyok.com>

ラブソング9

【最後の1人巻】

カレンダーは9月に替わり

TVでは、キラリン美少女を探せ！！ 優勝者たちが画面を賑わしていた。

清原麗華は小村鉄馬のプロデースで早速、楽曲をリリース

要所要所で演歌的なコブシの効く軽快なポップス『弾けるラブ・スマイル』を発売

既に化粧品のCMソングに決定している。

長谷川さんのいる森田プロで獲得した品川翔子は

ジャーニイ坂野の強力なプッシュもあり9月下旬には写真集を発売

その発売日に合わせて曲のリリースする企画も進行中だ

楽曲は、小村鉄馬のライバル中田ヤスオに依頼しており

楽曲名も写真集の表題と同じ『恋の空手チョップ！！』に確定して

いるようだ。

上戸まや・中川涼子・下村真琴の3人は

如月英治のプロデュースで【スシネタ】と言う名のユニットを結成

歌いながら踊るディスコチューン『オスシdeディスコ』は

メリハリのあるメロディに寿司ネタ名を歌詞に乗せ、子供からお年寄りまで受けそうな出来映え

小学校ではオスシdeディスコの振りマネが流行りはじめていた。

一方、エムベックと契約を結んだ 鈴原藍は

意外にも、未だTV露出も楽曲・写真集やらの発売発表もなされていなかった。

たたみかける様に売込み企画を連発するエムベックスでは
異例中の異例である。

【拓都が通う高校】

「ういゝス」

「おっ正徳っ」

「流石に夏休み明けはテンションさがるよなあ」

「あああ」

「でっどうなんよ?」

「ん? 何が」

「何がじゃないだろう拓都君」

「鈴原の件かあ・・・鈴原なら連絡とれてないゾオ」

「えっマジ」

「マジもマジッ、携帯の電源入ってないんじゃないの?！」

「一度も連絡とれてないのかよっ」

「忙しいんじゃないのぉ？」

「忙しいってえ……おかしいなっ」

「何がだよ？」

「キラリンの優勝者3人は、かなりのメディア露出しているのに
鈴原だけ音沙汰ないんだよ」

「言われてみればそうだけど、今夜バラエティ番組【めちゃくちや
イイ感じ】に出るみたいじゃん」

「そりゃそうだけど、弱小プロダクションでもあるまいし やつと
今日のバラエティ番組出演だけってことはないでしょう？」

「ふう〜ん、そうなのかあな〜」

「あたりまえだろうっ、天下のエムベックスと契約したんだよ 鈴原」

は
「

「そこところは、ゴットシンに確認すれば解かるんじゃないの？」

「ゴットのところにも情報が入って来てないんだよ」

「って 確認済みかいっ！！」

「これは、何かあると俺はみたぞお」

「あのなあー、お前は芸能リポーターかってんのお！？」

「うむっ・・・」

【森田プロ事務所】

「どうだっ曲のオケは上がってきたか？」

「バッチリよっ、私の美貌があれば中田ヤスオなんてチヨチヨイの

「チヨイよ」

「美貌だったって簡単に引き受けないぞ中田さんは、どんな手を使ってたんだい？」

「企業・ひ・み・つ・よ・」

「秘密？・・・まっいいか・・・紀ちゃんっ 品川君のメロの合わせ、ヨロシク！！」

「OKっ 長谷川はこの後、愛のところに行くんだっ たっけえ」

「ああっ 愛の所に行ったら、ガモウさんにスタイリストの契約に行ってくる。」

「じゃ私も夜に行くって、愛に言っというてっ」

「了解」

【エムベックス本社内 スタジオB】

「そうそうっ もっと顎をひきぎみに」

「はいっ」

「もっと自然な感じで遠くを見るように歩くのぉ」

『ワン・トウ・サン・シィ ワン・トウ・サン・シィ』

「いいわっ、すっごくイイっ!!」

【ガチャ】

社長の水上里香が入ってくる。

「鈴原藍の状態は、どうかしら？」

「ええっカナリ上達が早いですね、イイですよっすっごくイイ」

「そうっ、さすが世界のガモウだわっ」

「いえっ、今回は素質がイイと言っか 彼女の持ち味ですわぁ」

「フフッ、そうね。 この後はメイクチェックも宜しくね。」

「えっでも、この後は浜田未来のツアー衣装打ち合わせだったんじゃない」

「浜田の件は大丈夫、それよりも今夜初出演のバラエティは生なんだから、鈴原さんの笑顔が際立つ様に仕上げて頂戴っ」

「承知しましたわっ 初出演が生放送でも、この娘なら大丈夫♪」

「ふふふっ、そんな事 最初から解かってることよガモウさん」

「・・・そう言う事ですか・・・」

「この娘は会長からのお墨付きなのよ、イロイロと念入りにたのむわね」

「心します。」

【エムベックス本社内 スタジオA】

コンサートツアーリハーサル中の浜田未来

「何で、あんな小娘に入れ込んでるワケよっ」

「まあまあ未来ちゃん、そんな興奮しないでえ」

「うっさいわねえ！！ トータル・コーディネイターのガモウは、この私が指定したのよっ！！」

なのに今変更ってどう言うことお？ 私のコーディネイトを任せられるのは、世界のガモウだけでしょっ、そうでしょ？！」

「じゃ社長からの指示らしいので、皆目見当が付きません」

「何それ 高田あ、そんなんで私が納得すると思ってるのかよ」

【ドガッ】スタジオのスピーカーボックスを力強く蹴りこむ未来

「と申されましても……………」マネージャーの高田は汗を拭きながら答える。

「使えねーマネージャーだなあ、明日から来なくていいよっ」

「……………」

「誰かつ煙草買ってきてくれない？ メンソールキツイやつ」
空になった煙草の箱を手で握りつぶしながら、後ろにいるスタッフに声をかける。

「みつみつ 未来ちゃん それ以上吸ったら喉に影響が……………」

「うつさいわねえ私に命令しないで頂戴っ」

「……………。」

【ドカッ！！】【うおっ！！】

黙り込むマネージャー―高田の腹に無言でケリを入れ
未来はスタジオ隅にある、ビル内専用電話から会長へ連絡をいれる。

『どうした？ ツアーのリハ中じゃないのか？』会長の水上が答える。

「どうして代えたのよぉ」

『何のことだ？』

「私が指定したコーディネイターよっ」

『知らんよ、ボキが未来ちゃんにそんなことするワケないしょ』

「だったら世界のガモウを私の処に戻してえよぉ」

『・・・・・・・・』

「ねえ 水上会長おん、未来の一生のお願いっ イイでしょ」

『ガモウ君の代わりに付いたコーディネイターは・・・ダバ君か・・・』

「そうよぉ、ダバよぉ くねくねダンスの ダバちゃんよぉ」

『ダバ君なら今回のツアーの趣旨に適役ではないのかな？』

「くねくねが適役なワケないでしょ！！最悪よぉ」

『今回のツアー内容は、ダンスチューンメインのアルバムしょ』

「だからって、くねくねくダンスをしろってんの（怒）」

『ダバ君にダンスの真髓を叩き込んでもらうイイチャンスしょ』

「だってえ会長お」

『彼が本気で踊ったところを見たこと無いだろ未来ちゃん』

「……ないわよっ」

『なら見ておくしょ、歌姫・浜田未来が次のステップに行くには必要しょね。』

「・・・次のステップに必要？・・・必要かあ・・・必要かもね・・・」

（ん？　まてよ・・・ホントに必要なのぉ・・・）

【PM8：00ムジテレビ】

ムジテレビのロビーに
ハンディカメラと照明＆amp・音声という最小での放送クルーが
待機
時報と共に生放送が開始された。

『木曜の夜は、めっちゃくちゃイイ感じ！！』

何時ものタイトルバックが流れ
進行役のナカジーこと中島富美とお笑いコンビ【ナインナイン】が
高いテンションで現れる。

「ナインナインのムラオカです!!」

「同じくタナベっちですねんっ」

「そしてテレビに咲いた一輪の花 ナカジーです」

「一輪の花って、ナカジー言い過ぎちゃう」

「うふっ、そうかしら」

「まっ花は花でも団子っ鼻ですなっ」

「何を言っちゃってるんですかぁ」タナベっち

「ハイッ、そんな二人はほっとして お台場探偵団のコーナースタ
ートしますよ!!」

「そっそうなんです! ムラオカさんっ、お台場探偵事務所に調査依
頼書がとどいてるんです。」

ナカジーが胸の間から依頼書を取り出し、ナインナインのムラオカ
に手渡す。

「おつとホツカホカの依頼書ですよーひよっ」

「なんやねんっ、その依頼内容ちゅーのは？」

タナベっちがナカジーとムラオカの間に顔を入れ、突っ込みを入れる。

「キラリン美少女優勝者、最後の1人の情報をゲットせよ」

「えっ、最後の一人って誰え？」

「みんなっ歌とか出したんちやうのお？」

ナインナインの二人が相次ぎ発言

「そーなんですよっ、みんな歌とか写真集の発表がされているのに音沙汰なしのキラリン美少女が一人いるんですよ」

「何で知ってるんや、ナカジー？」

「そりやしってるわあ、キラリン美少女コンテストの司会がナカジーやもんなあ」

「そんなんですよー！！ 結構お仕事バリバリこなしてるんですよー」

「あんたの仕事の話は聞いとらんやろ」

「あれれえゝ失礼いたしました。その最後のキラリン美少女が鈴原藍さんなんですう。」

「鈴原藍ちゃん？」

「あれっ聞いたことあるでえゝ、梨木リポーターが怒った娘やわなっ」

「梨木リポーターが怒っていたかどうか別にして、かなりインパクトのある美少女なんですよお」

「ほなっ早速その美少女を拝みにいきましょかあゝ」

「行きたつてえ、どこにいるやねん」

「ハイハイ、そこんところもナカジーが調査済みです!!」

「局アナは仕事がいやいわなあ」

「ほなっカメラさん、ナカジーに後についていきましょかあ」

番組撮影の一行はムジテレビ2Fフロアから1Fへと階段を使いどやどやと下りて行く

【森田プロ事務所】

【ガチャ】

「あら社長、韓国から戻るの今日でした？」

「おおっ藤原くん お疲れさん、早めに契約が済んだんで一日切り上げてきた。」

「そおですか、私ならその一日をソウル観光にしちゃうのになあ」

「遊びじゃないんだぞお藤原、それでどうだ新人の品川くんは？」

「私が見たところナカナカ筋が良いわよっ社長お、長谷川は別な娘

を獲得して欲しかったみたいだったけどお」

「別な娘？」

「そお、覆面とかチューコッタダンスとか奇抜な演出した・・・す・
鈴原って名前だったかな・・・」

「鈴原？・・・」

「えっ社長、知ってらっしゃったんですか？？」

「いや・・・」

「あっそう言えば、今日のムジテレビに生出演だったと・・・」
そう言って藤原紀子が事務所のテレビをつける。

するとサインサインの2人とナカジーがタレント控え室に突入する
ところだった。

【ボタン】

「はじめましてナインナインでーーーーーす!! って誰も居まへんがなあ」

「どう言っことやねん、ナカジ」

「あれれえ」

「クスクスクス」

「何笑ってんのおカメラさん」

「あっ」

カメラさんがカツラと口髭を取ると

なんと鈴原藍

「なんやねん!!」そう言ってタナベっちが鈴原の代わりにカメラを操作

「初めまして、エムベックス所属の鈴原藍です!!」

「こりゃ一本とられましたわ」

「今、テレビに映っている娘が長谷川の言ってた娘なのか?!」

森田社長が愕然とした表情で藤原紀子に聞き返す。

「そっ、この娘よっ 確かにカワイイけど、たいしたことないでしょ」

「むむむっ 所属事務所はどこだっ藤原あ!!」

「エツエムベックスだけど・・・」

「なにい所属事務所がエムベックスだとお・・・・・・・・・・」

「しゃ社長どうしちゃったのお?????」

ラフソング9（後書き）

公式ホームページ

www.okbabyok.com

ラブソング10

【大友酒店】 ↑ 正徳の自宅

「どうだっ 綺麗だろ」

「正徳が自宅に呼ぶなんて目面しいと思ったら地デジ対応のテレビ買ったってことかよ」

僕は呆れ顔でコーラをすすする。

「うゝん サスガ最新型ちゅ、鈴原殿の肌の発色も実にイイ」
ゴットシンがテレビ正面に座り、番組【めちゃくちやイイ感じ】を真剣に見つめる。

「どんな見方してんですかゴット」

「凡人の拓都にはわかんねーんだよ」
正徳が僕の脇で棒立ちのまま答える。

「正徳殿っ 録画はしてるでござるか？」

「もちろん、ゴットの指示のとおりブルーレイでございます」

「ぶっ 鈴原をブルーレイに録ってどーすんのお」

「そんなことはないでござるよ拓都殿、あのスマイルは他のタレントには出来ないでござる」

ゴットの言うとおり画面に映る鈴原は、学校で見る鈴原より数倍綺麗だった。

あんな笑顔を僕にしていただろうか？

「別人みたいだ………」

「何を言っちゃってるんですか拓都くん、正真正銘 俺たちの鈴原だよ」

「わかってるよ………」

「それだけアイドになる素質が鈴原殿には、あるでござる」

「そこまで言い切るゴットが、ムジテレビに直接見に行かなかったのは何故？」

ゴットシンの何時もの行動を察しながら聞いてみる。

「星野殿の件・鈴原殿の件で、梨木がオリ（俺）をマークしてマッスル」

「梨木が……」

-

【新橋駅のカフェで長谷川と世界のガモウ】

「悪かったな、今日一日エムベックスだったんだろう」

「ううん、担当が浜田未来から 鈴原藍さんに急遽代わったから
時間に余裕が出来たわ」

「急遽新人に担当変更とはエムベックスも穏やかじゃないなあ」

「そうねえ未来ちゃんの荒れてる姿を想像したくないわ」

「て事は、ウチの品川にも世界のガモウのレッスンが受けれるって
ことかなあ」

「毎日はむりだけど、月曜と水曜、そして金曜の17時以降ならオ
ーケーよっ」

世界のガモウが手帳見ながら答える。

「そうか、なら助かるよ」

「ところで、どーなのよ愛の調子は？」

「・・・だいいいよ、でも退院はマダマダ先だね」

「あら・・・そうなのお残念ね、また昔みたいに3人でツルメルと思ったのに」

「そうだなあ昔はよかったなあゝ何も考えずに前に突き進んでいた俺たちの良き時代だ」

「あら今だつて変わらないじゃないのお、火星に飛んだのよ先日（笑）」

「はははっ」

「ところで愛のお気に入り、鈴原くんはどんな感じだい？」

「ゾクゾクする位いいわっ、10年に1人でるかどうかの逸材ね」

「やっぱりなっ」

「既に、エムベックス会長のお墨付きよ」

「お墨付きかあ、それが心配なんだよなっ」

「よその事務所のタレントの心配するなんて長谷川らしいわね」

「ふふっウチが獲得しようとした娘だしね、それに・・・」

「それに？ 何よ」

「いやいいんだっ、でも鈴原くんに何かあったら連絡してくれ」

「いいわよっ、そのかわり今度一杯おごってもらっわよ」

ラブソング10（後書き）

オフィシャル（PC）

<http://www.okbabyok.com>

ラブソング11

【再び、森田プロ事務所】

エムベックスに電話する森田社長

「もしもし会長に繋いでもらえるか?!」

『申し訳ございませんが、会長へ直接のお電話はお繋ぎできかねます。』

「森田プロの森田からだと言えば分かるはずだ」

『ですが、お繋ぎすることが出来ないことに・・・・・・・・・・・・・・・・』

「そんなハズないだろ!!」

【ガサ・・】電話機から雑音

『あら、森田さん!!お電話代わりました里香（社長）ですう、お久しぶりですわ』

「おっお嬢さんですか、お久しぶりです。実はお父さんと話がした

いんだが・・・」

『お父様と？　ワタクシでは役不足ですかしら』

「・・・お父さんと重要な話があるんだが、繋いでもらえんかね」

『重要な話なら社長のワタクシが承りますわ、お父様より確実にワタクシが適任と思われますしい』

「お嬢さんと話す内容ではないんでねえ、お父さんには代わってほもらえないかい？」

『あつそうだわ、電話でお話もなんですので今からお食事でも如何かしら？』

「おっお食事？」（相変わらず人の話を聞かんのか・・・）

『そっお食事しながらがイイわ、ヒルズに美味しいお店がございますの』

「うんっ、困ったな水上くんと重要な話をしたいんだが・・・」

「

『お店の予約は・・・今取れましたわ、森田さんの事務所に今すぐ車をまわしますう』

「はっ！？よっ予約っ??？」

.....
.....
.....

六本木ヒルズ内 スローフードレストラン 【αグリーン】

「どうということなの？」

「鈴原教授のお嬢さんが、先ほどムジテレビの番組に出演なさっていたと言う情報が入りまして・・・」

「へえ?!嘘でしょ」

「番組の中でエムベックスに所属していると公言しております。」

「冗談言わないで、娘からそんな話聞いてないわよ」

「しかし、教授の出演している番組プロデューサーからの問い合わせでしてえ」

「ドッキリか何かなのお、そんなの流行らないわよお」

「間違いならいいんですが、年恰好もソックリでしたし名前も同じのようでした・・・」

「年恰好も名前も一緒の偶然もあるでしょ」

「間違いならいいんです。本当だったらマスコミの格好のネタにされますので・・・」

「・・・」(まさか別れた夫が芸能界に誘ったなんてこと無いわよね)

鈴原藍の母、鈴原碧は不安な面持ちで食後の紅茶を口に運ぶ

「ふう〜 美味しいダージリンだわ・・・有機栽培された茶葉は違うわね」

「鈴原教授に気に入ってもらえい光栄です。」

「そうね、またこのお店使わせてもらっわ。そろそろ帰りましょ
う」

鈴原碧と助教授の男が立ち上がると

レストラン入り口から、どやどやと業界人らしき人物が数名来店
とりまきの中心にいるのは

森田プロの社長・森田毅とエムベックス社長・水上里香だった。

「頼むから君のお父さんをお呼びしてくれないか？」

レストランまで来てしまった状態にうろたえながらの森田

「その話は後後、先ずはお食事いたしましょうよお」

森田とは裏腹に楽しそうな水上里香

「って言うか・・・どうして食事することになってるんだ?！」

「ここの食材は全てスローフードですよ」

だからとっても美味しいくて体にイイですよ、毅^{たけし}さんもきつと気に
入ると思うわ!！」

そう言っつて、森田の腕に絡みつく水上里香

「ふふっデザートも頼まなくっちゃ」水上里香はそそくさと店内
に注文しに行く

その状況に困った顔の森田毅

「そうね た・け・し さんもきつと気に入るわ」そう言って現れたのは鈴原碧

「みどり?!」

「復縁の手紙をよこしておきながら、デートとは筋金入りの詐欺師だね!!」

「ちっ違っつ!!」ご誤解なんだ

「あら、この状態で誤解もなにも無いわよねえ」

「今日は水上会長と話が・・・」

「会長? 何処にいるのかしらねえ?! 嘘をつくならもっとマシな嘘ついたらどうなの!!」

「くっ」

「まさか藍まで嘘つくように誑かしてるんじゃないでしょうね」

「嘘？……タレント事務所の件は聞いてなかったのか……」

「えっ！　もしかして、本当だったのぉ！！……なんて事なの……」

「だから水上会長にその話をつけようとお……」

「藍が、あなたと同じ世界……芸能界に憧れていたなんて信じられないわ」

「俺も今知ったばかりだよ」

鈴原碧は携帯電話で何処かにかけはじめる。

「絶対辞めさせてやるわ！」

そう捨て台詞をはいて鈴原碧はレストランの外へ

「辞めさせるか……エムベックスに入った以上、そう簡単にいかないんだよ　碧」
ポツリと森田がつぶやいた。

ラブソング12

それから一週間後
学校では期末試験

その試験に鈴原が久しぶりに現れた。

バラエティ番組数本とテレビの露出は少なかったが
トークや振る舞いが話題を呼び、人気は爆発寸前といったところ
試験当日だと言うのに、学校の男子は全員イロメキ立っている。

おまえらテスト大丈夫なのか???

「おはよう拓ちゃん」

「おはよう」

鈴原の態度が、普通過ぎて拍子抜けだけど
それが何故か嬉しい。

「試験勉強する暇あったのかよ」

「もちよっ、私を誰だと思っているのぉ」

「ちえ 余裕じゃん」

「拓ちゃんは余裕じゃないのお？」

「バゝカツ 余裕に決まってんじゃん」

「フツツじゃお手並み拝見ね」

「ところで、テスト終わったら時間あんのかよ」

「ごめん、この後戻ってレッスンなんだ」

「芸能人なみの殺人スケジュールだな」

「芸能人なみじゃなくて、ゲイノウジンなんですけどお」

「はははっ そうだったなっ」

「なゝんてねっ、当の本人は芸能人って感覚 全然感覚無いけどね」

「あんまり無理すんなよ」

「大丈夫よ、倒れそうになったら拓都に助けてもらうからサ」

「バーカ病気になったら助けらんねーよ」

『高校3年のテストもこの期末以外は実力テストのみとなった
大学進学組も就職組みも内心に入るテストだから気合いれてけよ！
！』

『うえーい』

『なんだっダラシナイ返事は！！ もう一回返事っ！！』

『はいっ』

『宜しい！！・・・と言う訳だ。それでは開始』
担任のヤマセン（山形先生）の決まり台詞でテストは開始された。

肝心のテストと言えば
難解な問題に、まざまざと現実世界に引き戻されてしまう内容ばかり。

（こんな問題解けないで、大学なんて受かりっこねーな・・・）
僕の前席に座る鈴原は、スラスラと解いている様に見える。
（芸能界に入った鈴原は、大学受験をするのだろうか？）

そして

あっけなく、期末テストは終了し

あっけなく、鈴原は向かえの車で行ってしまう。

『携帯の使用、事務所から制限されてるけど必ず連絡するからさ』

『お前からの連絡なんて、期待してねーよ』

『ふんっ、拓都のバーカ』

結局、帰りがけに鈴原と交わした言葉は、それだけだった。

「拓都っ鈴原と何話たんだよ」興味津々といった目つきで聞く正徳

「別に、テスト勉強してきたのかよとか普通の話」

「それだけかよっエムベックスには浜田未来とかエックスザウルスとかビックアイドル沢山いるんだぜ」

「だから何だよ」

「うっんっ、芸能界音痴はこれだから困るうう」

「芸能界音痴？ 何だよそれ……………」

「エムベックスの中枢にいるんだよっ、鈴原はあ」

「バカ、鈴原はスパイか情報員かってんのお」

「……………もっもったくない。」

「そんな話より正徳っ、久しぶりにマックによって行かねえかあ」

「ごめん拓都、この後 由美ちゃんと お約束」

「くっ、ガッキーニとデートかよお」

「俺の誕生日プレゼントを選んでくれるんだってえ」

「そうか 明日、誕生日だったなっ」

「ムフフッ正解！」

「ってことは、明日もガッキー二と、お・や・く・そ・く ですかあ」

「ムフフフッ またまた正解！！今日の拓都は冴えてるねえ」

「そんなの誰でもワカルだろって、しかしおアツイいねえ」正徳殿」

「悪いなあ」お前と付き合えなくて。 じゃなあ拓都」

「あああ」

（なんだよっ、結局一人かよ……）

仕方なく家路に向かうとポケットで携帯が震える。

【ダーダーダン・ダツダダー・ダツタダー】

（げっ、ダースベーダーの着メロ また如月英治？）

携帯電話の液晶画面を見るが、電話番号の表示のみ

（誰からだ？）

「はい、川崎ですが・・・」

「川崎君？ 私・私 ワカル？！」

「えっ誰？・・・吉田・・・さん・・・吉田めぐる・・・ちゃん？」
（そう言えば、退院間際に携帯番号教えてたんだった。）

「あつたりいいゝ、久しぶり」

「おおっ久しぶり、元気だったかあ」

「うん元気元気っ！！ 川崎君はどう？」

「何とかやってるって感じかな・・・ははっ」

「ええー何で微妙な返事なのよゝ、病院に居た時みたくギターとかガンガン弾いてないのぉ？」

「ギターは、もちろん弾いているけどって、ギターの演奏聴きたくなっちゃった？って訳じゃないよねえ」

「フッフ　ねえねえっ、退院祝いって一緒にやるって言ってたじゃん　川崎君の都合のいい日にやるっよ」

「あああそうだった、一緒にやるって言ってたよなあ」

「やろおーやろおー、勿論そんな時は川崎君にはギターを弾いてもらいますからね」

「オツケイツ、1曲まともなの完成してるし誰かに聴かせたかったんだっ」

「ホントにい、じゃ何時にするう?」

「そうだなあー今週の土曜日なんてどう?」

「今週の土曜日　オツケイ、じゃ場所と時間はまた電話するね」

「了解、楽しみしてるよ」

「私も楽しみ、じゃあねえ」

突然の電話は

入院中に友達になった、吉田めぐるちゃんだ。

あつと言う間に決まった週末の予定に、心が躍っているのがわかる
鈴原や正徳に相手にされなかったから尚更だったのかもしれない。

ラブソング13

【土曜日 エムベックス 会長室】

「どうした里香？」

「森田社長と何かお話がありましたか？」

「森田って森田プロの森田くんの事か？ ボキは知らんよ」

「先日、森田さんからお電話で連絡がございましたのぉ」

「で、用件はなんだったんだ。」

「それが、お食事しながらお話をしようとお店にお招きしたんですが……」

「……話出来なかったのか？」

「はいっお父様と直接お話したかったらしく、お店から帰られてしまっ」

「ボキと直接 話・・・」

「セツカク、デザートもトツテオキの物を注文したのに 里香とても残念です。」

「うむっわかった・・・森田には後日ボキから連絡しておく」

「お父様っ、その席には是非わたくしも同席させていただけますか？」

「里香を同席・・・森田はボキに話があると言っているのであれば必要はないしょ」

「お父様っ、わたくしはもっと森田毅様の事が知りたいのです!!」

「あれから10年以上も経っているのに、まだ森田のことが諦められんのか」

「だってお父様っ」

「ここは会社しょ、個人的な話は慎むしょね・・・ところで鈴原藍はどうだ?!」

「あつ ハイ、スベテにおいて完璧順調です。ビックバン・キャンペーン開始の場合かと」

「スベテにおいて完璧だとお・・・」

「はいっ、他類に観ないほどの仕上がりぶりです。」

「そうか、そうか、なら最後のレッスンをしても良いしょ」

「最後のレッスン???」

「本日19時に、横浜グランデユーナ国際ホテルに鈴原藍をよこすしょね。」

「横浜のグランデユーナ国際ホテル?・・・ってマサカお父様つ!?!」

「最後のレッスンは、ボキとの顔あわせしょ」

「顔合わせとは、会長の水上とベットを共にすることをさしていた。」

「お父様っ、もう それは……………」

「最高のアイドルは、大人の世界を知っておく必要があるよね」

- - -
- - -
- - -

昨晚、僕の携帯に

正徳からデレデレ声で誕生日デートの報告があった。

本題の話まで、どうしてもイイ話がダラダラと続くので割愛する。
要するに話しかったことは、ガッキーニからのプレゼント内容だった。

ガッキーニからプレゼントされた物は

誕生日前日に見に行った、バイク用のグローブと

ガッキーニそのものだったんだ……………と。

ガッキーニそのもの？

ガッキーニそのモノ？

ガッキーニその者??

ってマサカ!!

ガッキーニとエッチしちゃったって事

えっえっえええー！！！！！！！！！！

本当に、しちゃったんですかあ！！！！

確かにクラスでも初体験したヤツの話は聞くけど
身近な正徳が経験したと聞くと動揺は隠せない。

それも相手が超力ワユス・ガッキーニ

うっうううー！！ーギガント・ウラヤマシス。

そんな話を聞かされての本日は
吉田めぐるちゃんとの退院祝いと言う名のデート
意識するなと言われても、正徳の報告が頭から離れることはない
(汗)

待ち合わせは パフィシコ横浜

楽器フェアをやっているってことで決定したのだ。

「お待ちどうさま 川崎君」

「おっおっ 吉田さん」

「何かカックイイくなっ たんじゃない？川崎君」

「へえ僕が？」

「そうつボクがだよ」

「吉田さんの学校には、お世辞を教える教科なんてあるの？」

「そんなのあるワケないでしょ、アハッ」

久しぶりに会った吉田さんは、少し髪が伸びたからなのか大人びて見えていた。

僕が考えていた通り純粹無垢に育っている。

そんな吉田さんに変な想像をしてしまったのは正直、失礼だと思った。

「吉田さんつての、他人行儀に聞こえるから止めてくれないい『めぐる』でイイよ」

「ええっ急にいわれても戸惑うよっ」

「じゃワタシは『拓都さんっ』て呼んであげる」

「拓都さんって、ぶっ」

「何わらってんのお」

「じゃ めぐる ちゃん」

「ぶっ」

「ああっ吉田さんだって笑ってんじゃん」

そんなイイ感じのノリでスタートした2人だけの退院祝い
鈴原や正徳が、僕から遠ざかっている寂しさを
他愛も無い笑が埋めていく。

「ねえねえっ、これって拓都さんの持つてるギターじゃないのお」
楽器フェアの会場を一通り回ってみるとクラシック・ギターのコーナーがあつた。

「ホントだ、鈴木バイオリンのアコギ。随分程度がイイなあ」

「これって試し弾きできるんですかあ」

と速攻で、コーナーの展示員にめぐるちゃんが聞いている。

すると、食い入る様な目つきのめぐるちゃんを見て『少しなら』と渋々答える展示員。

「無理言っねえ〜めぐるちゃん」

「あらっ、ギターフェアに来た理由は拓都さんの曲を聴く為だったでしょ」

「まっ確かに そうだけど」

家からギターを持ってきて、街の中をウロウロするのは非効率だと楽器フェアを選んだのだ。

「早速、完成した自慢の曲を弾いていただけのかなぁ？」

【ボロロン】「もちろん」

アノ曲を人に聴かせるのは久しぶりだったが、別に肩に力が入ることとも無い。

弾き慣れたフレーズ

鈴木バイオリン製だからこそ出せる

柔らかな音の響き

弦から弾き出る響きが僕と一体化し、空間を包んでいく

（気持ちイイ……）

この曲を演奏していると、音と一体になれる不思議な感覚。
僕にとって特別な楽曲なのかもしれない。

演奏が終わると突然の拍手の渦
何時の間にか、人だかりが出来ていた。

チョットびっくり

目の前の めぐるちゃんは頬を高揚させて
右手でもう一回演奏して の仕草

人だかりの間からもアンコールの声

「まいったなあ」

そう言っで展示員さんの方を見ると
縦に首を振っている。

「もう一回だけですよっ
」

そう言っで、再度演奏を開始。

何か気持ちイイー！！

正直、僕は人前で演奏する喜びを知ったようかな気がした。

ラブソング14

【エムベックス スタジオB】
レッスン中の鈴原のところに浜田未来がやってくる。

『ガチャ』

「・・・・・・・・・・。」

「どうしたのよ 未来ちゃん」
レッスン指導中の世界のガモウが、驚いた表情で浜田未来に声をかける。

「どうもこうも無いわよっ、なんでカモウさんが新人のレッスンしてるってのよお」

「こっこれは社長が決めたことなのよお、鈴原さんもワターシも決件は無いのよお」

「何言っちゃってんのよっ、ガモウさんは私が指定したコーディネイターなのよっ!!」

「そんな事言われてもねえ・・・・・・・・」

「ガモウさんから社長に直訴してちょうだい。」

「ワターシから、ちょ直接直訴?!」

「失礼ですが貴女って 本物のハマミク（浜田未来）さんなんですか?」

鈴原が口を開く

「だったら何だってっんのよお（怒）」

「ホントにい?・・・ホントにハマミクさん?」

「くどいわねっ、本人の私が言ってるんだから本物に決まってるでしょ!」

「本物のハマミクさんなら・・・私 かなりショックです」

「シッコクって、私が指定したコーディネイターを取られるのが怖いね」

「・・・・・・。」 暫しの沈黙

「返事が出来ないって事は、凶星って事ね」

鈴原は左右に首を振りながら答える。

「違います・・・私は昔からハマミクさんのファンだったけど、そんな人じゃなかった。」

「あなたが知らなかっただけで、こう言う事も言つのよ イメージ壊して悪かったわねえ 新人さん」

「いいえっ、言葉とかそういう話じゃなくて・・・」

「新人のブンザイで何ナマいっちゃってるのよお」

「最近のハマミクさんの歌・・・聴いてて心が苦しくなります」

「こっ心が苦しくなる?・・・なんなのよお この娘っ」

「ハマミクさんだって、本当は自分で気づいているんじゃないですか?」

「私の何がワカルってんのよお!」

「歌に華やかさや完璧を求めても無意味だってことです!!」

「クツ・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「前のハマミクさんの歌は自由で伸びやかだった。」

「・・・しっ新人のアンタに、そんな事言われたくないわよお」

【ボタン】そこに社長の里香が入ってくる。

突然現れた社長の登場に驚きながらも気丈に喋る浜田未来

「ワタシは正当な話をしに來ただけですからね」

そう言い放つが社長は顔色変えずに答える

「あなたに用がある訳じゃないのよ」

「何よっ、また新人にエコヒイキしにきたつてのお」

「鈴原さん、今日19時にレッスンの総仕上げよ」

「総仕上げですか？」

「そつ、最後のレッスンは 会長と顔合わせなの」

「顔合わせ！！」 浜田未来が驚いた顔で鈴原を見る。

「本日19時に、横浜グランデユーナ国際ホテルのスイートルームで会長がお待ちになってるわ」

「フツ」嫌な笑みを浮かべるハマミク
(どう見てもウブウブ処女の新人が顔合わせなんて、耐えられるワケないわよ・・・これでこの娘も終わりね)

「わかりました今日の19時ですね」

「このレッスンが終わったら早速支度して頂戴、下に車を回してお
くわ」

「ウォーターシ以外の最後のレッスンって、社長ついったい何なんです
か？」

ガモウが社長の里香に質問する。

「それは・・・行つてからのお楽しみ・・・ですわ」
そう言いながら、横目でハマミクを見る里香

内容を話すなよと目で訴えているのだ。

「……………」里香に睨まれ複雑なハمامイク

(あの目、あの時と同じ目つき……嫌な感覚だわ)

当時の顔合わせを思い出し、気分が悪くなる

「鈴原さん、時間に遅れないようにね」

【ボタン】

「じゃ準備もあるでしょうから、レッスンはここまでね」

そう言ってガモウさんが椅子に座る

「ガモウさん、会長にお会いするならフォーマルな格好ですよね？」

「正解ね」

そのやり取りを見ていた浜田未来は

「せいぜいオメカシして会長と会うといいわ……ふふふっ」

「あら浜田さん 社長に直訴って言ってたけど、鈴原さんから担当をワターシに変更しなくてよかったのかしら？」

「もういいわっ、気が変わったのよ・・・ふふふっ」

「嫌な笑い方ねえ・・・」

「じゃあねえ」そう言って浜田未来がスタジオを後にする。

「それじゃ私も準備して横浜に向かいます。」

浜田未来を追う様に鈴原もスタジオを出ようとするとガモウが呼び止める。

「あつ鈴原さん、全部のレッスン終了まで渡すなって言われてたけど携帯電話返しておくわ」

待ってましたと言う表情で笑顔になる鈴原藍「ありがとう ガモウさん」

（参るわねえ！ホント笑顔がイイ娘だわ・・・改めて真のアイドル素質を実感させるわね）

世界中のモデルを手がけた、世界のガモウを鈴原の笑顔が魅了していた。

ラブソング15

横浜中華街

「ごめんね拓都さん」

「えっ何がだよ」

「セツカク中華街まで来て、お店を見つけれないなんてえ」

「そんな事 気にしてんのかよ（＾o＾）」

「だって、美味しそうなお店チェックしてきたのにさあ」

「中華街だったら幾らでもお店あるじゃん、2人で美味しそうな店
見つけようぜ!」

「うん2人で探そう!」

「でも、何か空の状態が怪しいなあ、雨が降ってくる前に何とかし
ないと」

「つて、えーっつ、降ってきちゃったよ拓都さん」

【ザアアアアアーーーーー】

「げっ 速攻で、どしゃ降りかよっ!!」

交差点の横断歩道で信号待ちしていた2人は、屋根のある場所に行く前にずぶ濡れ

「なんだよこれえ」しなしなな前髪を持って僕

「びしょびしょだよお」フワフワだったミニスカートの両端を掴んでめぐるちゃん

「なんか、服絞れば水が出てきそうな勢いだな・・・」僕が呟くとめぐるちゃんは微妙な表情

「なんか雨で服が透けちゃってるみたい・・・」

「うおっ」マジでエロイ状態に・・・

「えーんっ、恥ずかしいよおお」

「チョット待ってて、めぐるちゃん」

そうやって僕は、近くにあつたユニクロとコンビニを3分以内で駆け巡る。

「お待たせ！！ 早速、着替えよう めぐるちゃん」

「うんっ、でも着替えるっ たって ここ中華街だよ」

冷静になって考えれば、ビルのトイレでも着替えたはずだった。

僕は、気が動転していたのかもしれないし
お互い そうなる事を求めていたのかもしれない。

いずれにしても、僕らの選択したのは近くのホテルに入る事だった。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

神谷医院 個室

「どうかしたか 愛」

「忙しいのに、ごめんね 修」

「ぷっ 下の名前で呼ぶなんて何時ぶりだい？」

子供みたいな笑顔で答える長谷川修

「あの時、修に助けて貰った後以来かな」

「そうか、俺がマネージャーでキミがタレント 2人だけの会社誕生だったよな」

「そう、2人だけでやっていこうと誓った日からだね」

「でも直ぐにやっていけなくなるなんて思ってたよ」

「修は頑張ってたじゃない、それはエムベックスの力が大きかったって事よ」

「ああっ 森田社長に拾ってもらわなかったら、ここまでやってこれなかった」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「ねえ 修」

「なんだい 愛」

「わがまま聞いてくれてありがとね」

「急に、どうしたんだい」

「最近色々と振り回しちゃたじゃない」

「川崎君の事かい？」

「そうよ」

「俺はワガママだなんて思ってないよ、それにお気に入りになんだろう
川崎くんは」

「そうね・・・私のお気に入りの川崎くん・・・」

「彼は人を惹きつける不思議な魅力がある子だよ、俺も気に入ってるんだ」

「川崎くんが困った時は必ず助けてあげてね」

「わかってるよ」

「川崎くんみたいな男の子・・・子供に欲しかったな・・・」

「子供が欲しいなんて、結婚の申し込みかい」

「こんな体で、結婚も子供も無理よお修」

「どうしたんだよ弱気になっちゃって、愛らしくないなあ」

「ふふっ そうね」

「そうだよ 笑顔でいれば直ぐ治るって」

「笑顔ねえ・・・それで治ればいいんだけど・・・」

「絶対治るよ、俺が保障する!!」

「保障するう？」

「じゃ、チュウして」

「チュウってキスカ？」

「修のチュウがないと保障できないってことよ（＾＾）」

「アホかつ」

2人はゆっくりと大人のキスを交わす。

「ありがとう」

「キスしてありがとうはないだろ」

「ううん、修に出会えてよかったわ」

「わかってるよ」

「わかってるって自分で言つのお？」

「もちろん」

「ハハッ」

「ははっ」

「笑ったら眠くなっちゃったわ」

「ゴメン ちょっとハシヤギ過ぎた、ゆっくり休んでくれよ 愛」

「うん、じゃまた」

「明日、また来るよ」

「バイバイ」

『ボタン』

「ありがとう 修……バイバイ」

星野愛は

そう呟いて、目を閉じる。

少し空いた病室の窓からは、水分を含んだ重い空気が病室に流れはじめていた。

ラブソング16

横浜グランデユーナ国際ホテル 19時
最上階のスイートルーム

コンコン

「鈴原藍です」

『入るっしょ』

水上会長の声がした後、扉を開けて中に入ると
スイートルームということもあり
部屋1つ1つが、大きめな様子

そして

リビングとダイニングキッチン そしてベッ
トルーム共に豪華な造りだ。

リビングには贅沢な食材の料理が用意されてある。

「鈴原藍くん」

「はいっ会長、最終レッスン頑張らせていただきます!」

「そんなに気合を入れなくてもいいしょ」

「社長が総仕上げとオシツヤテタもので・・・」

「まっ取り合えず座るしょね。」

「すすいません。」

鈴原がソファーにゆっくりと座る。

「今日来てもらったのは、作法を学んでもらう為しょ。」

「作法ですか？」

「そうだ、芸能界という世界の作法」

「ゲイノウカイの作法」

「もちろん在り来たりでは無く、大人の芸能界作法しょ」

「オトナの作法???」

「鈴原くん、キミは食事をするという事の意味がわかるかね」

「食事をする意味ですか？」

「そうだ、食事の意味だ」

「生きる為のエネルギー補給とか・・・会話を楽しむ場とか・・・ですか？」

「うむ、一人とか家族や友達とする場合はそれで正解しょ」

「他に何かあるんですか？」

「会社と会社の食事には、ビジネスが絡むしょ」

「ビジネス？」

「そうだ、食事を共にするという行為自体が契約の同意を意味するしょ」

「契約の同意ですか・・・？」

「それがビジネスしょ」

「よくわかりませんが、食事を共にするイコール好意を持っていますという意思表示ということですか？」

「さすが鈴原藍、飲み込みが早いしょね」

「まずは、食事をするしょね」

テーブルに用意された豪華な料理を再度確認

「こんな沢山2人で食べれるんですか？」

「今日は特別な日しょ、あまる位が丁度いいしょねえ」

（最終レッスンだから、確かに特別かなあ・・・）

「デザートもこの後、あるっしょ」

「えっ、この他にデザートも食べるんですか?!」

「ツベコベイを言わずに、食べて楽しむしょ」

「はっはいつ会長、最終レッスン頑張らせていただきます!-!」

「だから、そんなに気合を入れなくてもイイしょ」

- - -
- - -
- - -

中華街付近のラブホテル

「ビジネスホテルにすればよかったね」

「うううん、近くなかったんだし　しかたないよ」

雨の強さもあり、急遽入ったホテルはラブホテル【ランラン】
入った部屋には、鏡張りの壁や太ぶりの丸いベット
枕の上にある棚には避妊具が用意されている。

「めぐるちゃん　やっぱっ、出ようかつ」

「ううんっ、着替えるだけなんだし大丈夫だよ」

めぐるちゃんは、そう言うが

僕は全然大丈夫ではなさそうだ。

思考とは裏腹に、体が反応してしまっている。

僕は、昨晚聞いた正徳の初体験を恨んだ。

「じゃ、シャワー浴びてから着替えた方がらいいよね」

「そっ そうだね」

2人の会話はギコチナイ

ましてや、言った言葉がイヤラシク感じてしまう始末。

そんなんだから、めぐるちゃんが

シャワールームに入ると、手持ち無沙汰になってしまう。

（何か変な状態になってしまったなあ〜でも

もしかして、このパターンって初体験パターンってことなのか？）

そう心で思いながらベットに大の字に寝そべると

何処に触れたのか、大ぶりの丸型ベットが動き出した。

【グイイイン】「おおおっ!」

言葉を発したのはイイが、状況がワカラナイ！！

（ベツベツが回転するって・・・意味があるのか？）

そんな意味不明の状態で

元氣ビンビンの自分のムスコが

何とか落ち着いて欲しいと思う拓都だったのだが

シャワールームから出てきた、めぐるちゃんの姿は
バスタオル一枚の露わな姿だった。

「えええええっ！！めぐるちゃん、ふっ服はあ？」

僕は

どっかに行きそうになる思考を保ちつつ、めぐるちゃんに問いかける。

「だつてえ拓都さん」

「なっなんですかあ」

「拓都さんの買ってきた服、小さくて着れないんですものお」

「えっ小さかったってえ・・・?!」

「たっ拓都さあああああん」

そう言つと、ベットに横たわっていた僕の上に
めぐるちゃんのしかかつて来る。

「えっ うわあゝ」

僕の上に馬乗りになると

体に巻いていたバスタオルが肌蹴て

めぐるちゃんの胸が露わになってしまふ。

「デッ デカ!!」

思ったよりも成長している、めぐるちゃんの胸から
正面を向き直すとめぐるちゃんの顔が目の前にあった。

「入院してた時から決めてたんだよお」

「なっ何を決めていたんでしょうか？」

驚いて言葉をかえすと

めぐるちゃんは真剣な眼差しで僕を見つめながら喋る。

「最初の方は拓都さんだつて・・・」

「さつ最初の人・・・・・・・・・・」

「大好き拓都さん！！」

めぐるちゃんはそう言つと僕の唇にキスをする
小さな柔らかい唇の感触は、僕の理性を奪い去り
秘めていた野生の本能を目覚めされる。

「めぐるちゃん」

僕はめぐるちゃんを抱き寄せ、再びキスをかえした。

ラブソング17

横浜グランデユーナ国際ホテル
最上階のスイートルーム

「水上会長、もう食べられません」

「ボキもお腹いっぱいしょね」

「この後にデザートなんて、食べれないですよ」

「まあ、そんな焦ることはないしょ」

そう言つて鈴原にコーヒーを渡し、自分には赤ワインを注ぐ
「ありがとございます」そう言つて、カップを口に運ぶ

「ワインの方がよかつたかな」

「いえっ未青年ですので」

あどけない表情でかえす鈴原の回答を聞いて
微笑みを浮かべながら話をつづける。

「鈴原くんは、お父さんを探しているそうだね」

「ハイ、物心ついてから会ってないので会いたいと思ってます。」

「うむ、契約の時にも社長の里香にも話したそうだね」

「ええっ、コンテストの志望動機がそうでしたので・・・」

「その時に、お父さんに会えるなら何でもすると言ったそうじゃないか？」

「ええ、多分そんな風に言っただかと思います。」

「わかったしよ、ボキがお父さんを探してあげるっしょ」

「ホントですか会長、ありがとうございます!!」

「その代わりに、デザートを食べるしょ」

「その代わりにデザートを食べるんですか???」

「そうデザートを食べるしょ」

「さすがにお腹キツイですけど、デザート食べて探してもらえなら何とか食べきりますー!」

「なら、これで契約成立しょ」

「ありがとうございますー!ー!ー!」

「では早速食するしよね」

水上会長は、そう言つと鈴原を椅子から抱え上げベットルムへ向かう。

「ちよっちよっちよつと会長おー!ー!何するんですかあー!」

「何をするもなにも、デザートはキミしよねえ」

「デザートがワタシ???」 「冗談はやめてくださいー!」

ジタバタと暴れる鈴原をベッドの上に放り投げると
ギシギシとスプリングの軋む音がする。

会長の水上は上着を脱いでネクタイを外し、ワイシャツのボタンを
外しながら
鈴原の方へ

「さっきの話・・・お父さんを探す件は自分で探すから結構です！
！」

「鈴原くん、芸能界の契約にクーリングオフなんてないしょねえ」

「ちょっとお やっやめてくださいっ！！」
逃げようとする鈴原の腕を掴み、ベッドの上に無理やり押さえ込む

「大声出すわよお！！」

「何を今更拒むのだ、お父さんを探すためなら何でもすると誓った
のだろう？」

「それとこれとは話は別です！！」

そう言っただけを捻り、会長の手を払おうとするが
会長に体重をかけられ再度ベット倒されてしまう。

しかも今度は鈴原の上に馬乗りだ。

「こらこらっあまり動くと肌に傷がついてしまっしょ」

「たったすけてえ！」

「無駄な事はやめるしょ」

「だれかああー！！」

「大声出しても誰も来ないしょ、もちろん扉もボキがフロントに連絡しないと開錠されないしょね」

会長はベットサイドに置いてあるペーパーナイフを手に取り
鈴原の顔の前に突き出した。

「ジタバタしたら殺すってこと？」

「そんな下品なことはいらないしょね」

そう言うと、鈴原のシャツを腹部からナイフを入れていく

「動くと肌に傷がついちゃうしょ」

「お願い・・・やめて」

シャツが下腹部側から切り裂かれ
とうとう胸まで到達

「ムヒヒッ ボキが一番楽しみにしていたところっしょ」

そう言っ

てブラを中央から切り裂くと鈴原の胸がフワリと揺れ
桜色の乳首が会長の目の前に現れる。

「これは見事しょ、想像以上のボジイしょねえ」

（何でこうなるのよぉ・・・こんなの絶対嫌・・・どうすれば・・・）

「わかったわ・・・これ以上無理やりはやめて・・・」

「うむ・・・」

「抵抗しても無駄って判ったわ・・・だから乱暴はやめて！」

「さすがボキが見込んだ娘しょねえ、利口な対応しょ」

「その代わりシャワーを浴びさせて」

「ボキはこのままデザートをいただく方が好きっしょ」

「デザートを静かに食べたいのなら、シャワーは浴びさせるべきでしょ会長」

「・・・わかったしょ、ボキもそこまでワガママじゃないしょね」

「ありがとうございます・・・。」

鈴原はそう言うとベットルームからリビングを通りバスルームに向かう。

【シュボッ】

それを見届けると水上は葉巻に火を着けた。

【ふうーーー】

「デザートは焦らされた方が更に美味さを増すしよね」

ラブソング18

エムベックス スタジオA

『ハイ、ワン・ツー・サン・シ、ワン・ツー・サン・シ、くねくね
ダンスでパンパンパン』

『来てるわ来てるわ、今日の未来ちゃんキマクッテルわよお』

『ハイ、ワン・ツー・サン・シ、ワン・ツー・サン・シ、くねくね
ダンスでパンパンパン』

（何なのあのバカ新人っ！！）

【最近のハマミクさんの歌・・・聴いてて心が苦しくなります】
（私の歌が苦しいですってえ）

【歌に華やかさや完璧を求めても無意味だってことです】
（プロだから華やかで完璧で当たり前じゃないのよお！！）

【ハマミクさんだって、本当は自分で気づいているんじゃないです
か？】

（なんで、なんでよお、なんでバカ新人に私の事ワカルのよお！！
！！）

『はいっストップ・ストオープ！！ ダンスのレッスンはここまでよ。次は歌合わせね』

「この後は休ませてください……」

『休む？ ツアーまで時間がないのよお未来ちゃん』

「疲れたわ……少し考えたい事もあるし……」

『うーんっ、そうねえ 今日頑張ってたし歌姫にも休みが必要かしらね』

「すいませんダバさん……」

そう言つてスタジオを出る浜田未来

（何で何でよ、私がバカ新人の言ったことが気になってんのよお！）

「あら未来ちゃん、今日はもうあがりなのお？」

スタジオBから出てきた世界のガモウが未来に声をかける。

「ウルサイ、もう関係ないでしょ!!」

「ちょっと未来ちゃん、顔色悪いわよっ」

「だから ほっといてちょうだいっ（怒）」

「はいはい、言われなくてもほっときます」

（イライラビーム出まくりね未来ちゃん、月のものきたのかしら）
「イライラ未来ちゃん相手にしないで、ワターシは長谷川誘つてと呑みにいきますかね」

.....
.....
.....

森田プロ事務所

病院から事務所に戻った長谷川修が森田社長と打ち合わせ中

「韓国のタレントとは契約は上手く行っただんですか？」

「ん？ あ？ うん、韓国？」

「はい、韓国の契約・・・って社長どうしたんですか？」

「あゝ長谷川君、エムベックスと契約した鈴原藍の話なんだがね」

「鈴原さんの件は獲得出来なくてすいませんでした。」

「いや、まあ、獲得もして欲しかったのは確かなんだが・・・あの・それがだな・・・」

「藤原ちゃんがチョット勘違いしてしまって」

「私の娘なんだ・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「へっ」

「私の娘なんだよ 鈴原藍は」

「社長のムスメ」

「よりによってエムベックスと契約だなんて・・・ホント参った」

「それってホントなんですか?！」

「長谷川君に嘘を話してどうする」

「そうですね・・・でもビックリです」

【ブイイン・ブイイン】
すると長谷川の携帯電話が震える。

世界のガモウからの着信

「丁度イイタイミング」
そう言って電話に出る長谷川

「もしもし」

「あたしいよんオサム」

「丁度良かった、話したいことがあったんだ」

「やっぱりいゝでも電話じゃ何なんで呑みに行きましょうよお」

「鈴原くんの事なんだが」

「あらっ 鈴原さんなら、先ほど最終レッスンに向かったわ」

「最終レッスン？」

「ええっ 水上会長と顔合わせとかって社長が言ってたわねえ」

「かつかつ顔合わせえって、本当にそう言ってたのか?！」

「何よ大きな声出してえ ワターシがオサムに嘘言ったことあるう?」

【ピッ】

「もしもし、もしもしオサム? えっ 通話切った?」

「森田社長お大変です」

「どうした」

「社長の娘さんが、水上会長とかつかつ……」

「水上会長と かつ？」

「かつ顔合わせに向かったと……」

「顔合わせ？ 顔合わせって、長谷川くんが星野くんを水上会長から奪った件と同じって事か？」

「はいっ同じって事です……」

「ぬぬぬぬぬぬぬぬ……」

「社長……」

「私の娘が、あの水上とだなんて……許されるワケないだろうー！ー」

「社長お冷静になって下さい!!」

「冷静になんてなれるかああバカモン!!」

「でも、早く手を打たないと現実に そうなってしまうですよ。」

「ぐう・・・そうだった・・・」

「社長、マズはエムベックスに連絡しないと」

「そうそうだった、連絡だ!!」

エムベックスに電話をかける森田

「森田プロの森田だが、至急 会長に連絡をとってくれ」

「会長は明日まで、連絡はとれないと聞いております。」

「あつ明日まで連絡がとれないだとお!!」

「はい、現在は会長の携帯電話も連絡がとれませんのでご連絡は無

理かと・・・」

「くっ、なら社長でいい、社長を出してくれ!!」

「申し訳ございませんが社長は来客中でございます。」

「緊急なんで繋いでくれ」

「はぁーこちら手も手が離せることが出来ない状態でしてえ」

「こちらは超おお緊急事態なんだ、社長を出さないのなら今からそこに行ってお前を殺すぞお」

「こっ殺すと言われましても・・・社長と来客の方が言い争ってまして・・・どうにもならないのです。」

【ピッ】

「くっ時間がない、長谷川くんエムベックスに直接向かうぞお!!」

ラブソング19

横浜グランデューナ国際ホテル

最上階スウィート・シャワールーム内

鈴原藍

シャワーのノブを回し

バスタブにお湯を向けて出しっぱなしにすると

バスルームに入る前に鞆から抜き取った携帯電話を開く

（よかった・・・何とかアンテナたってるわね・・・）

アドレスから選び出した相手は川崎拓都

（お願いだから電話に出て頂戴、拓ちゃん・・・）

.....

中華街近くのラブホテル【ランラン】

「めっめぐるちゃん俺っ俺さあ」

「拓都さん・・・・・・・・・・」

「俺もめぐるちゃんの事・・・」

【ピッポロピッポロピッポロビッピー】

突然、拓都の携帯から札幌一番の着メロが鳴り出す！！

僕は言いかけた言葉を飲み込み

着メロの鳴っている携帯電話のある場所を見つめた。

「出ないで・・・・・・」

そう言っためぐるちゃんの顔を見ると

真剣な眼差しで僕の目を見つめる顔がある。

僕が携帯電話に出るか躊躇していると

携帯電話は自動的に留守番電話にかわった。

自動で応対する留守番メッセージが

微かに、そして無機質な機会音声で流れているのがわかる。

僕は、携帯電話には出ないよ　と言葉で言う代わりに
めぐるちゃんを抱きしめる。

抱き返してくるめぐるちゃんは
耳元でありがとう と静かに呟いた。

留守番電話のメッセージ応答が終わり
一瞬部屋に静けさが漂うと
僕らは見つめあい軽くキスを交わした。

もう電話が来ても出ないよ と暗黙の約束にも思えるキスだった。

すると、暫しの沈黙をやぶる様に
また着メロが鳴り出す。

ドキつとした表情で僕を見るめぐるちゃん

僕は瞳を見ながら、大丈夫という意味で相槌をかえす。

鳴りっぱなしの着メロは止み
また微かに留守番メッセージの音が聞こえる。

「また鳴っちゃうとウルサイから電源切るよ」
僕はそう言って携帯電話に手を伸ばす。

めぐるちゃんは全裸のまま
僕の胸に顔を埋めている。

二つ折りの携帯を開き、電源を切ろうとすると
3度目の着メロが鳴り出した。

慌てて電源を切ろうとすると
液晶画面に表示された名前は【鈴原藍】

僕は電源OFFボタンではなく
通話ボタンを押してしまった。

「拓都おっ助けてえ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

僕は状況的に言葉を発する事が出来なかった。

「拓都・・・ねえ拓都なんですよ？」

鈴原の声は何時もと違っていた。

2度、留守電になってもまたかけて来た事で

普通の状態じゃないことは推測出来てしまう。

「ねええ、どうして答えてくれないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕の胸元では

電話にでてしまった僕を不安そうな面持ちで見つめるめぐるちゃん
居る。

「このままじゃ私・・・エムベックスの会長に・・・体を・・・お
願い助けて・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕の前で泣いた事の無い鈴原が泣いていた。

「・・・・・・・・一生守るって・・・一生守るって言うたくせに・・・拓都の
バカ・・・」

「それって幼稚園の時言った言葉だろ・・・」
僕は鈴原に答えていた。

「訂正してないんだから、今も有効……」

「有効か……ならしかたない、何処にいるんだ」

すると

鈴原は簡潔に経緯を話し場所を話す。

「わかったっ直ぐ行くから時間かせげよっ!!」

僕は携帯をきり、即効で服を着る。

「拓都さん!!」

部屋を出ようとする僕の後ろから吉田さんの声

「拓都さん行かないで!!」

「ごめん……めぐるちゃん」

僕はめぐるちゃんの方を振り向くことが出来なかった。

ラブソング20

エムベックス1F受付フロアに森田社長と長谷川修

「いいから社長を呼べって言ってんだろー!!」

「ですから先客と　まだお話が……」

「そんな待つてる様な時間はないんだっ!」

「社長おミーティングルーム8番にいます。」

長谷川は受付のPCを勝手に操作して社長の居場所を確認

「東側の階段が一番早く行けます」

長谷川の指示で森田は駆け出す。

同じタイミングで受付横の詰め所から警備員が出ようと扉が開く。
その扉に長谷川がタツクル

大きな音をたてて開けかけた扉は再度閉じ
詰め所の中からドカドカと人がひっくり返る音がする。

「社長お早く行ってえ!!」

森田が階段を上がると幾つもの部屋が並ぶ
突き当たりにミーティングルーム8番があった。

ダッシュで近づくと部屋から聞き覚えのある声が2つ

水上里香と鈴原碧^{みどり}だ

【バタン】

「碧っここで何してるんだ!!」

「あんたこそっ、ここにデートしにでも来たのかしら!!」

「森田さんとワタクシがデートですってえ?!」

「いやっ違うつ、今こんな話してる場合じゃないんだっ!!」

「こんな話って失礼ね!! 藍をこんなワケワカラナイ会社にいれちやってえ!!」

「ワケワカラナイ会社だなんて失礼ですわっ!!」

「何が失礼ですってえ、このおかしな面子があ」

「おかち面子って何言っちゃってるのかしら、このネイチャーババア」

「うるさい!!」

「!!」

「私の娘が、君のお父さんに貞操を奪われようとしてるんだぞお!!」

「なっ なっ なっ 何ですってえええええ!!!!!!」

「えっ 鈴原藍さんって、森田様のお嬢さん???」

「森田の娘じゃなくて、私の娘よっ!!」

「この際、どっちの娘でもイイ!! 会長を止めてくれえ!!」

「わっわっワカリマシタわっ!! ではこちらに急いで・・・」

そつ言うと水上里香は社長室に向かう

社長室に入ると早速金庫に手をかけ 開錠

中から取り出したのはゴールドメッキされた携帯電話

「緊急時には絶対連絡とれる携帯電話ですよ」

早速発信ボタンを押すと、間髪入れずに社長デスクの方から着信メロディ

「どういふことだ？」

森田が水上里香に確認する

デスクを空けてメロディの鳴っているシルバーメツキの携帯電話を
2人に見せながら

「緊急用の携帯電話を持っていたようです……」

「持っていかなかったって、そしたらどうなるのよウチの娘は」

「マサカ、連絡の手段が無いなんて言うんじゃないだろうな？」

「ええっ連絡の手段はなくなりました。」

「なんだとう……! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !」

「会長の居るのはホテルなんだろう!!フロントに連絡して止めるように伝える!!」

「そうよっその手があつたわ、さすが毅」

「駄目ですよっ、3時間は絶対連絡シャットアウトですので・・・」

「何言つてのよ、あなたが意地悪してるだけなんですよ」

「頼む、このとおりだ!! 止めてくれ!!」
土下座して願い出る森田

それを見て鈴原碧も土下座して願い出る。

「意地悪してるワケじゃないですよ・・・本当に連絡とれませんの」
本当に困った表情で水上里香が答える。

「頼む!! 一生のお願いだ」

「私からも一生のお願い!!」

その様子を見て水上里香はデスクから電話をかける。

『屋上から至急へり発進準備』

「間に合わないかもしれませんが、車や電車よりも早いかと・・・」
硬い表情のまま、3人は屋上に向かった。

.....
.....
.....

ラブホテル ランランを飛び出した僕は

鈴原から聞いた横浜グランデューナ国際ホテルに向かっていた。

中華街の南門を出て、幾つかの交差点を抜ければホテルが見える距離だった。

吉田さんと僕をずぶ濡れにした雨は小雨に変わっていたが遠くの方で雷鳴が聞こえている。

中華街の混雑をフットワークで避けながらの全力疾走

（大丈夫、フットワークも体力も戻っている）

僕は自分に言い聞かせるように心で念じる

「絶対に間に合わせてやる、待ってる鈴原あ！！」

交差点が赤に変わったばかりでも死ぬ気で走り抜けた。

サッカーの練習でも経験したことの無いほど長い時間の全力疾走どの位時間が経過したのだろうか？

とにかく僕は、目的の横浜グランデューナ国際ホテルに到着した。

そして

迷わずフロントに緊急事態だと伝える。

「スイートルームに居る鈴原が助けを呼んでいるんだ！！」

「その様なお客様は当ホテルにはご滞在しておりません。」

「なら、エムベックスの会長がスイートルームにいるんだろう？
！」

「そちらのお客様も当ホテルにはご滞在しておりません。」

「そんなワケ無いだろう、今さっき僕の携帯電話に連絡があったんだぞお」

その場で携帯電話を開き、鈴原に電話をかける
フロントの男を信じさせる為だ。

しかし、雨で濡れた携帯電話はビクリとも反応しない。

「どうですか？ 助けを呼んだ人とは連絡がとれましたか？」

「くそっ本当にこのホテルに居るのは間違いないんだ！！」

「先ほども言いましたが、このホテルにはその様な方々は滞在しておりません！！」

僕はフロントの男が喋っているのを無視してエレベーターに駆け込むが

待機していたかのように、体格のいい男が2人
僕の方に走りこんで来る。

僕は最上階のボタンと閉じるボタンを連打するがエレベーターが閉まる前に男の手が扉を開く。

「坊ちゃん、勝手にエレベーターに乗り込んだじゃ他のお客さんに迷惑になっちゃうよ」

そう言うと

もう一人の男が僕の腕を掴もうと手を伸ばしてくが僕は、それをかわし続ける。

体力・筋力共に完全に回復している様だ。そうこうしている間に

エレベーターの扉は閉まり最上階へと動き出した。

「チヨロチヨロとすばしっこい坊ちゃんだ」

フットワークとフェイントでかわし続けるが、狭いエレベーターでは捕まえらるのに時間はかからなかった。

「無駄な抵抗はやめるんだな」

「うるさい!!」

僕は、つかまれた腕と反対の腕でパンチを繰り出すが体格のイイ男は、簡単に手で受け止めてしまう。

更に

受け止めた大きな手で、僕の拳を握り潰しにかかる

「ぐうう痛っーーーーー」

「ほらほら、静かにしてれば痛い目に会わずにすんだのに」

【チンッ】

停止音が響き、エレベーターは最上階に停止し扉が開く

一瞬

大柄の男たちは、扉が開いたことに気を取られたようだった。

その隙をみて

僕は潰された右手を押さえつつ、エレベーターの外に飛び出す

がしかし、男の一人に腰の辺りを捕まれ
再びエレベーター内に

【ドカッ】

「勝手に動かれちゃ困るんだよお」

完全に体を掴まれ身動き不能に

そして無常にもエレベーターの扉は閉じてしまう。

「鈴原ああ！！　鈴原ああああー！！」

「煩い坊ちゃんだなあ」

【ズドオ、ドゴオ、ボゴオオ】

そう言つて、大柄の男2人は僕をボコボコに殴りかかる
1Fに到着前に僕は気を失っていた。

ラブソング21

エムベックス本社ビル屋上に3人が到着すると
ヘリのプロペラ音が轟いている。

早速、社長の水上里香がパイロットに近づき
何かを話をするが、パイロットは首を横に振るばかり

「急いで離陸、そして横浜グランデューナ国際ホテルまで最速で飛ぶのよ!!」

「いくら社長の命令であっても、この悪天候じゃ死に行く様なものです。」

「貴方の操縦技術をかって雇ったのよ、何とかしなさい!!」

「操縦技術とかの問題じゃないんですよ、この風の強さではここからの離陸も出来ません」

「キイイイー何とかならないのお!!」

「運良くここを離陸出来ても、神奈川上空に巨大な積乱雲と雷雲が点在しております・・・」

「くっ・・・八方塞か・・・」もの凄い形相の森田毅

「もっ森田様・・・何とか離陸させますので・・・」

「もういい・・・」

「・・・毅・・・」

「碧、今の私らでは打つ手が無い・・・最短の公共機関で行こう」

「でも・・・藍はどうなるの？」

「・・・。。。。。。」

森田毅と鈴原碧は黙ったままエレベーターに戻る。

「本当に申し訳ございません。」

後姿の2人に頭を下げた水上里香は、何かを思い出した様に携帯電話をかける。

「エムベックスの水上よつ、フロントの伊藤支配人を出して頂戴」

かけ先は横浜グランデューナ国際ホテル

「はい、伊藤です」

「ご無沙汰です、伊藤支配人」

「大至急、会長と繋いでほしいのです」

「それは無理です、お嬢様」

「無理ってどう言う事、お父様はそこに居るのですよ？」

「いくらお嬢様の頼みであっても、水上会長は裏切れません」

「ワタクシの一生のお願いであつても無理なのね?!」

「・・・3度も会長に助けていただいた身分の私が、裏切ることなど到底できません」

「あの優しかった伊藤さんは、どこにいったの・・・お願い!!」

「・・・。。。」

【ツーツーツー】

（あちらから通話を切るなんて・・・）

改めて父水上健一の力の大きさを知った瞬間だった。

「初めからワタクシが止めるべきだったのね・・・」

一人 立ち竦む水上里香

エムベックスのヘリポートに大粒の雨が降り出していた。

.....
.....
.....

【ドサッ】

横浜グランデユーナ国際ホテル裏口から路地裏に放り投げられた拓都
そのショックで意識が戻る。

481

「くつつうー、グフッ」体中の痛みで声にならない。

【ビカッ ゴロゴロゴロオ】

降っている雨は激しさを増し、近くで雷鳴が轟いている。

「ぼっ・・・僕は・・・鈴原を一生守るって約束・・・したのに・・・」

【ゴロ ゴオゴオオ】

「なのに・・・あいつに・・・会つことすら・・・できなかった・・・」

【ゴロゴロゴオ】

「・・・僕は・・・何やってんだあ・・・」
【ビカッ　ゴォゴォォ】

「ちくしょお！！　ケホッ」

僕はそう叫ぶと、血へどを吐いてまた気を失った。

その様子を見覚えのある男が見守っていた。

「予想的ですね」

「ワシの勘にハズレなしじゃ」

拓都をマークしていたスツポンの梨木と助手の大柳。

「この少年の写真を何枚か撮っておけ」

「わかりました。」

「カメラを濡らすなよ、ワシは裏口から最上階に忍び込む」

「あっあー梨木さん、写真撮ったらこの少年はどうします？」

「そのままじゃ不味いだろなあ、とりあえず病院に連れて行け」

「わたし一人ですか？」

「当たり前だ！！」

そう言つてホテルの裏口の扉を開けようと梨木が手を伸ばすと携帯電話が震える。

（くっ邪魔するなってんのお）

「はいっ梨木だ」

『梨木隆弘様の携帯電話でよろしいですか？』

「ああっワシは梨木だが、どなたかな？」

『神谷医院の者です・・・・・・・・・・』

「かつ神谷医院からとは驚きだなっ」

『驚きと言つよりは、願つてもないなんて思つてらっしゃるのでは』

「ふふふっ、そりゃ星野愛が居るかもしれない場所だしね」

『そしてアイドルブロッガー・ゴットシンの根城だからかしら・・・・』

「そちらからカミングアウトとは、説明の手間が省けるねえ・・・
って事はワシに特別な話ってことなのかな？」

『さすが察しが早いわね、今すぐあなた一人で神谷医院に来て下さ
るかしら』

「今すぐか?!」

『ええつ、今すぐです。』

「うーん、こちらもスクープの取材中なんだがなあ」

『無理にとは言いません、今すぐでなければ この話は無しと言う
ことで』

(こちらのネタもあちらのネタも星野愛カラミのネタって事かあ・・・)

「わかった、今すぐ行くよ」

スッポンの梨木は、助手の大柳に後を任せて神谷医院に向かう。

.....
.....
.....

横浜グランデューナ国際ホテル

「もう体はピカピカになったしよ、そろそろ出てくるしよね」

幾ら待ってもバスルームから出てこない鈴原藍にシビレを切らし会長の水上はベットルームから出てきて声をかける。

「あつはいっ今、行きますのでもう少し待っていてください。」

「またそれしよ、もう少し待っていてくださいは聞き飽きたしよ」

【ガチャ】

水上が強引にバスルームの扉を開ける。

「キャッー!!」

「イイしよイイしよ、その恥じらいの声、タマラナイしよねえ」

「もう少し、もう少しだけ待って下さいー!!」

「ウェイティングタイムは終わりしよ」

「・・・・・・・・・・。」

「そして右手にある携帯電話の電源も切るしよね」

何もかも見透かしているんだぞという表情の会長
いやらしい笑みをつくり、指でベットルームを指差す。

鈴原は持っていた携帯電話をパウダールームの前に置き
バスローブの帯を巻きなおす。

（早く来て・・拓ちゃん・・お願い！！）

心で念じながら髪の毛をアップに束ねる。

「おおっこれまたイイしょねえ、仕草にも色香があるしょ。」

一連の動作を食い入るように観察していた会長から言葉が漏れる。

「今宵のデザートは史上最高の物になるしょ。」

数分後、2人は静かにベットルームに向かった。

ラブソング22

神谷医院 スッポンの梨木と婦長

「本当に本人なのか……………」

「はい亡くなってから、さほど時間は経っておりません」

「何故、ワシに最初に知らせる」

「星野さんの意思だからです」

「意味がわからん、最初に知らせるならマネージャーの長谷川が両親だろフツウ」

「そうですね、でも星野さんがそうして欲しいと言っておられましたので」

「ワシに自分が死んだ事を知らせて、どうなるか判って言ってるのか???」

「梨木様宛てのお手紙もお預かりしております。」

「手紙だとお．．．．．」

婦長から手紙を受け取り開封
暫し手紙を読み、黙り込む梨木

「うん．．．」

「．．．．．」

「ワシを芸能リポーターと知っての手紙とは思えん内容だ．．．」

「どうされますか？ 星野さんは全て梨木様に任せるとおっしゃってました」

「ぐうう．．．」

「写真を撮るのなら早く済ましてください、そろそろ森田プロに連絡しなければならぬので」

「いやっ写真は止めとく、と言うか取材はなしだ・・・星野くんの場合は聞かなかったことにする」

「本当によろしいんですね、電話した後では後戻りはできません。」

「ワシも男だ、二言はない!!」

「わかりました、それではこれを持って帰ってください」
婦長はそう言つて梨木にA4の茶封筒を渡す。

「何じゃこりゃ」

「梨木様が取材を断つた場合にに渡してくれと」

「手ぶらでは帰せないってことかあ わっははは、こりゃ参った！
！ 死んだ後までワシをオチヨクツテおるわ」

梨木が受け取つた茶封筒の中にプラスチックケースとカードが1枚
カードには『よろしくね』と言、そしてキスマーク

「星野愛・・・ワシよりも何枚も上手だったわい」

そう呟いて梨木は、苦笑いしながら神谷医院を後にする。

玄関入り口で見送った婦長のところに
息子であるゴットシン

「マーマっ、本当によかったん梨木に渡しちゃって」

「イイのよ、全ては星野さんの決めたこと」

「でも、マーマ」

「でもないわ、今から医者を務めとしてやらなければならない
ことが沢山あるんだから」

「医者を務めって、星野殿は本当は生きていますかっちょ?!」

「慎也っシツカリシナサイ!! 嘘ついてるかどうか貴方も医者の
息子ならワカルでしょ」

「.....」

「しょぼくれた顔してないで、あなたも手伝いなさい星野さんに失礼ですよ」

「・・・わかったでゴザル」

.....
.....
.....

翌日、僕は横浜中央病院で目が覚めた。

「男の勲章だな」

迎えに来た父は事情も聞かずに笑って
そう言ってくれたが

今の僕には慰めの言葉は逆に嫌味になる。

鈴原を助けられずに、男の勲章はないだろ・・・

医局で手続きを済まし、家に帰る為にJRに乗る
萎えた面持ちで乗り込んだ車内に目をやると
中吊りのポスターが全て同じなのに気がついた。

【史上最強のスマイルガール 鈴原 藍】

「えっ」

改めて外の景色を見ると
ホームの外にある大型のポップやファッションビルの垂れ幕も鈴原で
埋め尽くされていた。

「ああ・・・やっぱり夢じゃなかったんだ・・・」

この瞬間、鈴原をエムベックスの会長から救うことが出来なかった
事が
現実だったんだと思い知らされる。

（・・・一晩でここまで出来るなんて・・・結局、僕は何にもでき
なかった）

僕の目の前では、中吊りポスターの鈴原がとびきりの笑顔で笑って
いた。

（そんな顔で僕を見るなよ・・・）

耐え切れなくなって、僕は窓辺に目線をおとす
外の流れる景色は
次第に涙で見えなくなっていた。

ラブソング23

数日後のTV番組【最新ミュージックなう!!】

早くもダウンロードランキング2位に登場した鈴原藍と
1位を不動のものにしている浜田未来が登場
インタビュー形式で番組が進行していた。

「今回は、キラコン（キラリン美少女コンテスト）より合格者4人
がでた異例の年でしたが、浜田さんはどう思われましたか？」
グループ

「初めははビックリしましたし、正直キラコンはもう終わったって
感じました。」

「そうですか、キラコン出身の浜田さんは審査員全員からの支持を
受けての合格者でしたから尚更ですよね」

「ええ、でも私の居るプロダクションに鈴原さんが来て、その考え
方が変わりましたけど・・・」

「変わったといえますと？」

「鈴原さんが居る前で話すのは恥ずかしいのですが、魅力的な女性なんですよ鈴原さんは」

「やめてくださいよハマミク（浜田未来）さん」

「いいじゃない本当にそう思ってるんだから」

「浜田さんから鈴原さんが魅力的と言う話がでしたが、鈴原さんから見た浜田未来さんの印象はどうですか？」

「素敵な女性です。尊敬してますし私の目標です。」

「最近、浜田さんの歌う雰囲気は初期の頃の歌い方にもどった気がします、そこらへんはどうですかね？」

「今の歌いかたの方が好きです、初期のハマミクさんのナチュラル感が特に好きなので」

「当たり前よ、だって鈴原さんのアドバイスですもの」

「えええ？ 浜田さんが新人のアドバイスを取り入れたりするんで

すか？」

「あらいイと思ったら新人も先輩も無いと思いませんか？」

「たっ確かにそうですが、独創的なスタイルで活動してきた浜田さんからは想像つかない展開です」

「あら、それって失礼な発言じゃないかしら」

「いやいや、そう言うワケでは……」

「フフフッ」

「想像もつかなかったと言えば、鈴原さん」

「はい」

「史上最強のスマイルガールとして正式デビューされたと思うんですが」

「はい」

「巷では鈴原さんが笑わないって噂がひろがってます。これは本当なんですか？」

「・・・・・・・・。」

「プロダクションの戦略とか」

「・・・・・・・・。」

「言えない理由とかあるんですか」

「そんなに、畳み込む様に質問しなくてもいいんじゃないのかしら」

「いや、そんなつもりでは」

「鈴原さん、いい機会だから話してあげたらいいんじゃない？」

「ええ・・・・でも・・・・」

「あなたが話さないのなら、私が話しちゃうわよ」

「浜田さんも理由をご存知なんですか」

「ふふっ全部は教えてあげないわよ、つまんなくなるから」

「つまんなくなる?」

「鈴原さんのスマイル封印は・・・願掛けよぉ」

「願掛けって、願いが叶うまで何かを断つとかってことですか?」

「そうね」

「その願いとは何なんですか?」

「教えるわけじゃないじゃない、ねえ鈴原さん」

「・・・。」

「もしかして、お父さんに会えるまでの願掛け　とかですか?」

「いえ父の件ではありません、父には先日会うことが出来ましたので」

「えー！！ 芸能界に入った理由はお父さんに会う為だったのでは？」

「鈴原さんのお父様なんて直ぐ見つかったわよ」

「そうだったんですか？」

「だって、森田プロの社長だったんですもの」

「ええええー！！」

「話しちゃ駄目ですよっハマミクさん！！」

「あらいじゃない、どうせ直ぐバレるわよ」

「でも・・・」

「スッポンの梨木だって言ってたじゃないの、直ぐにバレるってえ」

「スツポンの梨木って芸能リポーターのですか??」

「あれっ、これ秘密だったっけえ

まっイイか、今度の『夜のカウンtdownスタジオ』で全てわかるしね」

「ハマミクさん!!それも言っちゃだめですよ」

「今度の夜のカウンtdownスタジオで全てがワカルんですか?」

「もう喋れないわ」

「もうハマミクさんたら」

「ここからもつと踏み込んだ話と行きたい所ですが、放送時間イッパイと言っことでここまでです。」

「同じ8チャンネルの夜のカウンtdownスタジオをお楽しみに
!!!」

ラブソング24

【川崎拓人の自宅】

「拓ちゃん!! 拓ちゃん!! 正徳くんが来てるわよ」

「帰ってくれって言って」

「帰ってって言っても、今日で3日連続でしょ」

「いいから帰ってもらってえ」

【ガチャ】

「うわああ」

「何が うわあ だよっ、何時まで学校休む気だ」

「勝手に入ってくんなよお」

「一週間も理由無しで学校休んだら、心配するだろうよお」

「心配したからって、部屋に入るかフツウ」

「お前がフツウじゃないんだから俺だってフツウじゃないよ」

「正徳は初めからフツウじゃないもんなっ」

「ああっだからフツウじゃなかったのにフツウじゃなくなったらフツウなんだよ!!」

「何だそれっ」

「プツ」

「クツクククツ」

「バーカ」

「うるせえ バーカ」

「・・・・・・・・。」

「何かあったのか？」

「ん・・・まあ・・・」

「鈴原か・・・・・・・・」

「そんなトコ・・・」

「やっぱりなっ」

「なんだよっやっぱりってえ」

「最近のテレビ番組は鈴原だらけだ」

「だからって何だよ」

「あいつ全然笑ってなくてさ、作り笑いの一つもしないんだ」

「嘘だろっ？ 史上最強のスマイルガールなんだろ アイツ」

「ああっマスコミの格好のネタになってるよ」

（・・・・・・・・・・・・・・・・・鈴原。）

「ただ一人肯定的な意見を言ってるのが、意外なことにスッポンの梨木だけ」

「スッポンの梨木だけ?!」

「ああっ、ゴットにその話を聞いたんだけど 【今にワカルでゴザル】 って内容までは教えてくれないんだ」

「ゴットシンは何でもお見通しかぁ」

「鈴原に会いに行くか？」

「えっ 鈴原んとこに・・・」

「喧嘩してんだっいたら会って話すが一番だろ」

「うん・・・そんなんじゃ無いんだ」

「お前が原因じゃないのか？ だったら鈴原だって誤れば、【何の話だっけえ】なんて言って許してくれるよ」

「誤って済む様なことじゃないんだよ正徳」

「・・・そっか」

「うん」

「そっだ！！星野さんは実家に帰ったって、ゴットが拓都に伝えてくれて」

「希望通り芸能界引退できたってことか・・・」

「もったいないよなっ引退なんて」

「イイじゃん、本人の希望なんだし」

「引退するんだったら生で【ラブソング】聴きたかったな」

「？」

「お前がギター弾いて星野さんが歌うところ見たかったよ」

「はっ？ 僕のギターで星野さんが一緒に歌う???」

「なんだよ、本人が知らないって事あるのかよ」

「言っている意味がわからん?!」

「嘘だろ、ウチの店（酒店）の有線でお前と星野さんの曲流れるぜ
!!!」

「僕と星野さんの曲？」

「ああっ」

「なに寝ぼけた事言っただよ正徳」

「寝ぼけてなんかいないよ、お前が何時も病院で弾いていたフレーズだったぜ」

「僕の弾いていたフレーズ？」

「そうだよっ、だいたいユニット名が【アイコンタクト】だぜ間違いないよ」

「アイコンタクトって、愛コン拓都？」

「なんだよ知ってるじゃん」

「いや知らん、言ってみただけだ」

あれ以来、テレビもラジオも聞いていない僕にとって

鈴原の活躍も、星野さんと僕の曲の話など知るよしもなかった。

久しぶりにラジオをつけると正徳の言っていた通り

僕の曲に星野さんが歌った楽曲【ラブソング】が頻繁に流れている。

「何時の間に録音したんだ」

録音する環境となると、星野さんの誕生日に弾いた時しかなかった。
僕のギターに星野さんの優しい声が柔らかにのる。

リリック（歌詞）はもちろん星野さん。

アイドルブロッガー・ゴットシンお墨付きのリリックだ。

謎のユニット【アイコンタクト】

巷ではそんな見出しで騒ぎ立てる

ボーカルが星野さんだから、当たり前だが
星野愛ネタを追い続けていた
スッポンの梨木が大人しいのが気がかりだった。

そんな事もあり

楽曲の件を聞こうと森田プロに連絡するが
星野さんの全てを任されている長谷川さんが長期休暇中で
詳細はワカラナイまま

僕は事の成り行きを時間に委ねるしかなかった。

あйдルのフェロモン1

『キッキイイーーー』

『ボタン！！』

「なっなにすんだあ！！」

『ドタバタッ、ボタン！』

翌日学校が終わり

校門を出ると突然男が車の中に僕を押し込める。

これって拉致ってやつなのか？

僕を拉致？　した男は見覚えのある顔
スッポンの梨木だ。

「何をする！！　警察に電話するぞお」

「ひゅーうつ、威勢がいいねえ　如月英治をぶん殴っただけはある。

」

「子供だと思ってオチヨクルなよっ！！」

「そんなに尖がるなっ、騒がなければ手を離してやる」

「ふん！こんな事してただで済むと思うなよ！！」

「判ってるっ、ただで済むなんて思ってないよ」

「くっ」

「まあまあ、そんなに興奮するなっ　本番で全力を出し切れなくなるぞお」

「はっ？全力を出し切れなくなる？」

「そうだっギターの演奏に影響するってことだ」

「僕がギターの演奏するってえ？」

「そうだっ今夜の【夜のカウントダウンスタジオ】で星野愛と一緒に演奏してもらう！！」

「星野さんと？」

「そうだ星野愛とだ」

「何を言っちゃってるんですか？星野さんは芸能界を引退してるんですよ！！」

「芸能界引退？　そうだった引退だったな・・・」

「だから僕を無理やり連れて行ったって無意味ですよ」

「意味はある・・・ワシが直接　星野愛から頼まれたのだからな」

「嘘だっ！！　そんな事ある訳ない」

「それがあつたんだよ」

「だいたい星野さんはお前にツケ狙われて迷惑していたんだぞお信じられるかっ！！」

「星野愛の周りでは、信じられない事が結構起こる・・・川崎くんだって見てきたんだろっ？！」

「星野さんがスッポンの梨木に頼むなんて絶対ない！ 信じられるか！！」

「そっなんだよ川崎くん・・・ワシも信じられんのだよ」

.....

「一週間のご無沙汰ぶり、夜のカウントダウンスタジオっ

今夜の出演は何時もよりも

更に豪華なラインナップとなっておりますので、みなさんお楽しみに！！」

正装した男女VJが、軽快なテンポで進行。

CD販売やDL数、着歌など総合データからランキングを決定し
ベスト10圏内に入った楽曲を生出演して歌う番組が

夜のカウントダウンスタジオだ。

番組は

今年の【キラコン】出身者が全員ランクインするということ
でキラコンの審査員の如月英治や坂本あけみ

そして小村鉄馬とジャーニー坂野がゲスト出演し、ランキング発表前から期待が高まっていた。

「それでは早速ランキング・スタートです!!」

スタジオ裏のモニター室には、長谷川修、如月英治。

『ガチャ』　そこに藤原紀子が入ってくる。

「長谷川　　シナシヨウ（品川翔子）だいぶ場慣れてきたみたいね、緊張してなかったわ」

森田プロ所属の品川翔子は、【恋の空手チョップ!!】でじわじわと人気を獲得

写真集との相乗効果で7位にランクインしていた。

「ヒュ〜っ、相変わらず良いプロポーションだね紀子っ」

「ぐっおっ、きッ如月くん・・・何でココに居るのよ」

「俺のユニット【スシネタ】のプロデューサーがココに居ちゃ可笑しいかい？」

「そんな事は無いわよっ別に・・・」

「俺も一応ゲスト（キラコンの審査員）なんで、直ぐに出て行くよ」
赤い顔でもじもじしている様子は、何時もの藤原紀子では考えられない。

そんな藤原に、如月はサーバーから注いだコーヒーを手渡す。

「あっアリガト」

「ところでさあ、紀子に頼みがあるんだ」

「頼み？何よ改まって・・・」

「星野愛と連絡とれるかなあ？」

「ぶっ！！ その話をしたくてコーヒー持ってきたのー！！」
コーヒーを口から噴出し、頬を膨らませる。

「何怒ってんだよ」

「如月君っ、そんな事 紀ちゃんに聞いたら失礼だって」長谷川が

笑いながら如月に話す。

「なんでだよ　長谷川が教えてくれれば、なんにも紀子に聞きますよ」

「だから、さっきも言った通り　愛には、この番組で会えるよ」長谷川が間髪入れずに答える。

「気休めだろっそんな話」

「気休めじゃないわよ如月くん」

「この目で見ると信じてないね」如月はそう言って、両手を上に向けて信じられないのポーズ

「紀ちゃんっ川崎君は順調にこちらに向かっているのか？」

「ええ大丈夫よ、さっきスッポンの梨木から連絡入ったわ」

「川崎君とかスッポンの梨木とか俺の天敵ばかりの話じゃねえ！？」

「今日の夜のカウンタダウンスタジオのキーパーソンたちだよ」

「キーパーソン？」

「そう、愛が最後に仕掛けるアトラクションのね」藤原紀子が口を挟む。

「そして、その扉を開けるのが川崎拓都くんなんだ」
長谷川が返すと如月は

「アトラクション？そんな夢見たいな話、信じられるかよお」と呆れ顔

「そうよ信じられないことが起るってことよ」

「笑わせる話だな・・・お前らの脳ミソ疑うね」

「如月君こんなところで油売ってていいのかい？そろそろキミのユニットの出番だぞ」

「おっとお、こりゃ失礼」イソイソとモニター室から如月英治が出て行く。

.....
.....

.....
.....
.....

横浜グランデューナ国際ホテル

「浜田未来の出番は最後なのか？」

「はいランキングでは最後の出番だと聴いております。」

「ランキングが終わったら、いよいよ星野愛のイベント開始つてこと？」

「その時に浜田未来と鈴原藍の移籍の発表は間違いないと思われます。」

「くそつ、鈴原藍だけならともかく未来ちゃんまで森田プロに引き抜くだとお」

「お嬢様、いや社長がご判断なさった事なので.....」

「結局 里香決めた事しょ、ボキがこのまま引き下がる訳にはいかないしょ」

「もうヤメてください会長お、お嬢様が警察沙汰にしない様に話し合った結果でしょ」

「伊藤くん、何時からボキに口答えするようになったしょ」

「しかし……」

「ボキをこのホテルに閉じ込めれば済むと思ってること自体、浅はかしよ」

「1Fフロアはお嬢様が手配した監視員が数名いらっしゃいますので、ここからの脱出は無理かと」

「えっ」

「誰がここから出るなんて言ったしょ」

「電話をするしょ」

「電話ですか？」

「ボキの知り合いは沢山いるしょ」

「・・・・・・・・」

「まずは、関東スポーツに連絡するしょね」

あйдルのフェロモン2

僕を乗せた梨木の車は、神奈川から都内に入り
首都高速から一般道へ、そして台場に向かっていた。

「ところで間に合ってますか？」

渋々演奏をする気になった僕は、前で点灯した赤信号を見て呟く

「ああっ大丈夫だ」

「大丈夫だったってえ、もう5位の楽曲ですよ」

車載TVで生放送中の【夜のカウントダウンスタジオ】を見ながら
答えると

「ワシが言ってるんだから間違いない」とスッポンの梨木

「だって、スポットコーナーで演奏するんなら4位の後でしょ？」

「何の考えも無しに川崎君を迎えにくると思うか？」

「スッポンの梨木がそんな打算はするハズ無いか……………」

「しかし長い赤信号だな・・・」
スッポンの梨木が青信号が変わらないのに苛立っていると
TV画面の上に突然テロップが流れる。

【星野 愛さん 一週間前に病死していたと関東スポーツ記者の証
言】

(えっ!!!)

「どうかしたのか川崎君」

顔色が変わった僕の顔を見てスッポンの梨木問いかける。

「嘘つき」

「どうした？ 川崎君」

「嘘つきって言ってんだよ」

「どう言っことだ？」

「星野さんが病死したって・・・」

「なんだとお、バツバカな!？」

動き出した車に急ブレーキを踏み、車を路肩に駐車
車載TVを確認して形相が変わる。

「くそつ、誰だこのネタ上げたのは!!」

携帯電話で自社の関東スポーツに電話する。

「もしもし梨木だ、誰だ星野愛の死亡ネタを上げたのは!!」
電話に出たのは助手の大柳

『どうしたんですか梨木さん?そんなに慌てて』

「おっ大柳っワシを裏切ったのか!？」

『ああ、星野愛の件ですかあ』

「あぁってなあー、あの話はお前とワシとのオフレコだろっ」

『こんなスクープをオフレコだなんて、梨木さんは頭が可笑しくなっちゃたんですかぁ』

「くそっ裏切ったな」

『裏切る？ 私たちは芸能リポーターじゃないんですか？』

「もういい」そう言って梨木は携帯の通話終了ボタンを押す。

（確かにお前の言う通りだ、ワシがお前に話したのがバカだった・・・）

.....
.....
.....
.....
.....

夜のカウンタダウンスタジオ
生放送中のスタジオフロア

『ハイっ、ランキング5位と4位を続けて聞いてもらいました。』

『5位のスシネタの演じる【オスシdeディスコ】はあんなに激しいダンスでよくクオリティ高い歌声が出せるのか不思議としか言いようがないですね』

『4位に入った清原麗華の【弾けるラブ・スマイル】、さすが小村さんのプロデースですねえ、曲のサビと清原さんのコブシが絶妙です』

『清原くんの声はコブシだけじゃなく声量もあるので楽曲が激しくても、サウンドに負けないですよ』ゲストの小村が答える。

『声量ならウチの3人が上でしょ、あれだけ動いて歌のクオリティを崩さないんだぜ』続いて如月英治が発言

『バカ言っとなっ!! 清原麗華はお前のおちゃらけユニットと違って格が違う格がっ』

小村の発言に如月英治が反撃しようとするが、ゲスト席のモニターを見て顔色が変わった。

（何っ？ 【星野愛が 一週間前に病死していたと関東スポーツ記者の証言】と言うことだ）

『そう言う訳でCMの後はベスト3の発表です!!-』

生放送中のメインカメラのランプが青に点灯し、CM中の合図に変わる。

『ガタッ』

「何だこの速報ニュースは、星野愛が死んだだとお！？ 長谷川は何にも言ってなかったぞお」

ゲスト席を立ち上がりモニター室に行こうとする如月にジャーニー坂野が声をかける。

「お前が何かしたら星野愛が生き返るのか？」

「煩いっ！！ お前に俺と愛の何がわかるってんだっ」振向きざまにタンカを返す。

「星野愛って言ったらマネージャーとデキテたんだろ、お前が出るまくもないじゃないか」
間髪入れずに小村鉄馬が応戦する。

「くくくっ、片思い男がトチ狂っちゃおしまいだな」
口元を押さえながらジャーニー坂野が不適な笑い

「うるせいなあ、クソジジイ！！」如月は物凄い形相でジャーニー坂野の胸ぐらを掴んだ。

あйдルのフェロモン3

モニター室では

長谷川修の携帯に、スッポンの梨木から連絡が入る。

『すまん長谷川君、ワシの不手際で星野愛のネタが流されてしまった』

「ええっ今モニターで確認しました。このタイミングってのが参りますねえ」

『これで星野くんの希望したことは出来なくなってしまったなっ、本当にスマン』

「大丈夫ですよ梨木さん、バージョンBがありますから」

『バージョンB?』

「ええっバレた場合のバージョンもあるんです。」

『バレた場合のバージョンだとお!?』

「もちろん梨木さんの事を信用してますが、どこからバレルかわかりませんからね」

『ぶはははっ何て女だ星野愛』

「ところで梨木さん、川崎君は大丈夫ですか？」

『大丈夫ではなさそうだな、さっきから黙りこくっているよ』

「そうですか……」

『それに』

「それにどうしました？」

『何故か道路が大渋滞で車が動かん』

「渋滞ですか……うん、バージョンBがあっても、どうにもならないか……」

すると、梨木と長谷川の会話に藤原紀子が割って入る。

「だったら中継カメラをそこに持っていけばいいんでしょ」

「でも紀ちゃん道路が渋滞中なんだぜ」

「渋滞中でもバイクなら行けるんじゃない？」

「バイクか・・・」長谷川がポツリと言うと

『渋滞のすり抜けかぁ・・・だったら間に合う。長谷川君、詳しい場所を言うからメモってくれ!!』

梨木が早口で答える。

「でもバイクって誰が乗っているんだよ？」

「うちの事務所の坂本あけみ!!」

.....

.....

再び

生放送中のスタジオフロア

ゲスト席後側で本番まちの鈴原藍と浜田未来がモニターに流れたニューステロップを見ていた。

「あれえ、星野さんの件ってマスコミに話してないって言ってたわよね鈴原さん」

「えええ、長谷川さんと梨木さんから聞いていた話とは違っちゃってますよねえ」

「なんかワクワクしてこない?！」

「何楽しんじゃってるんですかハマミク（浜田未来）さん、不謹慎ですよ」

「予測不可能な展開って言ったら、星野さんのチューコッタ事件みたいになったりしてね」

「予想不可能だなんて、生放送中なのに怖くないんですか？」

「ふふつ、あんたを水上の爺から助けた時からもう怖いもんなんじゃないわよ」

「あの時は本当にありがとうございます」

「しかし鈴原さんも罪な女よねえ、私に助けられた事をまだ彼に言っていないでしょ」

「ワザとじゃないですよ」

「解っていないなあ、あんたの王子様は責任感じちゃってると思うよ」

「あの後、拓ちゃんが入院していたりお父さんとお母さんがエムベックスの会長を血祭りにしたりとイロイロありすぎてタイミング逃した感じですよ」

「ホント鈴原さんって真面目なのか不真面目なのか謎だわ」

【ツカツツカツツカツ】

会話中の2人の前を藤原紀子が横切り、早速ゲスト席の坂本あけみと話し込む。

『・・・事情はそう言う訳、だからバイクで川崎君の所に向かって
！！』

「わかったわ」

そこに、ジャーニーー坂野の胸ぐらを掴んでいた如月英治がやってくる。

「どう言う事だっ！！ 星野が死んだだとお」

「ごめん如月君、今詳しく話してる時間が無いの」

「中継カメラは、このリュックに入ってるから早く行って あけみ
！！」

【タタタツ】

「待ってえ坂本さん！！ 私、バイクの後ろに乗って行っちゃ駄目
ですか？」

そう言って鈴原が、スタジオをでようとする坂本あけみを静止する。

「何言ってるのよっ、次の歌う出番はあんたじゃないの？」

「でも、如何しても行かなきゃ駄目なんです。」

「だったら歌いながら行けばいいんじゃない？」二人の言い合いにハマミクが答える

「はあ〜？」

「私が撮ってあげるわ」

「移動しながら歌うか・・・いいアイデアだと思うけど、バイクで移動中の鈴原さんをどうやって撮るのよ？浜田さん」坂本あけみがハマミクに聞く。

「如月さんって、パパラッチ対策でバイクに乗ってましたよねえ」

「ああハーレーに乗ってるよ」

「じゃ決まりい〜早速いきましょ」

「ちょちょちよっと待ってくれよお、何で俺までえ」

「星野さんの件を詳しく知りたいんですよ」
そんな感じで話は無理矢理まとまり、4人は地下駐車場にイソイソと向かう。

あйдルのフェロモン4

「ムキムキっ 直ぐに渋滞になったしよねえ、さすが旧友だしよ。」
何処に電話したのか不適な笑いの水上会長

「これで夜のカウンタダウンスタジオでの企画はオジャンになるっ
しよね」

先ほど連絡した関東スポーツの大柳から情報を収集し、妨害工作を
済ましたのだ。

「伊藤くん、ワイン貰えるかな」

「1970年のロマネ・コンティが飲み頃かと」

「ああ、頼むしょ」

「かしこまりました。」

（この後の番組進行が見ものしよね）

ホテル支配人の伊藤が、自らワインのコルクを鮮やかな手際で抜き
取り

丁寧な動作でグラスに赤ワインを注ぐ

その動作を見ながらゆったりとした仕草で葉巻をゆらす会長の水上
部屋中央の壁にプロジェクターで映し出される大型の画面には
CM明けの夜のカウンタダウンスタジオ。

番組進行するVJがひき続きランキングを発表する。

『第3位は至上最強のスマイルガール、鈴原藍さんのラブ 100
%です!!』

曲の前奏が流れはじめると

スタジオのショットから地下駐車場のライブ映像に切り替わる。

【ラブ ♪ラブ ♪ラブ ♪ ♪ラブ 100パーセントオ ♪】

画面に映し出されたのはバイクの後部座席に座り
マイクを握る鈴原藍

鈴原の歌と一緒に、地下駐車場にこだまするバイクの爆音
そして急発進

その動作を俊敏に捉えるカメラワーク

バイクの走行でなびく鈴原のミニスカートからは鍛えられた
綺麗な太もが見え隠れする。

国道に出ると、道路は結構な長さの渋滞

鈴原を乗せたバイクは巧みにその車の間をスルスルと走り
ライブカメラは絶妙な速度でその姿を捉えたままだ。

交差点で停止した瞬間

カメラはズームで鈴原藍の表情を映し出す。

終始危なげな状態で歌う鈴原の顔は、何故か楽しげな表情。

【貴方の心に注入するわ ♪ ラブ ♪ ラブ ♪ ラブウー】

【インスタントなラブじゃないのよ ♪ ラブ ♪ ラブ ♪ ラブ ♪ ♪ 本物のラブよ】

【ラブ ♪ ラブ ♪ ラブ ♪ ラブ 100パーセントオ ♪】

横浜グランデューナ国際ホテル プロジェクターに映し出される鈴
原藍

「何だこれは?!」 驚いた表情の水上

飲みかけたワイングラスをテーブルに置きソファから立ち上がる。

「こんな感じの進行、どっかで観ましたね」伊藤が呟く

「この間やった、梨木隆弘の特ダネ特捜部隊しょ……」

そう言って携帯電話をかける、「交通課の木村部長にまわしてくれ」

再びバイクで移動中の4人

2台のバイクは赤信号で停車中

『この調子なら次のハマミクが歌ってる間に現着できそうだが』
ハマミクを後部座席に乗せた如月英治がコメントすると

『当たり前でしょ、誰が運転してると思ってるの!?!』と強気の発言をする坂本あけみ

そんな会話を交わす事が出来るのは
鈴原藍が歌い終わった後に、スタジオに画面が切り替わっていたからだ。

『ハマミクさんカメラこっちに渡してください』

『大丈夫かしら、結構重いわよ』

『大丈夫ですよ、私けっこう力持ちなんですからあ』

『あら頼もしいこと言っちゃってえ大丈夫かしら?!』

『もちろん大丈夫ですよ』

『フフフっ、それじゃ奇麗に撮ってもらう事を期待しているわ』

『信号青だぞお!! お前ら、くっちゃべってないでしっかりつまつてろお』

『放送もこっちに戻るわよ』如月と坂本が相次いで叫ぶ

『それでは今週のランキング第2位、ご存知歌姫 浜田未来で私の恋はGTR です!!』

【心のおランプがGOサイン♪ライバルなんかには負けられないわよ♪初めのコーナー全開よおお♪】

【先行者なんてすり抜けちゃうから♪突然えん貴方に接近遭遇♪そんなスリルにハートはドキドキ♪】

【私の恋は♪私の恋は♪いつだあてえ♪♪じいていあああゝるう♪】

白の皮ツナギにピンクのヘルメット姿の浜田未来はレーサーのコスプレの様子

歌の歌詞とバイクで走行中と言う事もあり、歌う浜田はノリノリだ。

【ぶおん】 【キキィ!!】

赤信号でもないのに、渋滞の間をすり抜けていた2台のバイクが停止
異変に気づきつつも浜田は歌い続ける。

前方に警官、そして移動交番車両の上に設置されている電光掲示板には通行止めの文字

如月英治と坂本あけみは、ヘルメットのカウルを上を開き顔を見合

わせる。

「なに？ 通行止めなのお」

「なんでだよお、他に迂回する道なんてねーぞお」

「警察を突破するワケにいかないわよね・・・」

「ここからバイクを降りて走って行っても放送時間に完全に間に合わねえ」

「何か打つ手はないの」

「もう少しだつてのに、くそっ!!」

あ이드ルのフェロモン5

【横浜グランデユーナ国際ホテル】

「ムキキキツ、万事休すしょ」

走行不能のバイクで歌う浜田未来をプロジェクト画像が映し出す。

「未来ちゃんの森田プロ移籍の件も、これで発表する状態じゃないしょね」

そう言つと先ほど 飲みかけたワインを口に運ぶ。

「うむ、コンプリート」

「完了という事ですね。」 伊藤が会長の傍らで再度ワインを注ぐ

「勿論、ワインの味もコンプリートしょ」

余裕の笑みを浮かべる水上会長

しかし、プロジェクトのTV映像を見て徐々に表情が変わる。

【ピーポオ、ピーポオ!!】

警察が封鎖している国道から救急車が2台のバイクの前に急停車

後部の扉が開くと

中から現れたのは、なんとゴットシン

「麗しき鈴原藍殿、そして永遠の歌姫ハマミク殿 オマタア
そう言つて、白衣の姿のゴットシンがコマネチのモノマネ

「バカやってないで、早く全員のせちやってえ」運転席から婦長さ
んが叫ぶ

「警官にバレル前に、みんな乗る乗るでゴザル」
3人はイソイソと救急車に乗り込むが、ハマミクは歌ったままライ
ブカメラに向かっている。

2番の歌詞が終わり前奏中の中、ヘルメットを取り白の皮ツナギを
脱ぎ捨てると
中からホットパンツ姿のセクシーな衣装

そして、クチパクで「オ・マ・タ・」さらにコマネチの動作

今までクールなイメージで通してきた浜田未来には有り得ない行動。

「ハマミクさん間に合わなくなるから早く!!」鈴原の呼びかけで
浜田も飛び乗る

救急車の中で歌う浜田未来の表情は晴れやかだ。

【ジャガジャガン♪】そして歌が歌い終わると鈴原も一緒にカメラにカットイン

「突然ですがあ　私、浜田未来と鈴原藍は森田プロに移籍することになりました」

「理由は森田プロの社長が鈴原さんのお父さんだったからです。」

「はいっ、念願叶ってお父さんを見つけることが出来ました、皆さんありがとうございます！！」

「えっ何で私まで森田プロに？　なんて思ってません？！」　恍けた顔でハマミクが言くと鈴原は

「思ってます！！思ってます！！」と間髪入れずに答える。

「私と鈴原藍が仲良しだからでーす！！」

「そうなんです」

「こんな２人ですが」

「移籍しても応援してくださいね」

「おねがいしまー！ー！ー！ーす！ー！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

【ブッハッ】

「何がおねがいしまーす だしょ」

口に含んだワインを吹き出し仁王立ちの水上

「かつ会長お、あまり興奮すると血圧があ

「うるさい！ー！」

「しっしかし・・・」

「これで完全にミクちゃんも森田のところ決定しよね」

「もともとお嬢様が決めていた事ですよ会長」

「里香の話はするんじゃないしょ、ところで伊藤っ！！ ちゃんと

テレビ局に人を送ったしょかあ」

「はいっ、そろそろスタジオに着いたところかと・・・」

「ならいいしょ、念のため長谷川の所に手を打っておいて良かったしょ」

- - -
- - -
- - -

【スタジオのモニター室】

「良かった、どうやら間に合いそうだな」

鈴原と浜田が映る中継モニターを見ながら長谷川が生前に録画しておいた星野愛のDVDを機材にセットし何時でも再生出来る状態にスタンバイ

『ガチャ』 『バタン』 『バタバタッ』

そこに黒尽くめ男たちが数名が足早に入ってくる。

「誰だ!?!」

無言のまま男たちはモニター室を物色

「なッ何をするっ!!！」

「これが放送予定のディスクなのかな」

リーダー格の男が、先ほどセットした機材からDVDを取り出してしまふ。

「やめろお!!！」 3人に取り押さえられた長谷川は制止することすら出来ない。

「こちらにも、もう一枚ありました。」

長谷川の鞆を物色していた男が、もう一枚のディスクも見つけてしまふ。

「頼む!!！ 頼むから返してくれえ!!！返してくれたら何でもする、お願いだあ!!！」

「残念だが、この2枚のディスクはこうしろと言われているんでね・・。」

『バキッン!!！』 『バキッン!!！』

リーダー格の男は2枚のディスクを長谷川の目の前で次々と割ってしまう。

「なっなんてことを……………」

床に手を着き、うな垂れた長谷川の目の前には
無惨にも真っ二つに割られたディスクがあるだけだった。

あйдルのフェロモン6

【大渋滞で身動きの取れない梨木の車】

車の前で救急車のサイレンが止まる。

僕と梨木はサイレンの音に気づきつつも言い争ったままだ。

「頼むから演奏してくれないか」

「星野さんがいないのに、意味がわからない!!」

「星野愛にはTVモニター越しに会える、だからこの場所でも川崎君と一緒に演奏できるんだぞ。」

「星野さんは死んだんだ、そんなビデオに撮った偽物の星野さんと一緒に演奏なんて出来るか!」

「偽物だつてえ? ビデオでも星野愛は星野愛だ!!」

「僕は納得できないっ」

「納得できなくても星野愛が川崎君と競演したいと言い残したんだよ」

「信じられるかっ!」

「頼むから信じてくれないか?」

「信じる? だったら始めっから星野さんの事を教えてくれてもよかったじゃないか」

「はじめから知っていたら100%の演奏が出来たのかい川崎君」

「・・・・・・・・。。」

「100%とは言わん・・・だからギターを弾いてくれないか?」

「本物の星野さんじゃないのに・・・一緒に演奏なんて出来る訳ないだろうっお!!」

「ワシの為じゃない、星野愛の為に弾いてくれ・・・頼む!!」

「星野さんが死んじゃってるのにこんな事するなんて、みんな才力

シイよっ
」

「・・・・・・・・。。」

「悲しすぎて辛くて・・・なのに、こんな馬鹿げたこと出来るワケないだろおお!!」

『ガチャ』

僕の座っている席のドアが外から開かれると　そこには鈴原。

「拓ちゃんっ！　何時からそんな意気地なしになっちゃったのぉ！
」

『バシっ』そして鈴原は僕の顔を平手打ち

「すっ 鈴原っ・・・・・・・・」

「馬鹿げた事だとか悲しすぎて辛だとか！！　拓ちゃんだけがそう
思っていると思うのぉ!!」

「・・・」

「一番悲しくて辛いのは、恋人の長谷川さんでしょ！！ それなのに長谷川さんは泣き言一つ言わずにやってるのよっ、拓ちゃんもしつかりしてよっ」

「長谷川さん・・・。」

「だから長谷川さんの為にも演奏してちょうだい、そしてみんなの為に成功させて！！」

「・・・わっわかった・・・わかったよ鈴原、演奏するよ」

「そこなくっちゃ」

「・・・ゴメン鈴原」

「謝ることなんて無いわっ、星野さんと拓ちゃん2人でアイコンタクトなんだからね」

「いや・・・謝ったのは、そのことじゃなくて・・・」

「え？ どういう意味よ」

「僕は鈴原を助けることが出来なかった・・・」

「ほぐらあ、言った通りに責任感じちゃってんじゃん」
両腕を腰に据えてハマミクが偉そうな素振りで2人の会話に割り込む。

「だってえ、色々あったって言うか、何て言うか・・・だからアノ話は・・・」

鈴原はシドロモドロで答えにならない、すると見かねたハマミクは
「そんじゃカメラがこちらに切り替わる前にワタシが全部説明してあげましようかあ!？」
そう言っ、イヤラシイ目つきで鈴原を右腕で突つつく。

.....
.....
.....

【夜のカウンタダウンススタジオのフロア】

いよいよランキング1位の発表

『今週の1位はあ、アイコンタクトが歌う 【ラブソング】 です』

『トップテン圏外からイキナリの1位獲得したアイコンタクト』

『謎に包まれたユニットの正体が今日、この夜のカウントダウンスタジオで明かされます!!』

男女のVJが興奮気味で紹介

4位の後にやる筈だったスポットコーナーを省略し

1位にランクインしたアイコンタクトにスポットをあてこのユニットの謎について解説していく。

一方、モニター室の長谷川修は真つ二つに割られた2枚のディスクを見て放心状態

グツタリと肩を落とし床に座り込んでいた。

「愛・・・残念だがゲームオーバーだ・・・。」

(・・・川崎君には申し訳ないが、スタジオに行って詫びるしかない・・・)

長谷川修はそう言うて決心したように立ち上がる。

【ガチャ】

長谷川がスタジオの扉に向かうと、反対側の扉が開く
先ほど黒尽くめの男たちが入ってきた扉だ。

あイドルのフェロモン7

「まだ間に合うかしら」

入ってきたのは神谷医院の看護師 藤川裕子

「藤川さん・・・ごめん、今からスタジオに入らなきゃいけないんだ」

「長谷川さんの情けない顔、似合わないと思いますよ」
そう言つて鞆からディスクを取り出す。

「星野さんから念のためつて、預かってたディスク・・・必要ですよね」

「預かっていたディスク？ そんな物ホントにあるのか!？」

「何かあつたら長谷川さんに渡してくれつて」

「3枚目があつたなんて聞いてないぞお」

「長谷川さんには知らされてなかったんですね」

「それが本物なら、ギリギリセーフだ」

「良かったあ、時間までに間に合って・・・」

「でもタイミングが良すぎるな、誰の仕業だ」

「テレビの状況みてたら持つて行かなくてもイイって思ってたんですけど、慎也さん（シンヤ）が持つて行った方がいって」

「ゴットシンは何でもお見通しか・・・」

「長谷川さん、早くしないと時間じゃないですか？」

「ああっ、わかっている！！」

（これで、少しは川崎君の役に立ったのかしら）
長谷川がディスクをセットしている姿を見ながら藤川は上手く行くことを願った。

スタジオでは一通りアイコンタクトについて解説が終わり
いよいよ楽曲の演奏の時間

『ベールに包まれたユニット アイコンタクト それではお願いし
ます!!』

VJの合図と共に、長谷川修がセットしたDVDが再生を開始する。

映し出されたTV画面には、もちろん星野愛

「ハローみんな元気 アイコンタクトのボーカル星野愛です。」

ワンピースに長めブーツ、そして手袋

すべて白に統一された衣装で登場した星野さん

やっぱり笑顔が素敵だ。

「あまりテレビに出てないので死んだとか噂に流れてませんか？

私に断りなしで、そんなの情報つかっちゃたりするマスコミさん

少しは自重して頂きたいものですわ 私はもちろん死んでませんか
ら（笑）

私は今でも、火星でゆったり休暇中ですからね（フッフツ）

冒頭から

放送中に流れた臨時速報を打ち消すコメントをぶちかます。

おつと相棒の拓都くんは何処かなあ？」

テレビの画面が二元中継に変わり、僕らのいる場所がライブで映りだす。

「あつあつはじめまして、かつかつ川崎拓都です。」ハニカミながら僕

「元気そうね」「星野さんが手をふって答える。

「ええつまあまあ元気です」僕はVTRだと言つことを忘れ、素直に答えをかえしていた。

「まずはこの曲が出来た訳をお話しなくっちゃね」
星野さんは改まった表情でマイク越しに話す。

「そこにいる、川崎くんが作った曲を聴いちゃったら
どうしても詩をつけてみたくなっちゃってね

そしたら自分でもビックリするぐらい凄くいい感じのデキになった
やって

マネージャーの長谷川に相談したら、みんなにも聴かせようってな
ことになったの

だからスッポンの梨木に宣伝部長になってもらって

いろいろやってもらっちゃったってわけ

それがこの楽曲【ラブソング】ってことなの」

モニター越しに見た星野さんは

やっぱり綺麗で、しなやかな振る舞いで、色っぽい喋りで
どんなタレントやアイドルにも負けないフェロモンを放っていた。

僕の前でモニターを覗き込む 如月英治が何故か涙を流して泣いて
いる。

スッポンの梨木はハンカチで目頭を押さえ、車の陰に消えていった。

そんな状況で

僕は鈴原とハマミク、そしてあけみさんに見守られながら
鈴木バイオリン製のギターをケースから取り出す。

【ボロロン】弦の音色を聴いて微調律し何時でも演奏できるようにスタンバイ。

――――

その様子を観ていた、横浜グランデューナ国際ホテルの水上は

「ホントに 長谷川の持っていたディスクを処分したと報告があったしょ？」

「はっははい、間違いありません。会長が調べた通りディスクは2枚あったそうで
両方のディスクとも破壊したと・・・・・・・・」

「なら、どうして星野愛がテレビに映っているしょね」

手に持ったグラスが怒りで震え、中のワインが床に飛び散る。

「ぬぐぐぐうー」

「会長おあまり興奮すると血圧が・・・」

「うるさいしょ」

「しかし……」

「こうなったらテレビ番組ごと闇に葬るしよねえええ」

水上は携帯電話をかけようとテーブルに手を伸ばすが
口から泡を噴いて、そのまま倒れこむ。

「ぐうううう」

「かつ会長おお、大丈夫ですか！！」

「うおうおおおお」

「たっ大変だあ！！ きゅっきゅ救急車あ！！」

【番組モニター室】

「このディスクはバージョンBの複製だったんだな」
モニターを見つめる長谷川修が進行の状況をみて呟く

「そうなんですか？」

藤川裕子が渡された時の状況を思いだしながら言葉を返す。

「渡されるときに何か言っていなかったかい？」

「ごめんなさい、内容までは聞いてません」

「いやいいんだ、複製だろうがリメイク版だろうが川崎君が演奏する気になってくれれば問題ない」

「最初で最後の共演ですね」祈る様な手つきでこたえる藤川

「ああつ後にも先にも、これ一回きりだ」
そう言つと長谷川は子供のよ様な笑顔で再度、モニターの星野愛を見つめる。

あйдルのフェロモン 8

「私が鈴原さんを助けたって知ったら、王子様（川崎君）の雰囲気変わったわね」

「そうですか？」

「何故だか気が置けないと言うか、魅入ってしまう存在ね」

「何言ってるんですかハマミクさん、何時もの拓ちゃんですよ」

「ううん 瞬時に観ている人を惹きつけるってことは、彼もこの業界の素質を持っているってことよ」

「あははっ、拓ちゃんがですか、「冗談言わないでください」

「冗談なんかじゃないわ、貴方と同じアイドルのフェロモンを感じるわ……………」

「変な事言わないで下さいハマミクさん」

「私が言っただから間違いないわ」

「そんなこと言って、拓ちゃんに惚れちゃたら駄目ですからね」

「生で演奏聴かされたら、惚れちゃうかもよ　フフフ」

「ギターのスタンバイはイイかしら川崎くん」
モニター越しの星野さんから僕に声がかかる。

「ええっ、何時でもOKです!!」

僕はもう演奏する事に迷いはなかった。

緻密に計算された星野さんの喋りの間は、本当に会話をしているのと同違うほどだった。

星野さんは胸に手を当て、大きく深呼吸
アングルが顔のアップに変わり、星野さんが笑顔で話す。

「じゃ私の役目はここまでよ」

「えっ？」

「この楽曲を歌うのは鈴原藍さん アナタよ!!」

「すっ 鈴原っ!？」

僕は思わず横にいる鈴原に向かって声を上げる。

「えっ ええっ？ 私が歌うんですか??？」

どうやら鈴原も聞いていない話の様だ。

「そうよ、この詩はアナタたち2人の為に作ったものの」

星野さんが当たり前前の様に答えると鈴原が言葉を返す。

「でも、これはアイコンタクト（星野さんと拓ちゃん）の曲じゃないですかあ？」

モニターに映っているのはVTRなのに

ホントに会話している様に会話が進行していく

僕らは既に録画されている星野さんと話していることを忘れていた。

「この曲を歌うユニット アイコンタクトのアイは私の愛^{あい}じゃなく
て鈴原さんの藍^{あい}なのよ」

「そっそんな……。。。」

困惑している僕ら2人に向けて星野さんは真剣な顔で続けて話す。

「そう言うワケだから本物のアイコンタクト メンバー 鈴原藍さん、そして川崎くん 後は任せたわ」

最後にそう言うと言顔を残し、星野さんの映像が途絶える。

映像が途絶えたということは、すべてが僕ら2人に進行がゆだねられたのだ。

「どうする鈴原、歌えるか？」

「何度も聴いてた曲だから歌詞は大丈夫なんだけど、人前で歌った事がないからチョツチ心配」

「なら大丈夫だ」

「どうして大丈夫ってワカルのよお？」

「だってお前は本物のメンバー　鈴原藍なんだろ」

「何それ」

鈴原が僕に突っ込みを入れたところでギターを弾く

【ポロロン♪】

柔らかい

そしてゆっくりとした曲調ではじまる前奏

そこに鈴原の伸びやかな歌声がのる。

【ねえ♪】

【初めからわかっていたんでしょ？　こうなるってこと♪】

【遠回りしても近道しても行き着くところは同じなんだって♪】

【アナタの奏でるメロディが♪教えてくれた道しるべ♪】

【♪♪♪すべては心のままに♪赴くままに】

【風の様に♪ながれるリズムはアナタの鼓動♪】

【もう迷わない♪もう迷わない♪】

事の成り行きを心配そうに観ていた人々たちは
次第に2人の歌と演奏に見入っていく

【ザンザンザザァン♪】

【ザンザンザザァン♪】

曲の中盤でギターのサウンドは軽快に流れを変える。
既に歌う鈴原からは不安な表情は消えていた。

僕らはユニット名さながらに
鈴原とアイコンタクトしながら演奏し歌い続ける。

【ねえ♪】

【初めからわかっていたんでしょ？こうなるってこと♪】

【好き♪とか言わなくても♪行き着くところは同じなんだって♪】

【アナタの奏でるメロディが♪教えてくれた全ての答え】

【それがアナタの♪ラブソング♪】

【それがワタシのラブソング】

曲のエンディングで激しく

そして情熱感を讃え印象的なフレーズで幕を閉じる。

「クツクツクツ・・・そう言うことだったのか・・・」

モニター室では、長谷川さんが涙目で笑いながら

僕のギターで歌う鈴原を観ている。

「ここで鈴原くんに歌わせるなんて考えもつかなかったよ」

「よかったですね上手くいつて、でも星野さんの歌声聴けなかったのは残念です」

藤川が長谷川の傍らにきて言葉をかけると

「いいじゃないか、こんなにすばらしい歌とギターの演奏が聴けたんだ」と長谷川さん

スタジオのゲスト席、小室鉄馬とジャーニー坂野は画面に映る2人を観て、啞然としている。

「なんなんだ・・・こいつらは」

「クオリティが高いとか、そう言う話ではないぞ」

「存在感といい、引き込まれる力がある」

「星野愛が持っていたものと同じもの・・・なのか・・・。」

「フェロモンか!？」

「うむっ、これがアイドルのフェロモン・・・。」

.....

この日以来

僕と鈴原はアイコンタクトとしてデビューした事となり

星野さんの発言は自身の引退宣言したとみなされた。

僕の身边もまた、変わりだし

自分の考えの整理もつかぬまま、テレビやラジオへの出演と

今までの生活では考えられない展開

テレビの威力は僕の考えを遥かに超えているようだ。

それでも鈴原は「芸能活動と勉学の両立を目指すのだ」と
受験のカリキュラムも忘れずこなしている。

一緒に行動している僕は、想像通りに巻き込まれる毎日

僕は

そんな多忙な日々でも楽しかった。

一緒にいる相手が鈴原だから

その後

浜田未来も加わった森田プロは慌ただしさを激増し
あっと言っ間に数ヶ月が過ぎようとしていた。

僕は何故か大学を合格してしまい

鈴原と一緒に来月から学業と音楽の世界と二足のわらじ確定

【森田プロ事務所】

「おめでとう川崎君、そして藍」鈴原の親父さんが珍しく事務所に顔をだしコメントする。

「ありがとうございます。」

「2人には大変だと思うが、これから勉強とここの仕事をこなしてもらうことになる。」

「そんなこと言われなくてもワカッテルわよ」バカにしないでって顔で鈴原が父である森田社長にかえすと

「藍っ、話は最後まで聞いてから返すように!!」と怒られる。

「だつてえ」甘える様に答える鈴原は父との会話を楽しんでいるようだ。

「ウチの事務所もタレントの数も増えて、個々のスケジュール管理が難しくなってきた。」

「そうですね、浜田さんの殺人スケジュールを長谷川さんが捌いた上に僕らの管理してるんですよね」

「そうだつ、新人関連も藤原くんに管理してもらってるがもはや限界だ。」

そこで、長谷川をお前たちのマネージャーから外し藤原くんにも中堅の管理に配属する。」

「長谷川さんを僕らのマネージャーから外すんですか？」

「駄目よっ私たちの管理は長谷川さんじゃないと！！」

すると、今まで社長の横で黙りこくっていた長谷川さんが口を開く
「別に俺じゃなくても君たちのマネージャー適任者はいるよ」

「そんな事言わないでくださいよ長谷川さん」

「私たちを見捨てないでください。」

「見捨てるなんて とんでもないよ」

「そうだ、その為に新しく2名のマネージャーを採用した。」
社長がそう言つと長谷川さんが隣の事務所のドアを開ける。

【ガチャ】

「お・ま・た」

出てきたのは、なんとゴットシン

「えええええっ!! ゴットが僕らの マネージャー!!」

「鈴原殿、タクト殿 ご無沙汰でゴザル」

「こらこら神谷くん、キミは新人の育成係だよ」

社長が鈴原に触るなとばかりに首根っこを引っ張る。

「社長、乱暴はイケナイルージュマジックでゴザル」

ゴットシンが森田プロ、新人育成の担当に配属

いままでの行動や活躍をみれば、新人育成には適任だと僕も思う配属だ。

しかしゴットシンが森田プロに来るなんて、ホントに驚きだ!!
僕らの担当じゃないにしても、一緒に仕事が出来るとは思わなかった。

「ゴホン、君たちの担当になるの次の人だ、入りたまえ!!」

【カツ・カツ・カツ】

「お・ま・た」

ハイヒールの音を響かせて入ってきたのは

なんと 星野さん!!

『 ! 』

「あれっゴツトの真似してみたんだけどウケなかった!？」

『どつどつどつどつどつ、どう言うことですか!？』

僕と鈴原が同時に答えると平然としてかえす星野さん

「あら驚かないで、火星から地球に戻ってきただけでしょ（笑）」

「かつ火星って、冗談言わないでくださいよ」

「冗談なんかじゃ無いわよっ、現にココにいるじゃない フフッ」

「えっええええー………っ」

色っぽい話し方、振る舞い、素敵な笑顔

少し痩せた感じだけど、どう見ても星野さんそのものだった。

「さあ今日からみっちりスケジュール管理させていただきますからね」

「ホントに星野さんなんですよね!？」鈴原も信じられない様子

「本当も嘘も無いでしょ鈴原さん、私はここにいるんだからさっ
」

「僕たち、星野さんが本当に死んじやったって思っ
て心配したんですよ」

「心配ご無用、星野は無敵よ」

そんなノータンキな星野さんの発言はさておき
事実を長谷川さんにこっそり確認

死んだ真似をした星野さんと梨木が面会した後
スエーデンの病院に移って手術をしていたとのこと。
もちろん無事成功して、目の前の星野さんがいるらしい。

僕は

このノータンキなアイドルのフェロモンを持った星野さんに
ゲイノウカイの何たるかを仕込まれることとなるが
いったいどうなるのだろうか？

前途多難が予想されるこの先に嬉しい不安がよぎる。
隣にいる鈴原も顔の表情からも同じ考えの様子が伺える。

「何ボーとしてるのかしら川崎君」星野さんの鋭い指摘

「いやっ何でもないです……」

「鈴原さんも大丈夫かしら？」

「えっあっハイ、大丈夫です。」

「じゃ早速お仕事してもらっても大丈夫かしら」

「明日のランキング番組ですか？」

「うううん、今夜の番組 特ダネ 特捜部隊よ」

「すっスッポンの梨木の番組ですか!？」

「そうよ」

「でも梨木さんは星野さんに騙されて怒ってるんじゃない……」

「怒ってるかどうか何て解らないわ」

「どう言うことですか？」

「だってアポ無しですもの」

「えっえー！ー！ー！ー！ー！」

僕も鈴原も想像を超える展開で進む

星野さんのスケジュールはジェットコースターの様だ。

でも

そのエピソードは、星野さんでは無く

僕らがこれから作り上げていかなければならないんだ。

それがアイドルのフェロモンを持った

僕ら2人の物語だから

「こらっその2人！！　ボヤッとしてないで行くわよお」

「フフフ　了解ですー！」

あйдールのフェロモン　おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2678f/>

あйдルのフェロモン

2010年10月13日10時12分発行